569
569-61
1200501517030

28. 2. 11

特本

世界大衆文學全集

# 家なき兒

菊池幽芳

昭和三年
改造社

帝國圖書館藏

Y61
569
61

# 家なき兒

# 家なき兒

## 村にて

九歳になるまで私はお母さんがあると思つて居た。私が泣くと、その人がすぐ傍へ來て私の涙の乾くまで優しく抱いて搖ぶつてくれた。私はつひぞその人に接吻されずに臥床へ入つた例は無かつた。師走の身を切る風が、凍た窓玻璃へ吹雪をへばりつける夕には、其の人はいつも私の冷えた兩足を擁へて暖めながら歌をうたつて聞かした。その歌の節や文句もところ〴〵なほ私の耳に殘つて居る。

野良に家の牝牛を連出してる時、驟雨に逢ふ事も度々であつたが、その人はきつとどこからか私の傍へ駈けよつて來て、私を肩車に乘せ、毛織の裾をまくつて、すぽりと頭から着せかけながら私を連れて歸り〴〵した。私が仲間と喧嘩でもして泣かされて來やうものなら、その人はきつと得心の行くやうに私を慰めてくれたり、また私の不心得を諭したりした。

私への物の云振や、私を見る慈愛の眼光や、その可愛がりやうや、私を叱る中にも優しみの籠る事や、それやこれやで私はその人はお母さんだと許り思ひつめて居た。

私がその人を生の母でないと知つたのは次の通りの仔細――。

私共の住んで居た村は鯖野とて佛蘭西の中央部の至つて寂れた貧しい村だつた。村の貧しいのは百



姓の怠慢る爲ではなく、全く地味のせゐで、見渡す限りその邊一帶羊齒や灌木の生えた荒地つゞき、形容には小高い丘がそこ〳〵に起臥して居るが、その丘の上はいつも風當りが強く、其ため大きな木が育たぬかと思ふ程だつた。栗や櫻などの大木はそれでもそこ〳〵の谷間には生えて居た。瀨の早い小川がいくつか谷間を流れて、末は皆ロアール河にと落ちて行く。さゝやかな耕地や人家は皆小川傳ひにあつて、私はその飛び〴〵の一軒家に、川瀨のせゝらぎを搖籃歌と聞きながら大きくなつたのだ。

この物語の始まるまで私は男といふものをこの家で見た事が無かつた。と云つてもお母さん（と思ひつめた人）は寡婦では無かつた。所天は石工でこの土地の働き人が皆巴里へ出稼に行く通りに、この人も巴里で働いて居た。けれど私が物心を知るやうになつてからといふもの、つひぞ村へ歸つて來た事がない。たゞ時折村から出た同じ仲間の誰彼が歸つて來る時に、それに言づけては若干かの金を届けさす。別段、口上といふほどの事もない。いつも極り文句で、

「直おッ母、權は達者だ。いつも仕事があるから安心しなせえ。そーら、これが頼まれて來た金だ。勘定して受取つてくんねえ。」

直は夫だけで滿足して居た。所天が決して巴里から歸らぬのを見て、夫婦仲が面白くない爲だらうと思ふと間違ひで、巴里ほど金の儲かるところは無いから、働けるまでは彼地で懸命に働き、末は氣樂に暮せるほどの貯金も出來た上で、歸つて來るのだと、直はいつも私に云ひ聞かした。

十一月の或夕暮だつた。私が戸外で焚附の小枝を折つて居ると、見知らぬ男が家の木戸の前で止つて、直おッ母の家はこゝかと聲をかけた。さうだと答へると、その男は木戸を押て入つて來たが、私はこんなに泥まみれになつた男をつひぞ見た事がない。帽子までハネ上つて、靴などは泥田から引出して來たやう、一目で惡い道を何里も歩いて來た事が知れる。

人聲を聞きつけて直が出て來た時に、此男は閾を跨いで入つた。出合がしらに、

「巴里の便をもつて來たのだが――。」と男は直に云ひかけた。けれどもいつもの調子ではない。「權は達者だ。いつも仕事がある。」と聞馴れた言葉が續いて出さうにもなかつた。直は兩手を組合せ、もう震へ聲になつて、

「權藏がきつとどうかしたのだ。おゝ、神樣！」

「併し直おッ母、そんなに驚いちやアいけねえ。權は怪我をした丈だ。死やアしねえから確かりしねえ。たゞなによ、ひよつとしたら不具になるかも知れねえがな、なにそんな事もあるめえ。今は、何だ、施療院に入つて居る、己等も實はそこに居たんで癒つて歸つて來るについて、權から通り路に一寸寄つてくれと頼まれたんだ。どれ、もう日は暮れるし、道は惡いし、まだ三里歩かなけりやアならねえ。言傳は濟んだ。己等ア歸るぜ。」

男は歸りかけたが直は詳しい事を聞きたいから引止めた。こんな道の惡い闇夜に三里の山道を歸れるものではない。峠には狼が出て人をなやめる噂もある。ゆつくり宿つて朝立つがよい。かう云つ



て引止めながら早速夕飯を勧めると、男は爐の傍に陣取つて、ひもじさうに肉叉を使ひながら、仔細の話をした。

それによると權藏の働いて居る或る建築の足場が崩れて權藏はその下敷となつたのだ。併し權藏が居るべきところに居なかつたゝめだといふので、受負主は辨償金の要求に應じない。筋はこれだけである。男は附加へた。

「權も運のねえ男よ。巧く行きやア一生の食扶持をものして歸れるのだが、强慾な受負にかゝつちやアかたがねえ。併し、己等ア權に裁判沙汰にするがいゝと勧めて來た。」

さう聞くと直は眼をみはつて、

「裁判沙汰！　そんなお金のかゝる事をどうして。」

「だつて、直おッ母、勝つた時の事を考げえて見ねえな。」

話はそのまゝに濟んで翌る朝早く男は立つた。直は夜の眼も寢ずに心配した擧句、巴里に行つて見ると云ひ出した。けれどもそんな長い、費用のかゝる旅がどうして出來よう。とつおいつの末、何かの時に智慧を借りに行く村の御堂の牧師に相談すると、出拔に出かけるのはよすがよい、手紙を書いてやるから一先づ返事を待つて見なさいとの事で、權藏の居る施療院、當て手紙を出して見れた。

程なく届いた權藏の返事によると、何の役にも立たぬのに巴里へ行くとはもつての外だ、それよりも自分は受負主を相手取り、訴へ出たから、いくらでもよい、費用を送つてよこせとあつた。直は素

直に巴里行を思ひ止まり、苦しい中を工面していくらかの金を送つた。暫くするとまた權藏の手紙で、金が足らぬ、も少し送れとの催促、それもやつとの事でやり繰し、若干か送つた。三度目の催促にはもう力も望みも盡果て工面のつけやうがないと云つてやると、それなら牝牛を賣て都合をつけろと、無理な事を權柄づくに云つて來た。佛蘭西の田舍に住んだ事のある人ならば、牝牛を賣るといふ事は百姓に取つてどんなに悲慘なものか、すぐ合點が行くだらう。博物學者に取つては牝牛はたゞの反芻獸であるといふまで、郊外を散歩する人に取つては、牝牛が居ると風景が引立つといふまで、都會の人に取つては、乳入珈琲や牛酪の材料になるといふまで、それより深い事を考へて見る人もあるまい。けれども百姓に取つては牝牛といふものはそれよりもずつと以上のものだ。貧乏で子澤山の百姓でも、牛小舍に一匹の牝牛が居ると、決して此家族は餓死なぬといふ保證になる。日中は仕事の出來ぬ小さな子がたつた一人で、野良へ連れ出して居れば、勝手に草をたべて何の世話なし、それで家内中の夕飯の汁には手製の牛酪も入り、馬鈴薯の牛乳煮も食べられる。朝の珈琲には此上ない味もつけば滋養にもなる。父も母も老人も子供等も誰も彼も一樣に牝牛のお蔭でその日〳〵を過して行くのだ。

私等とてもその通り、直と二人肉類などは滅多に食る事もないが、家の赤（牝牛）が居るので牛乳に事缺かず滋養分を取つて行ける。赤は二人の命の綱であるばかりか、同じ仲間とも友達とも家族の一人とも思つて居る。私等は始終赤を相手に話をする。赤はよくそれを聞分る。また赤の思ふ事もそ



の大きな優しい濕味のある眼で、よく私等に通じさせる。私等三人は眞に一牛離れまいと思ふ家族なのだ。けれども今はどうしても赤と別れなければ權藏を滿足させる方法が無かつた。

牛買が家へ來た。さも氣に入らぬといふ容子で、長い事首を拈りながら赤を吟味して、こんな瘠牛はどうもならん。買取つても商賣にならぬ、善い乳も出ぬ、惡い牛酪ほか出來ぬ、どうも迷惑だが、正直で評判の直婆やを助けるつもりで、買つてやらうといふ話だつた。

牛小舍から出さうとすると、赤はこの談判が分つたらしく、脚を踏張つて悲しい聲を立てながら決して出ない、牛買は鞭を私に渡して、後へ廻つて尻を叩けといふ。直はそんな事をしてはいけないと、自分から手綱を取つて、優しく賴むやうに、

「さアお出、赤や、出ておくれ。」

さういふともう赤は抵抗はず、素直に出たが何か云ひたさうに濕んだ眼で私等を見た時には、私はもう腕が迫つて來た。牛買は赤を外へ連出し、荷馬車の後へ手綱を括りつけて、一緒に曳いて行つた。私等は家へ入つたが、長い事赤の悲しさうな啼き聲が聞えて居た。

最早乳もない。牛酪もない。朝は麵麭の一片、夕方は馬鈴薯と食鹽ばかり。謝肉祭の祭禮が赤の賣るとすぐに來た。去年の結日には直が、佛蘭西中の人がこの祭禮にする通りに、銅鑼燒も燒いて呉れ、菓實入の蒸菓子も作つてくれた。私が澤山食べたのを見て、直はどんなに幸福であつたらう。

今年はもう餡飩粉を解く牛乳もない。燒鍋に引く牛酪もない。謝肉祭の結日も何にもない。何たる悲しい事であらうと私は思つた。けれどもその結日に直は不意の御馳走をしてくれた。近所の一軒に行つては牛乳を、他の一軒に行つては牛酪を分て貰つて來たので、私が正午過に歸つて見ると、直が餡飩粉を炮烙に入れて居る。私は急ぎ傍へ行つて、

「やア、餡飩粉だ！」

私の眼を丸くした顏を見て、直は笑み傾けながら、

「さうさ、餡飩粉だよ。民や、觸つて御覽、、、キメの細い上等の餡飩粉だよ。」

私はこの餡飩粉を何にするのかと聞かうとした。その詞が咽喉元まで出たのを一生懸命堪へて平氣な顏をした。牛乳も牛酪もないのを知つてるから、銅鑼燒の事を直に思ひ出させるのが子供心にも辛かつたのだ。私が默つてるのを見て、

「ねえ、民や、餡飩粉では何が出來るか知つてるかえ。」

「麵麭さ。」

「その外に？」

「外には……さうさな、何だか知らないや。」

いゝえ、知つておいでさ。お前は思ひやりの善い兒だから私に云はないのさ。今日は謝肉祭の結日ぢやアないか。銅鑼燒と果實菓子の日なんだけれども、牛乳もなし牛酪もなしだから、お前氣がつか



ない振をしておいでなんだらう。何て、お前は優しい兒なんだらうね。」

「だつて、母や！。」

「そんな優しいお前なんだもの。どうして今日の結日に悲しい思ひをさせて置けよう。民や、この提箱を開けて御覽。」

急いで蓋を取つて見ると、いかな事、鉢の中には牛乳、小皿に牛酪、それを取卷いて、四つ五つの鷄卵と三つの林檎！

「どれ鷄卵をお出し、そして林檎の皮をお剝き。」

私が林檎を剝いて刻む間に、直は鷄卵を餡飩粉の中に割つて落とし、時々匙で牛乳を注してはそれを打つ。最終に刻んだ林檎を入れて善く搔雜ながら、その炮烙を熱灰の上に乘せた。夕方までこのままにして置けば、晩餐の時にはちやんとおいしい果實菓子が出來上るのだ。この上はたゝ時の立つのを待つ許り。あゝその待遠しさ。

漸との事で日暮間近になる。

「さア、民や、銅鑼燒はお前もして見るかえ。竈の下に焚火をお拵へ、煙を立てないやうにね。」

云ふにや及ぶ。早速小枝を折入れて上等の焚火を作る。祭禮の蠟燭が陽氣に點された。直は餡飩粉をまた乳で解いて砂糖を入れて居る。私は指圖されるまゝに揚物鍋を火にかけ、牛酪を落し込むとぢりぢりと融け流れて。暫らく嗅だ事もない無類の善い匂が私等の御殿の中に充ち渡る。脂肪のハネる

音じう〳〵云ふ音、私等の耳には陽氣な音樂とも聞取れる。さゞこ〳〵へ餡飩粉を落して私が銅鑼燒を作るのだと、嬉しさに小震ひをする時、私は庭先に重い人の跫音を聞いた。

あゝ、誰か、私からこの幸福を奪ふために來たのだらうか。

## 權藏

私は隣の人が火でも貰ひに來たのだらうと思ひながら、直の掬つてくれた餡飩粉を揚物鍋の中に落した。途端に杖か何かで閾を突く音がして、戸が荒々しく開いた。

「誰だえ」と直は御馳走拵への最中とて見返りもせずに聞く。

誰か入つて來た。焚火の焰が正面に、白金巾の仕事衣を着て、太い棒を手に持つた男を照し出した。男は荒ッぽい調子で、

「何だ、祭禮の御馳走か。」

直は男の顏を見ると、慌てたやうに立上つて、

「おゝ、お前、權さんぢやアないか。」

かう云ひながら私の腕を取つてこの男の前に押やり、

「民や、お前のお父さんだよ。」

お父さんと知つて、私は子供が誰も親にする通りに取縋つて接吻しようとすると、權藏は件の棒で



邪慳に私を隔てながら、直の方を振向き、

「何でえ、この餓鬼ア？　ウム、何だな、ぢやア手前、己にはいゝ加減の事を云つて……。」

「だつて、權さん、これには……。」

「己を騙したんぢやアねえか」

權藏はその太い棒を斜に構へて私の方へ三足四足進んだ。私は覺えず後退りした。私がどうしたといふのだらう、接吻しようとしたばかりに、こんなにされる筈はない。

「結日の御祝ひとは豪儀だ。」と權藏は四邊を見廻しながら「何しろ腹が減つて堪えられねえ。己には何か食はしてくれる？」

「今銅鑼燒を拵へてるところさ。」

「そりやア云はれずたつて分つてらア、饂棒奴、だが銅鑼燒を己が食へるかよ。足を棒のやうにして十里も歩いて來た大の男だ。」

「でも何の用意もありやアしないやね。お前さんの歸つて來る事は分りやアしないんだもの。」

「何だと？、ぢやア晩餐は出來ねえのか。」と小皿の中の牛酪に眼をつけて、「ウム、こゝに牛酪がある。それからと……。」

天井を見ると、いつも食用豚脂を吊つて置く梁の鈎は、もう長い事空になつて居るが、そこに今乾からびた蒜と玉葱の束がわびしく懸つてある。

「ウム、玉葱もある。」と件の棒で叩く〳〵と四つ五つころ〳〵と落ちた。「此奴と牛酪があればお誂へ向きの汁が出來る。さア退いた。」

私を退て揚物鍋を取上ると、私の焼きかけた銅鑼焼をいきなり引くり覆して了つた。

「直、なにをぐづ〳〵してるんでえ。汁をこしれえねえかよ。」

私は小くなつて權藏が棒で指示した食卓の彼方に行く外はなかつた。直は素直に命令に從つて汁拵ひに取かゝる。私は食卓の隅からこは〴〵權藏の容子を見て居た。年は直と同じ五十恰好、怖い顔をして意地の惡さうな容子、怪我のため首が右の肩の方に曲つて居るのがなほさら人相を惡くして見せる。

「何だ。牛酪はこれつきりしかねえのか。情ねえな。」

云ふなり、小皿の牛酪を殘ず揚物鍋の中へ落して了つた。もう牛酪もない！　もう銅鑼焼もない!!

けれども牛酪の事も、銅鑼焼の事も、果實菓子の事も、もう私の胸には餘りこたへなかつた。そんな事はどうでもいゝ氣になつて、只この恐ろしい男が私のお父さんなのかと思ふと、胸が一杯になつて了ふのだ。

私は權藏の事は今迄一寸も知らなかつたけれども、私のお父さんだといふからは、やはりお母さんな男にしたといふやうな優しいところのある人だらうと、漠然と思つて居た。今眼の前で丸で想像と違つたその人を見ると、何とも云へぬ恐怖と苦惱を覺えずには居られなかつたのだ？



「手前、茫然何してるんでえ。木像ぢやアあるめえし。汁皿でも並べねえ。」

かう云はれて私はどぎまぎしながら、汁皿を持出した。その時はもう汁が出來て居たのである。直はそれをめい〳〵の皿に盛分けた。

權藏は陣取つて居た煖爐の隅を離れて、食卓に着き、食事を取始めた。私の皿も盛つてあるからお相伴をせぬ譯に行かぬ。すると權藏が時々匙を休めてはじろ〳〵私の方を見る。私は當惑し、胸もおどおどしてるから食慾も何もない。それでも怖いもの見たしで、盗むやうにちよい〳〵權藏の方を見る。眼と眼が打かると、私はすぐ眼を俯向て了ふ。

「いつもこんなに食ねえのか。」と權藏は匙で私を指して直に尋ねた。

「いゝえ、いつもはよく食るんだが……。」

「なほ始末が惡いや。せめて飯でも食はなけりやア……。」

私は口を插む氣も何もない。直とてもひどくてれて、立つたり居たり、たゞ良人のお給仕に勉めて居る。

「手前、ひもじかアねえのか。」と權藏は私の答を促した。

「いゝえ。」

「ひもじかねえ？　ぢや彼方へ行つて寢ちまい。寢たらさつさと眠るんだぞ。いゝか、眠らねえと刹ねえから覺えて居ろ。」

直は口答せずに寢ろと眼顏で知らした。私は素より口答しよう抔とは思はなかつた。

中以下の農家の常で、廚房と寢部屋は多く兼帶である。私どもも無論それで、煖爐に近い方には食卓や戸棚などを並べ、反對の壁際の片隅には直の寢臺、片隅には赤い布を垂れた押込の中に私の小さい寢臺がある。

私は急いで衣服を脫ぎ捨て、床を引出してその中に入つた。それは云はれて出來る事だけれども、寢つく事は全く別の問題だ。眠氣などはちつともさゝず、胸は泣きたいやうな氣で一杯になつて居るのに、命令されたとて眠れるものではない。

どうしてこんな恐ろしい人が私のお父さんなんだらう。お父さんならなぜ私をこんなに辛くするだらう？

壁の方に鼻を向けて、一生懸命こんな考へを追ひのけて眠らうとしたが、眼はます〳〵冴えて行くばかり。

どれほど立つたか知らないが、その中に私は自分の寢床に近よつて來る跫音を聞いた。重い引ずるやうな跫音なので、すぐ直でない事が知れた。熱い息が私の髮にかゝる、と思ふと殺したやうな聲で、

「手前、眠つたか」

私は覺えて居ろと云はれた一言が怖いから默つて居た。すると直が、

「民は寢ついたんだよ。いつも床へ入るなり正體が無くなつちまふんだから……、もう何を云つたつ



て大丈夫だよ。」

權藏が引返して行くと、直の聲で、

「權さん、私や何よりか心配でならないが、一體裁判沙汰はどうなつたのだえ？」

「敗ちやつたえ！」

「えッ?!」

「裁判にやア敗る。有だけの金は失なる。不具にやアなつちまふ。それだけでも澤山なところへ歸つて見りやあ何だ。穀潰しの餓鬼まで居るぢやアねえか。おい直、手前なぜ己の云つた通りに計らはねえんだ。」

「でも私にやア出來ないんだから……」

「孤兒院にやつちまふのが何で出來ねえんだ。」

「だつてお前、自分の乳で育て上げた可愛い兒を、そんな悲慘なところへやれないぢやアないかね。」

「だつてよ、手前の子ぢやアあるめえ。」

「……尤も一度はお前さんの指圖通りにしようと思つたんだけれども、丁度その時にこの兒が病氣になつたもんだから。」

「癒つた時になぜ連れてかねえんだ。」

「それが癒りきらなかつたんだから、聞いて〻も胸に應へるやうな咳ばかりして居てね。丁度可愛い

仁太の死んだ時もそんなだつたが……あの悲慘な孤兒院などへ遣らうものなら迚も生命は無いんだもの。」

「そんなら今は何でもねえぢやアねえか。」

「もう、年も取つて大きくなつたし、折角今まで面倒を見て來たのだから——。」

「いくつになる？」

「數へ年の九歳さ。」

「九歳になつたつて孤兒院にやれねえ法はあるめえ。野郎にやア可哀相かも知れねえが、そんな事を構つちやア居られねえ。入る筈のところへ入るんだ。」

「あれ權さん、そんな事をしておくれぢやアない。」

「なんだと？　そんな事をしておくれぢやアねえ？　箆棒奴、己が勝手にするんだえ。」

暫らく無言になる。私はほつと息をついだ。もう咽喉は一杯につまつて居る。直の溜息が聞えて、

「まあ權さん、お前巴里へ行つてすつかり變つてお了ひだね！」

「さうよ。己やア第一この通りの不具ものに變つちやつた。これから先、手前と己がどうして食つて行けると思ふ。もう一文だつて有やアしねえ。牝牛は賣つちやつたし、何にも糊口の種がねえのに、どうして赤の他人のこんな餓鬼まで養つて行けるかよ。」

「だつて權さん、民は大事の大事の私の兒なんだもの。」



「なんだと？　手前の兒だ？　物も少し考げえてから云へ。第一これが百姓の兒といふ風かよ。己やア食事の間氣をつけて見て居たが、骨組が無くつて、瘠つぽちで、腕も脛もなつてやアしねえ。」

「民はこの村で一番綜致のいゝ優しい兒さ。」

「綜致がいゝ？　そんな事ア知らねえや。優しいのが糊口の種になるかい？　骨つ節を見ろよ。あんな肩をして眷も何も擔げやアしねえ。ありやア都會の兒だ。こちとらに入用はねえ。」

「けども權さん。民のやうに正直な、氣立のよい、そして目端の利く兒つてありやアしないよ。きつと後々には私達の爲になるんだから……。」

「箆棒奴、そんな優長な事を待つて居られるかえ。己やアもう仕事は出來ねえんだぜ。」

「だつてもしか、この兒の親が迎ひに來たら、何といふつもりなんだえ。」

「親が迎えに來る？　冗談ぢやアねえ。親がその氣なら今までにもう百遍も來てらア。いつかどつさりお禮を貰える日があるだらうと、あの餓鬼を拾ひ上げたのが、今思へば己の一生の過失よ。立派な絹物に包まれて居たから、さう思つたに無理はねえんだが……親達やア大方死んぢめえあがつたんだらう。くそいめ〳〵しい。」

「まア、お前さんといふ人は！　……けども私やさうは思はない。きつとその中に親達が來るだらうと……。」

「フム、女つてもなア諦めの惡いもんだなア。」

「だつて親達が來たらほんとにどうするつもりだえ。」
「どうするも糞もねえ、孤兒院へお出でなせえと云ふ迄よ。が直、この話やアもう澤山だ。胸くそが惡くなる。明日はな、己やア村役場へ行つて來るからその積りで居ろ。どれ、今から一時間ばかり三太の所へ出掛て來るぜ。」
戸を開けて權藏は出て行つた。
今迄息を殺して居た私は、遥音の遠のくのを待ちかねて、我破と寢床の上に起上り、泣き聲立てて直を呼んだ。直は驚いて私の傍にかけ寄つた。
「母や、己等、孤兒院へ行くのは厭だア！」
「お〻、民、なんでお前をそんなところへやるものかね。」と直はいきなり私を兩腕に抱きしめて接吻してくれた。さうすると私はいくらか心強くなつて、涙も止まつた。直は優しく、
「お前、あの眠らなかつたんだね。」
「だつて己等のせゐぢやアないんだもの。」
「何もお前を叱りはしないよ。ちやア民はみんな話を聞いちまつたんだね。」
「あゝ、母やは己等の本當の母やぢやないんだね。お父さんもお父さんぢやアないんだね。」
この言葉の半分には私の一方ならぬ失望を、半分には私の滿足を表して云つたのだけれども、直はそれには心づかぬらしく、



「民や、怨んでおくれぢやアない。機會があつたら云ひ聞かせる筈だつたんだけれども、私はお前が本當の子のやうに可愛いし、お前も一心に私を生の母と思ひつめてゐるものを、うか〳〵云ひ出して悲しい思ひをさせるでもないと、それで今日になつちまつたんだが。……なにしろ今聞くやうな譯なんだからね。可哀相に、お前は親に捨てられた子で、お前のお母さんは死んだとも生きたとも、ちつとも分らないのだよ。筋道を話すと、今から足掛八年前、その頃も巴里に居た所天が仕事の出がけ、廢兵院前の並木通りを來かゝると、まだ往來に人通りもないのに、赤兒の泣聲が或る庭先の鐵格子の門のあたりから聞えて來るので、行つて見ると……夜はまだしら〻明けになつたばかり、二月のまだ寒い朝だつたが、その鐵格子に寄せかけて赤兒を寢せてあるんだとさ。そこで權さんは赤兒を抱上げて、誰か呼ばうと思ひながら、そこらを見ると、木の蔭に隱れて居た男があつて、一散に逃げて了つたのだとさ。きつとその人が赤兒を捨てたので、拾ひ人があつたと見て、逃げてつて了つたのだらう。さア赤兒は火のついたやうに泣出す、權さんは途方に暮れてると、仲間の職人が通りかゝつたので、一緒に巡査の派出所へ連れてつたさうでね。そこで暖めてやつたり何かしても赤兒が泣止まないので、こりやア何でも餓じいのだらうと、近所の乳のあるお神さんを呼んで、一杯飲ましてやると大人しく泣止んだから、今度は何か手が〻りでも無いかと火の傍で赤兒を裸にして見るとね、それが生れて五月か六月の、まる〳〵と肥つた、薔薇色をした、飛んだい〻男の兒なんぢやアないかね。そしてその兒を包んだ巻布なら、衣服なら上等のもの許りなので、何でもこりやアい〻衆の子で、譯があつ

て捨てたものか、さもなけりやア何者かゞ盜んで來て捨てたのだらうと……そりやアお役人の意見だつたさうだけれどもね。尤も手掛になる徽章のやうなものは何も無かつたので、巡査はいろ〳〵書取つた上で、孤兒院へやる外はないと云つたのをね、所天が、何しろ達者な育てる手數の入りさうもない兒だし、絹物には包まれて居るんだから、育てゝ居る中には、きつと親達がお禮を持つて迎ひに來るだらうと、一つは慾から割出して、それなら自分が育てませうと、警察のお許しを受て、赤兒を引取つたのだが、私がお前のお母さんになつた次第はまアこんな譯なんだよ。」

直はすぐ言葉を次いで、

「丁度私はお前と同年の仁太といふ兒があつて幸ひと乳も餘分にあつたし、お前を引取つても世話がなかつたが、その中三月許りで仁太は死んで了つたのでね。それからといふもの、お前がまゝ〳〵可愛くなり、本當の兒のつもりで今日まで育てゝ來た譯なんだよ。たゞね、權藏が何してもその氣にならず、三年立つても、誰もお前の引取人がなかつたら、それからは孤兒院へやつて了へと八釜しく云出してね。」

「おゝ！　母や、後生だから孤兒院なんかへやらないでおくれ！」と私は直にしがみついた。

「やりはしないともね！　お前は可愛い私の兒なんだもの。私はきつとどうにでもするから……。全體權藏はお前の怖がるやうな惡い人ぢやアないんだが、只貧すりや鈍するでね、この先糊口が出來ないと思ふので燒つ腹になつてるところなんだから……なアに、私達はこれから三人で働けばいゝぢやアないか。ねえ、民、お前、何なりと働いて小使取をしておくれだらうね。」

「あゝ、母や、己等どんな事でもするから孤兒院へはやらないでおくれ。」

「やらないともさ。その代りお前に賴みがある。善兒になつて、今すぐと寢んでおくれ。いゝかへ、權さんが今にも歸つて來て目つかると大變だから。」

私の兩頰に熱い接吻をして、私の鼻を壁の方に向けて、直は寢床の側を離れた。

強い感動のために心が昂つて、眠らうと思つても、とても眠れない。あんなに親切な、あんなに優しい直は、私のほんとのお母さんではなかつたのだ！　それなら私のお母さんはどんな人だらう。もつと親切で、もつと優しい人だらうか。おゝ！　決して！　直よりも親切で優しい人が此世にあらう筈はない。

けれども私の父は――父と名のつく人ならば、權藏のやうに意地惡でなく、棒を振上げながら、冷たい恐ろしい眼で、我兒を睨めつけるやうなお父さんではないに極つて居ると、私は感じた。

權藏はどこまでも、私を孤兒院へ入れる氣で居るのだが、直は全體どうしてそれをとめる事が出來るのだらう？

私は善く覺えて居る村に「孤兒院の子供」と皆が云つて居た二人の子供があつた。番號入の鍼力の板札を頸からぶら下げて、汚い乞食のやうな着物を着て居た。村の人が皆なぶりものにして叩いたり蹴つたりした。村の子供等は野良犬を追廻して喜ぶやうに二人の子の後にぞろ〳〵つきまはつては惡

戯をした。野良犬に一人の保護者もないやうに、この子等を保護するものは一人も無かつた。

あゝ！　私はどんな辛い思ひをしても、この子等と同じやうな運命に逢ひたくない。番號札を頸にぶら下げるのは厭だ。孤兒院の子供が通ると云つて、多勢の村の兒にぞろ〳〵ついて來られるのは厭だ。

かう考へると、身内が震ひあがつて、齒は思はずがた〳〵と鳴出す。それをぢつと堪へるだけでも一苦勞で、なか〳〵寢つくどころではない。がもう權藏は歸つて來るだらう。歸つて來たらまた何か恐ろしい事をいふだらう。

幸ひといつか睡魔が權藏よりも先へ來て、私は何も知らずに寢て了つた。

併し終夜安らかに眠を取る事は出來なかつた。始終いやな夢を見たり何かした。で翌る朝目を覺すと、私は眞先に、もしか寢てる間に孤兒院へ運ばれて居はしないかと、寢床を觸つて見、周圍を見廻して安心した。

午前中權藏は私に何にも云はなかつた。また直とも私の話をしない。それで私は直が權藏に得心さしたので、孤兒院へやろといふ話は止めにしたのだらうと思つた。

けれども正午になると、權藏は私に向つて、帽子を被つてすぐついて來いと云ひ出した。

私はハッとおびえて、直の方を見ると、直は素直に跟て行けと眼顔で知らせ、そつと手眞似をして大丈夫との意を示した。



それでは大丈夫なのだらう。私は帽子を被つて權藏の後からついて行つた。全體私をどこへ連れて行くのだらう。直の保證に抱はらず、何だか氣味が惡くて仕方がない。

村役場や何か、村の人家のあるところまではこゝからなか〳〵遠い。歩いて行くと小一時間もかゝる。私はそこへ連れて行かれるのだ。その長い道中を權藏はたつた一度だけ私に言葉をかけた。首は例の右に曲げたまゝ一寸も動かさず、のろ〳〵と跛を引きながら歩みを運んで行く。時々私が神妙について行くかと、後を見返るが、首が廻らぬため身體のこらずを振りむけるのだ。

私は萬一の場合には溝へ飛込んで逃げるつもりで、なるだけ權藏から引離れて歩くやうにした。ところが村近くなると、權藏は私の思惑を察したのか、私の手をぐいと掴んで、自分の傍にひつゝけながら歩き出した。もう逃出す事も出來ない。

## 美登里團

權藏に手を引つ張られながら、村へ入つて行くと、皆が二人の通るのを見返つた。多分私の容子が、繩をつけて曳いて行かれる盜賊犬のやうに見えたからだらう。

村の珈琲店の前に來かゝると、戸口に立つて居た一人の男が權藏を呼かけて入れと云つた。すると權藏は私の手を放したが今度は耳を引張つて先へ珈琲店へ入らせた。私は助かつたやうな氣がした。珈琲店は私に取つて險呑な場所のやうに見えぬ。その上に珈琲店に入るといふ事は何だかよほどしや

れて居るやうな氣がした。私は長い事一度は珈琲店の閾を跨いで見たいものと思つて居たのだ。

ノートルダム旅籠の珈琲店！　どんなに洒落た名に私の耳には響いて居たらう。（田舍の珈琲店は多く旅籠兼帶である）私はよくこの珈琲店の前を通りながら、陽氣な結い顏をして千鳥足で戸口を出る村の衆を度々見た。大勢の騷ぎ聲、または流行唄を歌ふ聲などが窓玻璃にびり〳〵響いてるのを度々聞いた。全體あの人達は何をしてるのだらう？　赤い窓掛の中には何事が起つてるのだらう？　は私通る度によくかう不思議がつたのだが、今日といふ今日、始めて珈琲店の中を見る事が出來たのだ。

權藏を呼込んだのは珈琲店の主人で、二人は一脚の丸食卓に向ひ合つて席を占た。私は云はれるまま離れた煖爐の傍に行き、床几に腰を卸して、家の中の容子を見廻した。私と向合つた隅の方に眞白な鬚髯を伸ばした老爺が居る。何だか私の見た事もない、妙な服裝をして居るので私の注意を惹いた。

銀のやうな長い髮の毛が房になつて肩まで下つて居た。そして綠と赤の羽を飾にした灰色の高帽がその白髮の上に乘つて居た。毛の方を中にした羊の毛皮の袖無甚平を着てるので、靑剪絨の筒袖がその下から出て居たが、色はとうの昔に褪て居た。そして羅紗の大きな脚袢を穿いた脛には、赤いリボンを十字に綾どつて幾筋にも捲きつけて居た。

老爺は椅子に凭れて左の腕を後へだらりと垂れ、片足を椅子の横木にかけて折曲げ、それに右の肘を乘せて頰杖を突いて居た、そのゆつたりと物靜かに構へた容子といふものは活てる人とは思はれない。村の御堂の聖人樣の木像をこゝへ持出したかと思はれた位。



老爺の前には、三匹の犬が重なり合つて、身動きもせず暖もつて居た。一匹は毛の縮れた白の尨犬、一匹は長毛の黑尨。この二匹はいづれも牡で、後の一匹が灰色の小さな敏捷こさうな優しい牝犬である。白尨の方は巡査の古帽を革紐で頤にくゝりつけて被つて居た。

全體この老爺は何ものだらうと私はよつぽど不思議がつて、氣をつけて見て居る中に、權藏と主人は中聲で何か話し始めた。よくは聞えないけれども私の事なのだ。その中にも權藏はかう云つた——孤兒院に私をやらずに、自分の家で育てる代り、孤兒院の方からいくらかの手當を下て貰ふやう村役場に賴みに行くところなのだと。

それで私は直が安心しろと手眞似で知らした譯が分つた。さうなる事なら恐ろしい事も何もない。私はほつと氣が休まつた

老爺もそれとは無しに、二人の話に聞耳立て居たが、だしぬけに私を指して權藏に詞をかけた。

「話の中ぢやが、お前さんの厄介ものといふのはこの兒かな？」

「さうなんで。」

「お前さん、孤兒院から手當が取れるものと思つとるかの？」

「そりやア分らねえや。だが爺つアん。この兒は捨兒なのを己が願つて育てゝるんだから、手當を下てくれたつていゝ譯ぢやアねえか。」

「理窟はそんなものぢやがの。世の中は理詰ばかりでは行かんものぢや。乃公は請合ふが村役場へ行

くのは無駄骨折りぢやな。」
「それなら孤兒院へ預ける迄よ。まさか受取らねえとは云ふめえ。なア爺つアん。」
「ぢやがお前さん、一度願ひ出て、今日迄育てて來たのぢやとちと六ケしからうわい。」
「孤兒院で受取らねえけりやア、今迄の食せ損と諦めて、追出しつちまふ迄よ。」
私の胸は早鐘のやうに動悸を打出した。老爺は暫らく考へて、
「併し何ぞ厄介拂ひをして、その上某かになるといふ算段がそこらにありさうなものぢやての。」
「かう、爺つアん、そんなうめえ事がありやア、己やア早速葡萄酒を一本おごるぜ。」
「ぢやア奮發つしやい。算段はついた！」
「え？　爺つアん、眞實か？」
「眞實とも。」
かういふなり老爺は椅子を離れて、權藏の前に出て來た。老爺が立つ時私は不思議な事に氣がついた。それは例の羊の毛皮の褞平が、ひとりでにむくくと動き出した事である。多分小さな犬でも腋の下に入れて居たのだらうと私は思つた。
老爺は權藏の前に腰を卸して、
「お前さんの望みは、この兒が今日からお前さんの飯を食はずに濟むか、食つて行くなら手當が貰へるか、どちらかになればいゝといふ譯ぢやの？」



「まア、そんなもんで。」
「それならたつた今乃公がこの兒を引取りませう。」
「え？　お前さんに此兒をやつちまふ?!」と權藏は俄に調子を變へて老爺を見つめた。
「一日も早く厄介拂ひをしたいといふのが、お前さんの願ではなかつたかの？」
「が待つてくんねえ。お前さんにやるとなりやア考えもんだ。貰人を探す日にやア、いくらでもあるんだからな。自慢ぢやアねえが、こんないゝ兒が滅多にあるもんぢやアねえ。かう、爺つアん、よく見てくんねえな。」
「だから見てますよ。」
「民や、こゝへ來や。」と俄に私への言葉が優しくなつた。
私は震へながら寄つて行つた。
「なに、小僧や、恐がる事はない。」と老爺は賺すやうな調子。
「さア、とつくりと見てくんねえ。」
「いゝ兒でないとは乃公も云はん。それならばこそ引取らうと云出したやうなもの、化物のやうな兒ならてんから不用ぢや。」
「こつちはもう轆轤首か一寸法師なら、お前さんにやアやらねえんだ。」
「その代り見せものにするといふのぢやらう。お生憎様ぢやが、この兒は人並に生れついとる。これ

ではお前さんの食ひものにはならんわい。」
「でも爺つァん仕事をさせりやァ錢になる。」
「仕事をさせるには纖弱過る。」
「纖弱過る？　冗談ぢやァねえ。小粒でもぴりゝとして大人竝にやァ通るんだ。脛を見ねえな。こんな眞直な、性質のいゝ兒を持つた子供を、お前たんと見た事があるかえ。」
かう云ひながら權藏は私のヅボンを捲くつて見せた。
「まア、蚊のやうな脚ぢやな。」
「この腕はどんなもんだえ。」
「脚と似たり寄つたりぢや。平生はそれで濟んでも、いざとなるともう辛抱が利かんわい。土臺が纖弱い、鍛へてない身體ぢや。」
「鍛へてねえ？　かう、觸つて見てくんねえ。こんなもんだ。え、おい、爺つァん。ちよつくら觸つて見てくんねえな。」
老爺は骨立た手で私の脚を擦つたり叩いたりした。そして首をかしげたり、顏をしかめたりした。
私は一度同じやうな場合に立合つた事がある。それは牝牛の赤を賣つた時で　牛買は今老爺が私を試みたやうに、赤を擦つたり叩いたりした。そして同じやうに首をかたげて、顏をしかめた。それは善い牝牛ではないと云つた。買つても二度と賣る事が出來ぬから商賣にならぬと云つた。それでも牛



買は買つて曳いて行つた。
この調子では老爺も私を買つて曳いて行くだらう。あゝ直！　直！　直が居てくれゝば、きつと私を助けてくれようものを！　私は萬一それで老爺を斷念させる事が出來るなら、昨夜權藏が直に向つて私の事を骨と皮許りの瘠つぽちで、手も足もなつてないと云つたことを持出して見ようかとも思つた。けれども迚も何の役にも立ちさうもない。權藏に頰邊でも毆りつけられるが落だらうと思つて止した。
老爺は私を吟味した末、
「掛値のないところ通常の兒といふまで、それも出來が町の兒ぢやから、百姓業はとても向かない。ためしに牛をつけて畠を鋤して見るが善い。まアどれほど續かうかの。」
「十年は大丈夫だ。」
「一ケ月も六ケしいわい。」
「が、爺つァん、も一遍改めてくんねえ。肩幅だつて胸だつて點の打ちどころがねえんだ。」
私は權藏と老爺の間に挾まれて、そつちへ押されたり、此方へ押されたりした。とゞのつまり老爺はかう云つた。
「それならかうしよう。乃公はこの兒は買はぬ。買はぬが借りて行かう。一年十圓の契約で借りて行くがどうぢや。」

「一年たつた十圓！」
「十圓ならい、値ぢや。前金も承知ぢやぜ。二圓の銀貨が五枚握れて、その上に厄介拂が出來りやア、棚から牡丹餅ぢやらうがな。」
「が、爺つアん。己が養つてりや、村役場から月々三兩は手當の下るあてがあるんだ。」
「よしんば三兩貰つても、食して行かざアなるまいがの。」
「仕事をさせらアな。」
「この兒に仕事が出來ると思やア、お前さんが、てんで厄介ものにする筈がない。お前さんは全體間違つた事ばかり云つてぢやが、孤兒院の兒を借りて働かせればお前さんの方から孤兒院に賃金を納めなけりやアならん筈ぢや。」
「どつち道月三兩を缺かしちやアこの餓鬼は手放せねえ。」
「それなら村役場へ願つて出なさいぢやが、もし此兒をお前さんに下ずに、他人に下られたらどうするかの。蚯蜂取らずぢや。乃公と話を極めさへすりやア、どこを駈ずり廻る世話もない。只お前さんがそこから手を伸ばしさへすりやア、レコにならうといふものぢや。そうれ、見さつしやい。」
老爺は古びた皮財布を取出して、中から二圓銀貨五枚を探り出し、ちやら〳〵と掌へ乘せて音をさせて居た。
權藏は欲しさうにそれを見たが、



「だが爺つアん。この兒の親達がいつ迎えに來めいもんでもねえ。」
「迎ひに來たところで構はん。」
「だがよ。どつしりお禮を持つて、いつか迎えに來るだらうと思へばこそ、今まで己やア育てゝ居たんだぜ。」
「併しお前さんはもう迎ひに來ないと見限つたればこそ追出さうとしたのぢや。がもしひよつと親達が迎ひに來れば、お前さんとこに來るに極つとる。乃公の事を知りさうな筈がないから……さうすればお前さんはいつでも乃公からこの兒を取返されやうがの？」
「それもさうだが、お前が諸國を廻つて居る内、この兒の親達に巡り合ふめえものでもねえ。」
「さうすれば儲は山分ぢやな。よしかな、その代り乃公はあと五兩奮發まう。」
「けちな事を云はずに二十兩にしねえな。」
「それなら話はお止めぢや。第一この兒はそれだけの役に立たんわい。」
「全體どんな役に立てようといふんで？　手足でする事なら何でも持つてこいだぜ。」
老爺は嘲るやうに權藏を見て、ちび〳〵盃を干しながら、
「まア乃公の道伴れにしようと云つたやうなものぢや。乃公は見られる通りの老人ぢやし、長道でもした擧句、雨にでも降りこめられると、氣まで滅入る事が度々ある。その時の話相手にでもすれば、ちつとは慰みにもならうかと、實はかう思つての。」

「ウム、さうか。そんな事ならお茶の子だ。脚だつてお前よりやア達者だぜ。」
「いや、どうして……まだ子供ぢや。それに道中する許りぢやない。踊つたり飛んだりしても貰はにやアならん。美登里團の一座に差加へようといふのぢやから。」
「え？　美登里團の一座だ？」
「團長といふのは誰あらう乃公で、美登里老人と云へば通つたものぢや。お前さん知らんの、あッはッは。どこに一座があるかと？　まあ待たつしやい。望みとあれば、一座殘ずお目通りさせようかの。」
「ウム、爺つアん、面白えや、一つお目通させてくんねえ。」
珈琲店の中に居た皆の目が美登里老人の上に向く。
老爺は例の羊の毛皮の袖無を開いて、左の腋に入れて居た小さな妙な動物を掴み出した。袖無がときどきむく〳〵動くのは不思議と思つて居たが、それはこの動物のなす業であつた。小犬か知らと思つて居たのは間違と知つたが、私はこんな妙な動物をつひぞまだ見た事がない。もし私が小學校に行つてたり、また繪本でも見る事が出來たら、とうにこの動物を知つたらうが、邊鄙の片田舎で、世間知らずに育つたから、この時はこの小動物を見て、何とも想像がつかなかつた。もしや因果ものの子でもあるかしらと思つた。金絲の縁縫をした赤い衣服を着て、手もあれば足もある、唯人間と違つてるのは手足が眞黒けに毛の生えてる事だ。顏も全く外の動物とは違つて、人間離れがして居らず、濕んで輝いた眼がくしや〳〵と寄つてるのは妙だが、脣までちやんとある。私は阿呆驚きに驚いて居



ると、
「何だ！　猿ぢやアねえか。」と權藏が叫んだので、あゝこれが話に聞いて居た猿なのかと始めて分つた。私も話にだけは聞いて居たから。
美登里老人は小猿を食卓の上に乘せ、
「さアお目通りに控へたのが、美登里團一座の花形俳優、藝名ジョリカール先生とは此猿の事ぢや。おい、先生、御見物の皆様方に御禮を申上ろ。」
ジョリカール先生、脣にやつた手を左右に開き小腰をかゞめながら見物に接吻を送る。
「さアお次はカピ君、御見物お歴々の方々に敬意をお表し申せ。」
かう白の彤に命ずると、今までぢつとして居た、例の巡査の帽を被つた白犬は直に後脚で立上り、前脚を胸に交叉して見物の方にお辭儀をする。それから仲間の二匹の犬の方を向いて、胸に置いた片脚で來い〳〵をやると、今迄目を離さずカピを見つめて居た二匹の犬が、これまた後脚で立上り、丁度交際社會の男女が手を取合ふやうに互ひに前脚を渡し合ひ、前に六歩進み後に三歩退いて、見物に敬意を表した。
それが濟むと美登里老人、
「カピは犬共の總取締で、カピと云ふのは伊太利語の大將といふ字の略字ぢや。乃公の犬はみな怜悧ものぢやが、その中でもカピが一番の怜悧もの、乃公の命令がよく分つて、それをまた外の犬に傳へ

るといふ奇代の代物ぢや。さてまたこの見事な黒毛の若い彪犬がゼルビノ君、伊達ものといふ義ぢや。英吉利種のこの可愛い牝犬がドルス孃、優しいといふ字を取つたもの。以上合はせて四人、これだけが乃公の座員で、佛蘭西は愚か、世界中を股にかけ、運はその時の廻り合せと呑氣に打つて廻つて居る譯ぢや。」

かう云ひながら美登里老人はカビを呼ぶと、カビは前脚を胸に交して老爺を見上げた。

「カビさん、こゝへ來て下さい。御見物の方々はお歴々の善い衆ばかりぢや。お前さんも行儀を善くして——よしかな。この小僧さんは毬のやうな丸い眼をして、お前さんを見詰めて居るが、此小僧さん今何時になるか知りたいと仰しやる。乃公の頼みぢや、一つ知らして上げて下さい。」

するとカビは主人の傍に近より、羊の毛皮を押のけて、胴衣の隙しから大きな銀側時計を取出し、それを眺めた後、二つハッキリと大きく吠えて、それから三つ小さく刻んで吠えた。時計は正しく二時と四分の三（四十五分）であつたのである。

「カビさん、大きに有難う。今度はドルス孃に來て貰つて繩飛をお目にかけませう。」

カビはまた主人の上衣の隙しから綱を咥へ出し、黒毛のゼルビノに合圖をすると、ゼルビノはカビの前に來て向合つて立止る。カビが投げて渡す綱の片端を咥へて、二匹で巧みにそれを廻はし始める。綱が調子づいて廻はり始めると、可愛らしい牝犬のドルスが優しい目をして主人を見つめたまま、中へ飛込んで繩飛びの離れ業を手際よくやり出した。どうも不思議な犬もあるものだと、私は只



呆氣に取られてゐた。

老爺は藝を止さして櫃藏に向ひ、

「どうぢやな。乃公の弟子どもは怜悧もの許りぢやらうがの。併し怜悧といふも阿呆といふも、比較物があつての話ぢや。そこぢやて、乃公がこの兒を一座に差加へようといふのは。」

「爺つアん、己には何だか腑に落ちねえや。」

「この兒に阿呆の役廻りをさせようといふので、さうすると犬共の怜悧が、一層引つ立つといふもんぢや。」

「それで阿呆の役廻りか、馬鹿にしやがらア、ハ、ハ、ン。」

「併し阿呆の役廻りは智慧が無いと出來ぬ。この兒は馬鹿でも無ささうぢやから教へ込めば物になるぢやらう。まアそれは後々の事として、此兒が怜悧か阿呆か、丁度試して見るに善い機會ぢや。若し怜悧な兒なら朝から晩まで毎日同じ野良で牡牛の尻を追廻はすより、美登里團一座の仲間入して、佛蘭西中は愚か、歐羅巴十ケ國を見物しながら打つて廻る方が、氣樂で面白い位の事は分るだらう。若しかまた阿呆な兒なら乃公の弟子入するのは厭ぢやと云つて、ベソをかいたり、泣いたりするぢやらう。美登里老人はとんとそんな阿呆な兒が嫌ひぢやから、連てつてはやらぬわ。面白い處も見物させぬわ。さうするとその阿呆な兒は孤兒院へ送られて、食ふものも食はされず、着るものも着せられずに、酷使はれるぢやらう。村の兒には嬲ものにされるぢやらう。やれ〳〵氣の毒な。」

私とても美登里老人の云ふ事が分らぬほどに智慧のない兒ではない。けれども私にはそこに越すに越されぬ悲しい關所がある。

全く美登里老人の弟子共は瓢輕ものでは、面白さうな相手だ。道連になつて旅廻りをするのは愉快だらう。けれどもさうするには直の傍を離れなければならぬ。が若し私がいやだと云へば多分直とも分れなければなるまい。權藏はきつと私を孤兒院へ送るだらう。私は途方に暮れて、眼に一杯涙をためて居ると、老爺は手柔かに私の頰を指でついて、

「どうぢやな。泣出さぬ所を見ると乃公のいふ事が會得たかの。明日からは乃公と一緒に――。」

「伯父さん、後生だから己等を連れて行かないでおくれ。己等いつまでも母やの傍に――。」と私は泣聲になつて一生懸命嘆願しかけたが、この時恐ろしくカピが吠え出したので、私はびつくりしてその方を見た。

同時にカピは小猿ジョリカール先生の乘つて居た食卓に飛びついたのである。皆が私の方に氣を取られて居る間に、狡猾もの、小猿は、美登里老人の飲みさしの杯をそつと取上げ、偷呑をしようとしたところを、カピが見つけ、己れ不届もの奴と大喝一聲、小猿に飛びかゝつたところなのである。

と見ると美登里老人は嚴しい調子で、

「これ、ジョリカール先生、お前の樣な意地汚なの盜賊を乃公は許して置けぬ。さアその隅に行つて、鼻の先を壁に向けて居ませう。ゼルビノ、お前はジョリカールの番をしなさい。一寸でも動いたら頰邊をガリ、、、とお見舞申すのぢや。よしかな。それからカピさん、お前は善い犬ぢやからお手を貰ひませう。」



小猿は小さな鳴聲立て、萎れながらゼルビノに追はれて片隅に引下るに引かへ、カピはさも得意らしく主人の前へ來て、前脚を渡すと、美登里老人は、それを握りしめて滿足の意を表した。

「さア、それでは話を續けるとして、お前さん、十五兩で手を拍つたらどうぢやな。乃公はそれよりは出せん。」と老人は私の思惑に構はず、談判をつゞけ始めた。

「二十兩にしねえッて事よ。己も二十兩が一文ひけても手放せねえんだ。」

押問答の後に、美登里老人、

「この兒が退屈さうぢやから、一つ庭へ遊びに出して、後でゆつくり相談をしたらどうぢや。」と眼顏で何か合圖をすると、

「ウム、それがいゝや、民、手前、庭に出てるんだ、己の呼びこむまで、動いたらきかねえぞ。」

私は云はれるまゝ庭へ出たけれども遊ぶ氣も何もないから、石の上に腰を卸して考へ込んで居た。私の運命はどうなるだらう。中ではそれを極めてるのだ。

寒氣と煩惱とで私はがた〳〵と震へて居たが、一時間もたつたと思ふころ、權藏が一人で庭へ出て來た。美登里老人に渡すため私を探しに來たのではあるまいか。

「おい、歸るんだ。家へ歸るんだ。」

家へ歸る！　それでは私はいつまでも直の傍に居られるのだらうか。私は權藏に聞いて見たかつたが、それは私に出來なかつた。なぜなら權藏の容子がよつぽど不機嫌に見えたから。

## 仕馴れし家

道中權藏は相變らず無言であつた。が家へ歸りつく十分前程に、突然立止ると、私の耳をぐいと引張つて、

「こら民、手前に云聞かして置くがな、今日聞いた事を家へ歸つて喋舌つたら承知しねえぞ。いゝか。」

私は命を奉ずるより外仕方が無かつた。家へ歸ると、直が待ちくたびれて居て、

「權さん、まア御苦勞だつたね。そして村役場の方の都合はどうだつたえ。」

「いや、已やア村役場に行かなかつた。」

「え？　お前さん、あの村役場に行かなかつた？」

「ウム、何だ、あの……ノートルダム珈琲店でな、二三人の友達に逢つちやつてよ。つい一杯やつてる中に、四時になつたもんだから……厄介だが明日また行つて來る。」

この容子では美登里老人との談判は全く不調に終つたので、明日は本當に村役場へ連れて行かれるのであらうと私は思つた。

私は權藏に嚇かされてるに拘はらず、仔細の事を直に話さうと考へた。けれども權藏がぢつと家に



居るので機會がない。その中日が暮れて私は寢床に入る事を餘儀なくされた。

明日の朝こそ隙を見てきつと話をしようと考へて眠につきながら、さて翌る朝目を覺して見ると、直が居ない。家中を探して見たがどこにも居ない。私の容子を見て權藏が、

「手前、何をうろ〳〵してるんだ。」

「母やを目つけてるんで。」

「直は村へ使に行つて居ねえや。晝過にならなけりやア歸らねえんだ。」

なぜ直が村へ行つたのか、私は直の居ない事がひどく心配になり出した。直は昨夜村へ行くやうな事はちつとも云はなかつた。權藏は私を連れて村へ行く筈なのに、それなら直はなぜ一緒に行かなかつたのだらう。午後直が歸つてから權藏と私は出かけるのだらうか。皆無分らない。何だか恐ろしい心持が胸一杯に湧き始めた。どうも危險が私に近よつて來たやうな氣がした。

權藏はまた何か樣子のありさうな眼附でちよい〳〵私を見るので、それが辛いから私は後園の方へ脫て行つた。

それは小さな後園だつたけれども、私等に取つては大事の後園で、麥の外には私等の食るもの大抵みなこゝで出來た——馬鈴薯、蠶豆、玉菜、胡蘿蔔、蕪菁抔。勿論不用の土地としては無かつたが、それでも直は私が勝手に使ふやうにと、小さい隅の方の土地をくれた。そこへ私は朝々かの赤を連出した序に森の中や、野道で探して來た草花などを植ゑて庭を作つた。ちつとも綺麗な庭で無い事は確

だけれども、氣の向くまゝ此方へ植ゑたり彼方へ植ゑ替へたり、私の空想を滿足させて樂しんで居たので、私が自由に作る私の庭なのだと思ふと嬉しくて堪らなかつた。私は「私の庭」といふ言葉を日に二十度も繰返した。

夏取入れて蒔いた種が、早いのは春を待たず芽ぐみ出して居る。もう大きくなつたのもある。それがまた一通りならず、私の好奇心を刺戟し滿足させて居た。水仙はもう黃い莟を、草リラは紫色の柄を出し、蓮華草も鋸だらけの葉に包まれた心から、可愛らしい莟を出しかけて居た。どういふ風に、またいつになれば花が開くのだらう？　私は自ら問うて日に幾度も私の花園を見舞つた。

けれども私の庭の一部には、かういふ草花よりも一層氣になるところがあつた。それは私が人に貰つた或野菜、それも此村の人のまだ知らぬ野菜の根――菊薯を植ゑつけたところである。私に菊薯をくれた人は、この薯は馬鈴薯よりもずつと味がよく、そしてアルチショーや蕪菁やいろ〳〵の野菜の味を有つた珍らしいものだと云つた。私はこの菊薯を植ゑて、直に不意の御馳走をし、驚かしてやる目論見をして居たのだ。左ればこそ菊薯を植ゑた事は直にもだまつて居たので、やがて芽が生えて來たのを見て、直に何だと聞かれたら、花の咲くものだと騙して置かうと思つた。その中に大くなつて子が殖えたら、直の留守の時にそれを掘起して御馳走を拵へよう。どうして？　そんな細かい事はまだ心配しても見ないが、何でも直が晩餐に歸つて來た時に、驚かしてやるのだと、かう私は考へて居たのだ。だから私に取つては菊薯の芽を出すのが待遠しくてたまらない。もう芽が出さうなものと日に何度



となく、こゝへ來て見るが、一向その樣子がないので、決して芽を出さないのかとさへ思はれた。今も一生懸命劃つくばつて、鼻を土につけないばかり、まだ芽が生えて來ぬかと、見詰めて居ると、だしぬけに、

「民、用があるから入つて來い。」

私は急いで家の中へ入つて行つたが、私の驚きはどんなだつたらう。昨日の美登里老人が犬を連れて來て居たのである。

その刹那に私は何もかも明らかになつた。美登里老人は私を連れに來たので、直が居ては都合が惡いから、權藏は直を村へ追ひやつて置いたのだ。と肚胸をつかれた私は、美登里老人の情に縋る外はないと感じて、いきなり老人の前に跪き、

「おゝ、伯父さん。後生だから己等を連れて行かないで下さい。」私は半分泣きながら願つた。

老爺は可なり物優しい調子で、

「これ、お前は善い兒ぢや。この伯父は決してお前を不幸にはせぬ。乃公は決して子供を打つたり蹴つたりはせぬし、また乃公の弟子共はお前に取つて面白い道伴ぢや。乃公と行くのが、何でお前悲しいかの？」

「母やと別れるのが厭だア！」

すると權藏がいきなり私の耳をぐいと引張つて、

「分らねえ餓鬼だな。どつち道手前はこゝに居られねえんだ。孤兒院へ行くか、この爺やについて行くか。さアどつちだ。」
「己等、母やの傍に居たい！」
權藏は火のやうに怒つて、
「何だと、このちんぴら奴が！　己を見損つて居やアがるな。いやなら手前を棒で叩き出す迄だ。」
「これ、さう怒りなさんな。母を戀慕ふ兒を打つのは善くない、この兒のしをらしい心が、却つて取柄ぢや。」
「爺つアん、そんな甘い事を云つた日にやア、增長して猶泣立てらアな。」
「さア、それでは約束の金を渡すぜ。」
かう云ひながら美登里老人は二十圓といふ金を權藏の眼の前で數へて渡した。權藏はそれを受取つて隱しに入れた。
「乃公に渡す筈の包といふのは？」と美登里老人が聞く。
「それ、そこにあらアな。」と水色木綿の半帕の四隅を結び合はした包を頤で指示した。
老人は腑に落ちぬやうな容子で、その包を取つて結目を解いて見ると、中から私の古襯衣二枚と麻のヅボン一つが出た。老人は詰るやうに權藏を見て、
「約束の品はこゝに揃うて居らぬ樣ぢやな。夏冬の着類一切渡す筈で、乃公が五圓奮發んだのぢや。」



「天にも地にもそれつきりしかねえんだ。」と權藏は木で鼻くゝるやうに云つた。
それでも老人は腹も立てず、
「さうかの、この兒に聞けば解る事ぢやが、併し乃公は今そんな事で言合ふ暇がない。道を急がにやアならん。さア小僧や、おゝ、名は何といふのぢやつたな。」
「民つてんだ。」と權藏は答へた。
「それでは民、包みを持つた。先に立つて歩くのぢや。よしかな。カピ、前へ！」と美登里老人は兵隊に號令するやうな調子で云つた。
私は手を伸べて老爺に嘆願し、權藏に嘆願した。二人とも顏を反けて知らない振をした。私がおろおろしてると、老爺が來て、私の腕こぶしを掴んだ。
もう老爺にひつ張つて行かれる外に仕方が無かつた。住馴れた茅屋の閾を跨いで出る時には、髮の毛を持つて引留られるやうな氣がした。涙に曇つた眼で家のぐるりを見廻したが、誰も助けを求める人が居なかつた。それでも私は、
「母や！　母や！」と二度ばかり聲を振絞つて呼んだ。
答へる人は誰も無い。私はシク〳〵泣出しながら、美登里老人にひつぱられて歩き始めた。
「爺つアん、達者で居ねえ。」とそれでも權藏が後から別れの挨拶を浴びせて、家の中に引込んだ。
もう泣いても蹶いても追つつかない。私の運命は極つて了つた。美登里老人は物柔かに、

「民ッ、さア歩いたり。善い兒ぢや。」
私は老人に腕を取られながら、その傍にひつ添うて仕方なしに足を運ばした。幸ひに老爺は歩調を私に合はして緩くり歩いて呉れた。
峠を越してどこかの村へ行くのだらう。九折になつた山道を登り始めた。曲り目曲り目に見返ると、直の家はだん〳〵に小さくなつて行く。私はよくこの道を知つて居るが、行きづまりの曲り目の一番高いところで、最終に直の家が見える。その高味が暫時つゞいて、直の家も暫らく見えて、それでお了ひ。それから先は私の行つた事のないところ、この年月幸福に住馴れた家に、そこで別れて了へば、もう二度とこの懐かしい家を見る事も出來ないのだ。
幸福と峠が長く續いて居た。けれどもとう〳〵最終の曲り目に來て了つた。美登里老人はまだ私の手を離さない。
「伯父さん、少しこゝで休まして下さい。」と私は一生懸命に嘆願して見た。
「休みたければ休ましてやらう。」
かう云つて始めて私の手を放した。が私はその時老爺がカピに眼つきで合圖をしたのを見た。するとカピは前列を離れて、丁度羊の番をするやうに、私の後へやつて來た。カピは私の番人になつたのだ。若し逃げ出さうものなら、一遍に飛びつかれるだらう。
私は芝の生えた胸壁の上に行つて腰を下すと、カピも私の傍に蹲まつた。私は曇つた眼で直の家を



探した。眼の下には今登つて來た谷が、山畠や森に斷たれて見え、ずつと眞下に、今迄住馴れた直の一軒家が木の間に侘しく立つて居る。烟突から黄色い烟の柱が立つて、風のない空へ眞直に昇り、その末が丁度私の居るあたりへ靡いて消えて居る。
氣の故であらうが、この烟は冬の用意にとて、直と私で山から集めて來た枯枝の束の上に、これも合間々々に拾つて來ては乾して置いた樫の葉の匂がするやうに思はれた。私は小さな私の竈に腰をかけて暖灰の中に足を入れ、その烟突の煽でよく顔へ烟を吹きつけられた煖爐の傍を思ひ出さずには居られなかつた。黄色い烟が私の足下へ靡いて來るやうなのを見ると、私は何だかまだ煖爐の傍に居るやうな氣がした。
目の下とは云へ、高いので可なり隔たつては居るが、そこら中のものが私の目には小さいなりにハッキリと見えた。庭の隅の敷藁の上には、一羽の牝鷄が餌を漁つて居た。外の鷄は皆賣盡してこの一羽だけが殘つて居たのだ。それも餌不足のため大きくは育たず、小さい柄をして居るから、知らない人なら、こゝから見て鳩が居るとしか思はないだらう。
軒端に一本の梨の木が見ゆる。幹が曲つて居るので私は長い事馬にして居た。青い草原の間に銀のやうな線を引いた小川が家の前を流れて居る。私は自分の手で拵へた玩具の水車を据つけるため、苦心してこの小川から水を引いた私の運河を、思ひ出して見ずには居られなかつた。
いろ〳〵のものがその通りに私の目に見える。私の使ひ馴れたブルーエット(佛蘭西の農家などで、

一寸したものを乗せ、手で押して運ぶ一本輪の小さな車）私の手製の犂、前に私が兎を飼つて居た時の兎小舎、それから私の庭、大事の大事の私の庭！

花が咲いたら誰が見るだらう。私の菊畧を誰が食るだらう。きつとあの意地悪の權藏だらう。

私の目の前に見ゆる此懷かしい眺めは、一足前に進むと、もう永久に私の目から消えて了ふのである。私の目は涙で一杯になつた。突然私は街道から私の家へ導く小徑を辿つて居る白い女の髪被を見た。その髪被は立木に隱れて、また見え始めた。白い色が、丁度小枝の間を縫うて飛ぶ淺い春の蝶のやうに小さく小さく見えたのだ。けれども人の一生には眼ではよく見えぬものを、心でハツキリと見る不思議の瞬間がある。私はすぐそれが直の髪被だと明かに知つたのだ。

途端に美登利老人の聲で、

「さア、どうぢやな。出かけるとしよう。」

「おゝ！　伯父さん。後生だからモ少し。」と私は一生懸命に云つた。

「ウム、それではお前の脚もやつぱりあてにならんの。これつぱかしの山道で疲れるやうでは旅は出來ぬ。」

けれども私は答へるどころの騒ぎではない。一心に件の女の頭を見つめた。あゝ直の髪だ！　直の青い短裳だ！　間違ひのない直だ！　家へ歸るのを急ぐのだらう。今まで見た事もないやうな早足で歩いて居る。



あゝ木戸を押して庭へ入つた。つつッと家の中へ入つて隱れた。私は思はず胸壁の上へ立上つた。カピがびつくりしたやうに飛上つて、私の傍に來たのにも何にも氣づかない。直は長くは家の中へ留まらなかつた。駈るやうにして家の中を出ると、兩腕を空に伸ばし、絶望の態度で庭や畠をそここ、探し廻り始めた。

私を探してるのだ！　斯う思ふと私は堪らず、身體を前へ突出して力一杯の聲を出した。

「母やア！　母やア！」

私の聲が谷へ下つて彼方まで傳つて行きさうな事はない。また小川のせゝらぎの音に打勝てさうな事もない。空しく谷間の靜かな空氣の中に搖れて消えて了つた。

美登里老人は私に聲を掛けて、

「これ、そんなところで怒鳴つてどうしたものぢや。お前、氣でも違ひはせぬか。」

私は同じく返事せずに、一心に直の姿を見つめて居た。けれども直は私が自分のすぐ眞上の方に居ようとは氣づかぬから、首などは擧げて見ない。庭にも畠にも私の居ないのを見ると、往來に飛んで出た。うろ〳〵と家の前を行つたり來たりし始めた。

私はまた力一杯に直を呼立てた。

美登里老人は事實を疑ひ出したと見えて、胸壁に登つて來た。

「どれ、どこにお前の母やが居るかの。」

私は涙をぽろ〳〵と滾しながら指さし示した。老爺も漸く見つけたらしく、
「やれ、お前も氣の毒な兒ぢやなう。」と濕聲で云つた。
この同感の言葉が私を勇氣づけた。
「伯父さん、後生だから己等を返して下さい！」
美登里老人は默つて私の手を摑まへて胸壁から下した。
「さアもう十分休んだから出かけるのぢや。カピ！　ゼルビノ！」
カピが私の後へ來て、ゼルビノが前に立つた。
五歩か六歩で峠は轉つた。いくら覗いても、もう見馴れた谷も見えぬ。住馴れた我家も見えぬ。行手には果しもない小山が起臥してゐるばかり。

## 道中

子供を二十圓で買つたからとて、その人は子供を取つて啖ふ鬼だとは極められぬ。美登里老人も私を啖ふために買取つたのでは無かつた。この老爺は人買には珍らしい善人だつたのである。
峠を越して漸く南部地方に向いて傾斜面に出ると、老人は始めて私の手を放し、
「さア、乃公について靜かに下るのぢや。もしかお前が逃げようとしてもカピとゼルビノがお前には附添つて居る。尖つた此奴等の齒をよく見て置くがよい。」



云はれずとも、私は迚も逃げられぬ事を知つて居る。逃げたとて行處の無い事もよく知つて居る。
たゞ默つて溜息をつくと、
「お前も悲しからう。乃公にもお前の心持はよく分つとるから、叱りはせぬ。泣きたいなら泣いて見るもよからう。併し乃公に連れられて行くのは、決して御前の不爲ではないと、かう考へて氣をひき立るがよい。乃公が引取らなければお前はこの先どうなるかの、まづ九分までは孤兒院ものぢやな、お前を育てた人達はお前の父でも母でもない、お前が母やと呼馴たその女子は大變お前を可愛がつた容子、お前も生の母のやうに慕つて居る。それは如何にも結構な事ぢやが、その母やはあの權藏が不承知なのに、押してお前を養ふといふ事は出來ぬ。こゝをよく考へて見い、權藏は無慈悲の男ぢやがその無慈悲も貧故の事、子でないお前の爲に餓死せねばならぬと思ふと、お前が憎くなるのぢやらう。權藏を怨むもよく無い。喃、民、人の一生は修羅場に居る樣なもの、思ふ事の儘にならぬが世の中ぢや。」
これは世の中の酸も甘いも嚙分けた人の言葉なのだらう。けれども今私の胸は道理の言葉よりも、もつと〳〵強い事實の爲め、一杯に詰つて居る、それは——直との生別れといふ事。
私は最早二度と、私を育てゝ呉れたその人、私を撫愛しんだその人、誰よりも誰よりも私の愛したその人の顏を見る事が出來ぬのだ。此考へで私は咽喉を締つけられるやうになつて居た。物をいはうと思ふと泣出すより外は無かつた。
けれども私は美登里老人に云はれた事を考へながら歩いた。全く老人のいふ通りに相違ない、權藏

は私の父でも何でもない。さうすると權藏に取つては、私故に三度の食事も缺かねばならぬほどの道理は無い譯、目の前の災難に迫られて私を追出さうとしたのだらう。今まで權藏の家に育てられて來た事を思へば、恩こそあれ、怨みはさら〳〵ないと、私は初めて考へた。

「喃、民、乃公の言葉をよく嚙分けて見るがよい。お前を不幸ものにしようとて、乃公はお前を連れて行きはせぬ。」と美登里老人は私が始終無言で居るのを見て、時々繰返した。

可なり險しい坂道を下ると、廣い單調な、見渡す限り果もない野原へ出た。人家もなければ樹もない。只一面に細かい桃色の花をつけたブリユイエールや、蓮曉草などが風に波打てる許りである。

何とも云へぬ淋しい感じに打たれて、私はいよ〳〵默つて居ると、美登里老人は廣野の末を指さしながら、

「ほうら、この通り果しもない原へ來ては、逃げようたつて逃げられぬ。もういゝ位に覺悟をするがよい。」

老爺はまだ私が逃げ出す目論見をして居ると思つたらしい。私はとうにそんな考へを捨てゝ居る。それにしてもどこへ私を連れて行く氣なのだらう。聊か氣にならぬ事もない。

が私は思つた——この大きな、鬚髯の眞白な老爺は、初めに私の思つたやうな、恐い人ではなささうだ、私の主人としたところで、決して無慈悲の主人ではあるまいと。

私等は隨分長い事この淋しい物悲しい野道をつゞけた。けれどもまだ果が見えない。私は旅といふ



ものについては全く違つた考へを持つて居た。私の幼心に描いて居た旅の國は、珍らしい木もあれば、繪に見るやうな家もある、もつと美しいところだつた、これはまた何たる相違であらう。

私はこんな野原を、ちつとも休息もせずに旅をするのは初めてだ。私の主人は例のジョリカール先生を肩に乘せ、また背に負うた背囊に乘せて、規則正しい大股で歩いて居る。三匹の犬も主人の傍を離れずにちよこ〳〵と足を運ばせる。老人は時々犬共に慰藉の言葉を投げてやる。或時は佛蘭西語でいひ、或時は私の知らぬ言語でいふ。

老人も犬共もちつとも疲勞といふ事には思ひ至らぬらしい。けれども私はもうへと〳〵になつて居る。身體の疲勞に心の疲勞が加はつて、この先迚も一緒について行けさうに思はれぬ。けれども休んで行きたいとは云兼ねて、棒のやうな脚を引摺りながら辛くついて行くと、主人は漸やく氣がついて、

「民、お前はサボー(佛蘭西の農民の穿く大きな木靴)を穿いてるから、歩けぬのぢや。卯瀨へ行つたら革靴を買つてやるぞ。そこまで辛抱して行くのぢや。」

この言葉は少なからず私を元氣づけた。

私はこれまでどんなに革靴が欲しかつたらう。村で村長の息子とノートルダム旅籠の倅が革靴を持つて居た。そして日曜日の御堂の彌撒祭には、百姓等が皆木靴をがた〳〵引摺つて恐ろしい音をさせる中に、二人はいつも革靴をギユー〳〵させて居たが、子供心にどんなに羨ましかつたらう。

「卯瀨？　まだこゝから遠いの？」

「ほーら、お前の本音が出た！」と美登里老人は笑ひながら「お前、革靴が欲しいの、乃公は底に鋲の打つたのを買つてやる事にしよう。それから剪絨の半股衣と上衣も買つてやらう、帽子も新しいのを喃。これでお前の涙が乾くぢやらう、卯瀬までまだ六里の道を歩く元氣がつくぢやらう。」

底に鋲を打つた靴！　私はもう喫驚して了つた。そればかりでも氣が紛れるところへ、その上にまた剪絨の半股衣！　上衣！　新しい帽子！　あゝもう直が私のその姿を見たら、どんなに滿足して、どんなに得意になるだらう。

靴や剪絨の股衣が貰へる嬉しさに、一時の元氣はついたけれども、何だかどうも此上六里の道を歩けさうにも思はれぬ。歩けなかつたらどうなるだらう。殊にまた出がけには蒼空だつた空がだん〳〵曇り始め、程なく糠雨が降り出して、いつ止みさうな容子もなくなつて來た。

羊の毛裘を着てるから、美登里老人は格別濡れもせぬ、自身のみかジョリカールもそれで保護してやれる、尤もそのジョリカール先生は雨が二粒ばかり顏へかゝつた時に、もうさつさと一人で例の隱場所へもぐり込んで了つたのだ。けれども犬と私は何にも持合せがないから、暫時するとお互に肌までびつしより濡て了つた。まだしも犬は時々身震ひして水を拂ふが、私にはそんな天性の持合せがない。衣服は濕てます〳〵重くなり、身體は氷のやうに冷えてるのに、猶前進を續けなければならぬとは！

「お前はよく風を引くかの」と私の主人は尋ねた。

「いゝえ、風なんか引いた事は無いよ。」



「ウム、さうかの。それなら結構、割合にお前は達者と見える、併しかう濡鼠になつては仕方がない、病氣などが出ても困るから、卯瀬まで行くのは見合すとしよう。そーら、向うに村が見えるが、今夜は彼處で寢ると極めよう。」

漸くそこに見え出した小さな村に辿りついた。けれどもそこには一軒の旅籠も無かつた。そこで百姓家に宿を求めるけれども、泥まみれの子供と犬とを連れた、物貰ひめいた老爺を泊めてくれる人は一人も無かつた。

「こゝは宿屋ぢやねえだア。」と皆が斯う云つて、われ〳〵の鼻の先で戸をぴたりと締て了ふのだ。取付く島もない。それでも主人は次から次へと、根よく尋ね廻つて宿を求めた。相變らず、われ〳〵を迎へ入れて呉れる家は一軒もなかつた。

この分では矢張卯瀬まで、まだ殘る四里の道を歩かねばならぬのだらうか。もう日は暮て來たし、われ〳〵の身體は皆雨のために凍えて居る。殊に私の足はもう棒のやうになつて居るものを。

あゝ、直の家に居たら！

幸ひと最後に尋ねた百姓が、親切氣があつて、われ〳〵の爲に納屋を貸してくれることになつた。併しいよ〳〵中へ入る段になると、火は一切禁物、明もつけてはならぬと云渡し、明日の朝立際に返す約束で、私の主人の持合せの燐寸までも取上て了つた。

それでも屋根の下に寢られたのが拾ひもの、雨だけは確かにわれ〳〵の身にかゝらない。美登里老

人は用心深い人とてちやんと食物の用意までして居た。背に負つて居た軍隊用の背嚢を開けると、中から長い大きな麵麭を取出し、それを四つの片に分けた。その分け方がどうも私の腑に落ちなかつたが此時私は、私の主人が、どうして弟子共によく命令を守らせるか、またどうしてよく訓練して行くのか、その一端を初めて知る事が出來た。それはかうだ——

私共が軒から軒へと漂浪ながら宿を求めて居た時に、黑犬のゼルビノが或店へ入つて一個の麵麭菓子を盗んで來た。それを見ると主人はきつとゼルビノを見て、

「ゼルビノ！　今晩、善いか。」とたゞ一言意味有りげに云つた。

併しこの事を私は忘れて居た。主人が麵麭を四つに切る時私は何だかゼルビノの萎れて居る樣子に氣づいた。

私と美登里老人はジョリカールを眞中に入れて羊齒の枯束に腰をかけて居た。三匹の犬は私等の前に大人しくつくばつた。カピとドルスは頭を擧て主人を見詰め、ゼルビノは首を俛れ、主人に何か云はれるのを恐れる容子が見えた。

美登里老人は果して嚴しい命令の調子で、

「盗人はあの隅に行きませう。夕飯を食べずに寢るのぢや。」

ゼルビノは悄々と立上り、列を離れて匐ひながら主人の指示した片隅に行つて、羊齒の束の間へ潛り込んだ。それより姿を見せなかつたが、愬へるやうな悲しい小さな鳴聲が暫時は聞えて居た。



そこで老人は四つの麵麭の切を私等の間に分け、老人自身は一つを小猿と共に食べた。牝牛を賣つてからといふもの、私は直と一緒に隨分辛い生活をして來たが、それでも今度私の身に起つた變化は、なほどれほど辛く私に見えたらう。

直が毎夕拵へてくれた汁は牛酪なしでもどんなに甘しかつたらう。床敷は硬くとも、鼻まで潛り込んで寢た私の寢床は、どんなに心地よかつたらう。今夜といふ今夜は床敷も掛布團もない、枯羊齒の上に、着の身着の儘で寢て、それでも幸福を祝はねばならぬ身の上となつたのだ。

身體は疲れて綿のやうになり、足には豆さへ出來、その上濕れた衣服が肌や股についてるから、私はがたくと齒の根も合はず、震へて居た。

「お前寒いか。」と美登里老人が聞く。

「少し寒い。」

もう納屋の中は眞暗くなつて居たが、私は老人が背嚢を取出して開く音を聞いた。

「民、こゝに乾いた乃公の襯衣と胴衣がある。濕れた着物を脱いで、これでも着て居るが善い。そして羊齒の間へ潛り込んだら、暫くすると暖もつて寢つけるぢやらう。」

私は云はれる通りにして羊齒の中へ潛り込んだ。けれども迚も寢つかれさうもない。悲しい運命を思ひ出しては寢返りばかりしてゐた。私は毎日この通りの生活をせねばならぬのだらうか。雨が降つても休息もせず、濕れたまゝに倒れるところまで歩いて、毎晩こんな納屋の中で一夜を過ごすのだら

ゝか。私を憐れむ人もなければ、もう直のやうに私を可愛がつてくれる人などは、迚もくありさうな筈がない。

胸が一杯になつて、ぼろくゝ涙を流してると、ふと暖かい息が私にかゝるのを感じた。手を伸ばして見るとカビの尨毛に觸つたので、私はカビがそろくゝ羊齒の上を匐つて私の傍に來たのだと知つた。カビは鼻で私を嗅ぎ始めた。カビの息は顏にも髮にもかゝつた。

何しに私の傍へ來たのだらう？

すぐにカビは私により添つて羊齒の上に寢た。そして優しく私の手を嘗め始めた。私はカビのこの親切な仕打に動かされ、半身を起し、いきなりカビの頭を擁へると、冷たい鼻頭を抱込んだので、息がつまつて蹶いたが、離してやると、すぐ前足を私の手に渡し、それからはぢつと動かずに居た。

私は刹那の感情のため、疲勞も悲哀も忘れ、詰つて居た咽喉も開いた。私は單獨では無かつたのだ。私には友達があつたのだ。

翌る朝早くこゝを立つた。雨もすつかり上つて、空は一天藍を流したやう、乾いた風が徹夜吹いて往來に泥も少ない。道端の藪には小禽が樂しさうに歌ひ交して居た。犬までが喜んで跳廻りながら道中をするのだ。その間にも時々カビは私の傍へやつて來ては、後脚で立上りながら、つゞけ樣に特別の吠え方をするのだ。私にはその意味が明かに分つた。

「落膽してはいけない。勇氣を！　勇氣を！」とこれがカビの言葉なのである。



カビは怜悧な犬で、よく人のいふ事も分れば、人にも分らせる事が出來た。尻尾一つの動かし方で、なまなかの人間の口で云ひ、眼で知らせる位の事は結構通じさせた。取分け私とカビの間には言葉は無用で、知り合つた初日からお互によく解らせ合ふ事が出來たのだ。

程なく卯瀨の町についた。私はつひぞ自分の村から外へ出た事が無かつたので、町を見られるといふ事が、私の好奇心を刺戟して居たが、さて卯瀨へついて見て失望した。小さな塔などの付いた舊世紀の古い家屋ばかりで、それは疑もなく建築に趣味を有つた人などを喜ばせるだらうが、私には何の感じも無く、たゞ汚い家が竝んで居るやうに見えた。

第一私は、どこに靴屋があるだらう？　とそればかりを目的に歩いたから、大抵の外のものは眼にもつかなかつた。小さな塔だの、ゴシック風の建ものだの、記念柱だの、そんなものは全く私に無關係だつた。

その中美登里老人は市場近くの、煤けた古い陰氣な店の前に立留つた、店の前の軒下には何挺もの古い鐵砲だの、銀の肩章のついた金筋入りの古軍服だの、ランプだの、錠前や錆た鍵などを入れたいくつもの籠などが陳列してあつた。老人は私を連れて店の中に入つて行つた。中は隨分大きなものだつたが、日光はこの家に屋根が出來て以來、つひぞ入つた事がないと云つた風で、恐ろしく暗い。私はこんないやな店で靴のやうないゝものを賣つて居ようとは考へられなかつた。

けれども鋲打の上等の靴はそんな暗いところで賣つて居たのだ。老人は私に靴を買つてくれたばか

りでなく、青剪絨の上衣と、毛織のゾボンと、それから羅紗の帽子も同じ店で買つてくれた。どれもこれも、今まで身につけた事のないものばかりだから、私の主人は全く世界中で、一番氣の善い人なのかも知れぬと思つた。

## 初御目見

青剪絨の色が褪て居たのも事實だつた。毛織のゾボンが擦て居たのも事實だつた。帽子の舊の色がどんなだつたか、雨や塵埃のために分らないやうになつて居たのも事實だつた。けれども私はみな分不相應の立派なものだと思つて喫驚して了つた。

私はどんなに早くこの品々を身に着て見たかつたらう。所が旅籠につくと、私の主人は背嚢から剪刀を取出し、折角買つて來た私の上等のゾボンを膝のところからチヨキ〳〵と切り始めた。大變な事になつたと私は驚いた眼をして、主人を見つめると、

「これを切らんと、お前の姿と外の兒の見分がつかぬ。乃公等は今佛蘭西に居るからお前を伊太利ものに仕立てるのぢや。伊太利に行けば、またお前を佛蘭西の子供にせにやならぬ。」

私はます〳〵驚いて居ると、主人は言葉を次いで、

「お前、乃公共は何ぢやと思ふ。藝人ぢや、なりやア人目を惹く服裝をせにやアならん。喃、世間並の姿や百姓風をして、公園地へ出かけたところで、人ッ子一人乃公等の周圍へ集つては來まいがの。



そこぢやて。世渡りをして行かうと思へば異つた姿も必要ぢや。何もすき好んでするのではない。合點が行たかの。」

午前の佛蘭西兒が、午後に伊太利兒に早變りした次第はこの通りだ。

扨私のゾボンは御存知通り膝から下がない。そこで私の脛へは靴足袋の上から赤いリボンを十字に綾取つて捲上げた。帽子にもリボンを捲きつけて造り花の飾を添へた。外の人が私のこの姿を見たら何と云ふか知らないが、私は自分ながら素敵だと思つた。それは屹度素敵だつたに相違ない。なぜならば友達のカピ君が長い事惚々と私を見て居た後、さも滿足らしく私にお手をくれたからである。

ところがカピに引かへ、小猿のジヨリカールは私の前に陣取つて、小面憎く、私が着物を着たり、帽子を被つたりする一擧一動を、大袈裟に眞似て居たが、私の裝束がすつかり出來上るのを見ると、兩手を腰の上に置き、大人のやうな恰好をして私を見上げ、後へ反かへつて嘲笑つた。尤も人の笑ひ方とは違ふが、確かにジヨリカールは笑ひ得るに違ひない。私はその後も長い間彼と生活を共にしてそれを確かめたのだ。で此奴に笑はれたといふ事が、どうも一通りならず、私の自尊心を傷つけた。

「さア、これで、お前の身支度が出來たから、仕事に取りかゝるとしよう。明日はこゝに市が立つから、乃公に取つては書入日で、その初舞臺にお前はお目見をするのぢや。」

初舞臺の御目見とは何の事かと聞いた。すると主人は見物の前で皮切に芝居をして見せる事だと說明した。

「乃公等は明日見物を集めて芝居をして見せるのぢや、お前にはちやんと役を振當てあるから、神妙にそれをして貰はにやアならん。」

私はまだ善く分らないから、喫驚した眼で、主人を見詰めた。

「お前が見物の前で役をして見せるのぢや、乃公が大金出してお前を權藏から借りて來たのは、何もお前に諸國を見物させよう爲ではない。乃公はそんな金持とは違ふ。そちに働いて貰はぬと乃公は食うて行けぬ。よいか。そこでお前には犬共や小猿と一緒になつて芝居をして貰ふのぢや。」

「だつて伯父さん。己等芝居なんてどうするのか知らないもの。」と私はいよ〳〵怖氣づいて云つた。

「ぢやによつて、今お前に敎へるところぢや。お前、カピはひとり手に後脚で歩けるのぢやと思うて居るかの。又ドルスは氣紛れに繩飛をすると思うて居るかの。カピもドルスも長い事苦しい目して稽古を積んだから、今やつと一人前の役者になれたのぢや、お前もカピやドルスと芝居をするには、精出して仕事にかゝつて貰はにやアならん。よいかの。それが分つたら早速その仕事にかゝるのぢや。」

私は今まで仕事と云へば土を掘返す事か薪を割る事か、石を切る事かとばかり思つて居た。その外にこんな仕事まであらうとは思はなかつた。老人は言葉を次いで、

「そこで明日の外題は『ジョリカール先生の下男』一名『二人の中で一番馬鹿なは人の思ふ方ではない』といふのぢや。其筋を云はうなら、此ジョリカール先生が今迄下男をかゝへて滿足して居た――その下男がカピぢやぜ。ところがカピは取る年で耄碌したによつて、ジョリカール先生新しい下男を



欲しいと仰しやる。そこでカピがその下男を周旋するといふ段取ぢや。よいかの、併しカピが自分の代りに見つけて來たその下男といふのが、犬ではなくて、民といふ百姓の小倅なのぢや。」

「ぢや己等と同じ名だ。」

「同じ名だぢやアない。お前がその下男の役廻りをするのぢや。お前が田舍もののぼッと出で、ジョリカール先生の下男奉公に入り込むのぢや。」

私にはなほよく分らないから不思議がつて、

「だつて猿に奉公人があるの？」

「喜劇にはある。よしか、そこでお前がジョリカール先生のお邸へ來て、初奉公に住みこむ。所が先生の眼にはお前が如何にも頓馬に見えるから、こりや阿呆が來たわいと、お前を馬鹿にしきつて了ふ。」

「己等、つまらないや、そんな――。」

「詰つたところでどうするかの、見物にどつと云はせる爲にするのぢや。何も猿とは思はず、善い衆の家へお目見に來たつもりでやればよい。その時主人から食堂の支度をせいと命令られたらどうするの？　丁度こゝに食卓がある。乃公の筋書もその通りぢやから、一つ前へ出て食事の準備をして見るがよい。」

食卓の上には皿二三枚、「ッナ」杯一個、剪刀一挺、肉叉一個、白布一枚と乘つて居た。

どうそれを並べれば、いゝのだらう？

私は云はれる通り前へ出て、手を出しかけたが、どれから始めてよいか分らず、前屈みになつたまま口あんぐり、途方にくれて、顔を赭くしてると、主人は手を拍つて笑ひながら、

「よう！　よう！　大出來々々々、お前の顔附と其恰好といふものが無い。以前に雇つた子供は生意氣で己の馬鹿はどんなもんだといふ風が鼻について居たが、お前はすつかり初心な處が氣に入つた。」

「だつて己等どうしていゝか知らないもの。」

「さアそこがお前の價値ぢや。明日、といふ譯にも行くまいが、四五日するとお前はきつと呼吸を會得むに相違ない。まづ今お前が途方に暮た通りを思ひ出して、どうして善いか分らないといふ心持を見せるのが肝腎ぢや。お前の今の顔附と恰好を忘れなければもう占めたもの、見物はきつと手を拍つて下さる。つまりお前の役の性根がそれぢや。何にも知らぬボット出の田舍ものが猿のところへ奉公に來る。來て見ると猿よりもずつと物知らずで、ずつと間抜ぢや、さあそおれ『二人の中で一番馬鹿なは人の思ふ方ではない。』喃、ジョリカールよりもずんと阿呆、これがお前の役の性根ぢや。この役をよくしようと思へば、今お前がした通りにすればよい。忘れたらその心持になつて一生懸命やつて見るのぢや。その中にお前は本物の役者になれる。」

「ジョリカール先生の下男」は二十分許りで濟む狂言だが、今日の稽古は三時間もかゝつた。それも私丈の稽古ではなく、犬も猿も一緒で、二度三度は愚かな事、時には十遍も同じ事を繰返したから時間がかゝつたのだ。



犬共はちよい〳〵持役で忘れたところがあつて、それを覺えこませるには可なりの時間を取つた。私はその稽古を見ながら、私の主人の忍耐强さとその柔和さとに驚いて了つた。私の村では家畜がいふ事をきかないと、怒鳴りつけたり打つたりした。それより外に家畜の惡い癖を直す法は無いと思つて居た。ところが私の主人はいくら犬共がぶまな事をしても、云ふ通りにしなくても、長い稽古の間唯の一度も怒つた顏をした事もなければ、怒鳴つた事も無かつた。

「さア、やり直しぢや、カピ、お前はよく氣をつけて居らぬの。ジョリカール、お前どうしたものぢや。」とたゞこれだけ云ふ許りだ。けれどもそれで彼等はよく主人の命に從つた。

稽古がすむと、

「どうぢや、民、お前、明日巧くやれやうかの？」

「己等、知らない。」

「やるのは厭かの？」

「厭でもない。面白いや。」

「それは頂上ぢや。全體お前は物解りの善い兒ぢやが、それよりも肝腎な、氣を注けるといふ性分を有つて居る。物事に注意深く、それで柔順であればきつと何事にも成就する。早い話が乃公の犬をジョリカールに比べて見い、ジョリカールは、そりや犬よりも敏捷こくて怜悧ぢやらう、けれども柔順といふ性分は皆無ぢや。早覺えをするが、尻から尻からと忘れ居る。そればかりか、命令られても決し

て喜んですると云ふ事がない。厭になると挺でも動き居らん。右と云へば兎角左といふ風ぢや。それは猿の性質ぢやから仕方がない。ぢやによつて乃公は決して猿に向つて腹を立てた事がないのぢや。猿は犬とは違ひ、義務を盡すといふ考へがとんと無いので、その點から見ると、遙かに犬よりも劣つて居る。分つたかの、民。」

私は點頭くと、

「物事には氣を注けい、わが身は柔順に持ていぢや、お前のせんならん事は出來るだけ身を入れてせい。これが世渡りの奥の手ぢや。」

そこで私は村では決して私の主人のやうに獣類を取扱はないから、全く驚いて了つたといふ話をすると、主人は笑ひながら、

「棒を振上げて獣類を扱ふのは何よりの大間違ぢや、柔しく扱はぬと、獣類は決して心のまゝになるものではない。もし棒で打つ癖をつけると、動物はすぐ恐怖心がつき出す。ことさら藝を覺えさせようとするのには此恐怖心が大禁物ぢや。そればかりか、乃公が腹を立てれば、もう本來の乃公といふものが無くなるのぢや。ぢやによつて人を教ふるのは自分を教ふるといふ事なのぢや。乃公は犬共に藝を教ふるが、犬共もまた乃公を教へてくれる。乃公が犬共に智慧をつけてやる代りに、犬共は乃公の性質を直してくれるのぢや。」

私は主人が餘り可笑しい事をいふと思つて笑ふと、



「お前には可笑しく聞えるかの、それなら少し考へて見い。主人が犬に善い性質をつけようと思へば、主人からそのお手本を見せにやアならぬ。乃公がカピを教へる時に、癇癪を起したと思ひなさい。カピもきつとその通りの眞似をするぢやらう。乃公が自分から慎むやうになつたのも、カピ共のお蔭ぢや。お前、犬は主人の鏡といふ事を知つとるかの。犬を見たら主人がどんな人か、すぐ分る。盗賊の犬は盗賊犬ぢや。百姓の犬は野放犬ぢや。親切ものの犬は優しい犬ぢや、喃。分つたかな。」

まづ稽古は濟んで今は明日を待つばかりとなつた。私の仲間等は、百度も千度も見物の前で、藝をして居るだらうから平氣なものだが、私に取つてはさういふ譯に行かぬ。もし下手を打つたら主人は何といふだらう。見物人は何と云つて私を嘲けるだらう。私は心配して眠つたので、夢にまで恥をかいてるところを見た。

翌日になると、いよ〳〵市の廣場で興行するため宿屋を立つたが、私の氣が〻りは一刻々々に高まる許りだ。廣場までは美登里團一座華々しく行列で繰込むのだといふので、團長の美登里老人眞先に立ち、首を高く擧げ、胸を張出して反身になり、眞鍮の横笛を面白可笑しく吹きながら進むと、一座皆足取を合はせて行列正しく練出す。二番目に續いたカピ、その背中にはジョリーカル先生ゆらりと打ち跨つたが、先生その日の出立と云ッぱ、英吉利の現役陸軍大將とあつて、猛々緋の上衣に、金筋入同じ色のヅボンをゆたかに着こなし。頭には大きな羽を着けた奈破翁帽を戴いた。

それから然るべき間隔を取つて、ゼルビノとドルスが一列に續いた。さて殿に控へたのが私で、

幸ひ主人に敎へられた通りの距離を守つて進んだから行列の外見に大なる失態も來さぬらしかつた。

この妙な行列が人々の注意を惹いた事も事實だが、何よりも卯瀨の町の人の好奇心を動かしたのは、家々の隅から隅に響き渡る美登里老人の可笑げな横笛の音であつた。この音が窓玻璃に響き始めると、何處の家でも急いで窓を明けて、いくつかの首が往來を見渡した。子供等は家の中から駈出してついて來た。呆氣に取られた百姓等までが子供達と一緒にぞろ〳〵ついて來た。私等が廣場につく頃には全く素晴らしい行列になつて了つた。

私等は廣場の木立の下に陣取つたので、四本の木に綱を張渡して、それで舞臺が出來た。さて前藝としては、何でも數番の犬共の藝當を御覽に入れたが、私は自分の役割の事ばかりを案じて居たから、何をやつたかよく記憶にも留まつて居ない。只私のぼんやり覺えてるのは、美登里老人が、横笛の代りにヴヰオロンで陽氣な舞踏の曲や、滑かなメロヂー風の曲を彈いて、藝をさせて居た事だ。

見物は繩張の外に何列にもなつて詰めかけた。私は景氣に驚ろいて一寸見廻したが、皆の目が此方を見詰めてるので、眩しいものを見るやうに私は目を外した。

前藝が一わたり濟むと、カピは圓盆を咥へ、後脚で立ちながら「見物御歷々の衆」から樂捨金を集めて廻る。もし確と財布の口を締めて、知らない顏をしてる人があると、カピは繩張内の手の届かぬところへ圓盆を置いて、その人の前に立ち、二三度吠えて、ポケットのところを前脚でそつと叩いて見せた。



見物はどよみを打つて喜びながら、

「どうだ、賢い犬もあるもんぢやアねえか。財布の重い人をちやんと知つてやがらア。」

「おい、そこの先生、蝦蟇口を開てやんねえな。」

「なに、今きつとやりますよ。」

「吝嗇くせえ代物だからやるめえよ。」

「手前、近え中に伯父貴の遺產を相續するんぢやアねえか。」

こんな事でとう〳〵財布の口を開けさせられる。

暫らくすると、カピは得意らしく、一杯になつた圓盆を咥へて來て主人に渡した。

今度はいよ〳〵私とジョリカールの番である。

美登里老人はヴヰオロンとその弓を持つた手で、科をしながら、見物に向ひ、

「滿場の貴婦人紳士諸君、唯今より一幕物の面白き狂言相演じ、御覽に入れます、外題は『ジョリカール先生の下男』またの名『二人の中の一番馬鹿なは人の思ふ方ではない』狂言幷に一座俳優の手前味噌は老人一切申述べませぬ。たゞ何卒お耳を長く、お目を丸く、拍手の御用意あつて御見物の程を、偏に願上奉ります。」

「面白い狂言」といふが、その實無言劇で言葉なしに科ばかりで見せるのだ。この狂言の二人は俳優ジョリカール、とカピは勿論それでないと勤まらぬが、三番目の俳優（正し、弘）も二語とは、見物

の前で物を云はれぬのだから、すつかり無言劇にしてくれたのは主人の善い思附だ。尤も主人がちよいちよい口上を添へてくれぬと、見物によく分らせる事はまづ六ケしかつたに相違ない。

第一場はジョリカール先生の入である。こゝでまた師匠の口上――先生は英吉利に隠れもない陸軍大将だが、この度印度戰爭の軍功により、新たに位勳と恩給を賜はつた。ところがこの大將、今日までカピ助といふ一人の下男――いや下犬ほか使つて居ない。それでは少し見つともない。財産も出來、位も上つたについては體面も張らねばならぬ。今度は一つ人間の下男を使つて見たいと考へる。さて大將、つら〳〵思ふやうは、獸物は今迄人間の奴隷にされて居たが、その期間が少し長過た。今度は人間と獸類は反對にならねばならぬと。

樂器の音の耳立ぬやう、ヴヰオロンには制音機をかけて戰爭の譜を主人が奏してる間に、ジョリカール將軍は鷹揚に登場する。如何にも場馴れた顏附、下男の來るのを待つ態度でのさり〳〵と歩き廻りながら、ポケットから、燐寸と葉卷を取出し、火を點けて喫し始める。その烟を見物の方にぷうと吹く。

下男が來ないので、少しぢれ始め、癇癪を起しかける。眼玉をぐり〳〵させる。脣をやけに嚙む。足踏をする。

三度目の足踏を合圖に私はカピに連れられて登場する打合せだ。若し私が忘れて茫然して居れば、カピが私に思ひ出させるから、心配するなとの事だつたが、私がぐづ〳〵してると、果してカピは私



にお手を渡し、トチる間も與へず、舞臺に導いて呉れた。

ジョリカール將軍、じろりと私を一目見ると、兩手を擧げて失望の科、何だ、これが今日召抱へようとする下男なのか、飛んでもない代物だといふ風で、私の傍へ來て、鼻の下の寸法を覗き込み、またぐる〳〵私の周圍を廻つて見ては、呆れ返つて肩を聳やかす。

その容子といふものが、如何にも可笑しいので、見物はどつと笑ふ。猿が私を正眞正銘の拔作と見て取つた有樣が誰の目にも善く分つたのだ。そして見物人も全く私をほんもののうつけと見て居るらしい。

どうも筋書に、どちらを向いても私の馬鹿が目に立つやうにしてあるのが情ない。私のする事なす事は、何でも頓間に見えなければならず、それに引きかへてジョリカールはどの場もどの場も智慧の働きと氣の利いたところを見せればよいのだ。

さて將軍はやゝ暫時私を改めて見た後、今度は食卓を私の前に引張つて行く。こゝでまた師匠の口上――

「大將は御覽の通りこの男に愛想を盡かしたものの、また心に思ひ返すやうは、さて〳〵人間といふものは、意氣地の無いものだが、若しや飯でも食はして見たら、ちつとは智慧がつくだらうと。そこで新參者に食事をさせようといふ段取、いか〴〵相運びませうかお慰み――。」

そこで私はちやんと用意のしてある食卓の前の椅子についた。皿の上にはお定まり通り布巾が乘つ

てある。

この布巾はどうするものか、取上ては見たが、私には分らない――といふ心持。

カビ助は、それはお前が使ふのだがと心配さうに眼顔で知らせる。

私は暫く首を拈つて考へたが漸く思ひついて、それを鼻へ持つて來るなり、チーンとやつた。

と見ると大將は腹を抱へて堪らぬやうに笑ひ出す。カビ助は私の頓間さ加減に驚いて、四つ足を天井にどつと尻餅をつく。こゝ暫くは大喝采。

これは失敗つた。鼻をかむものでなければ何だらうと、二度の思案の末、今度はそれを丸めて襟飾にして見た。

ジョリカール將軍はまた腹を抱へ出し、カビ助はまた尻餅を搗いた。

この下男度し難しと見て取つた將軍、えい面倒なと、私をいきなり椅子から卸し、自分が私の代りに腰かけて、さつさと私の食事をやり始めた。

將軍はちやんと布巾の使用法を心得て居る。如何にも物馴れた態度で、軍服の釦の穴に布巾の端を通し、膝の上に擴げた。如何にも粋な容子で、麵麭を割り、葡萄酒の杯を干した。けれど一番やんやと云はれたのは、食事が濟んでから小楊枝を命じ、それを巧に使つた時だつた。

幕が濟むと、霰のやうな拍手の音、我等の興行は大成功の中に終りを告げた。

どんなに猿が怜悧に見えたらう！　どんなに下男が馬鹿に見えたらう！



旅籠に歸ると美登里老人はかうお世辭を云つた。私は立派な喜劇俳優になり濟ました氣で喜んだ。

## 讀書

美登里團一座の俳優は皆（私は例外）立派な藝を持つて居た。只藝に變化のないのが珠に瑕で、同じ場所で二三度打つて種切になる。そこで一つの町に幾日も逗留して興行することが出來ぬ。町から町、村から村へと漂浪つて歩かねばならぬ。

卯瀬の町も三日の後に出立する事となつた。さてどこに行くのだらう？

私は宿を出てから、この疑問を發すると、主人は私をぢつと見て、

「お前、この邊の土地を知つて居るか。」

「いゝえ。」

「それなら何で聞くのぢや。」

私は答へる事が出來ずに、行手の谷間に導く、われ等の前の眞白な長い街道を見詰めた。主人は詞を重ねて、

「乃公等はこれから折役へ行つて暮留堂、暮留堂から比禮寧へ行くのぢやと云ふたら、それがお前にどうあるかの？」

「でもお師匠さん（と私は美登里老人の事を云馴らはした）は行つた事があるの？」

「今度初めて行くところ許りぢや。」
「でも初めて行くところをどうして知つてるの？」と私は不思議がつて聞いた。
主人は何か私の身體から見つけ出さうとするやうに、私を見て居たが、
「民、お前、讀む事はまだ知らんの？」
「知らない。」
「本はどんなものか、知つとるか？」
「ウム、知つてるよ。御堂の彌撒に行つて、お祈りをする時に、皆が開て見るんだ。己等は中に繪があつて革の表紙のついた立派な本を、御堂で何度も見たよ。」
「よし、それではお前は、本の中にはお祈りの文句を入れて置けるといふ事が分つてるの。」
「あゝ。」
「本の中にはその通り、お祈りをちやんと入れて置ける。お前が御堂でお祈りをする時は、お前の母がお前の耳の中へ入れて置いた文句を、お前の智慧の働きで思ひ出していふのぢや。ぢやが本を持つてお祈りをする人は、耳で覺えた事を智慧で引出すのではない。目で本を見て、本にある通りを云ふのぢや。忘れた事を思ひ出す苦勞が入らぬ。本を讀むとはその事ぢや。併し本の中にはお祈りの外にいろ〳〵の事を入れて置ける。今度どこぞで休息したら、乃公の本をお前に見せてやらう。其本の中には乃公等の歩いて廻る國々の詳しい土地の名から、風俗習慣、その土地にあつた昔からの名高い



事、えらい人の名などちやんと入れてある。乃公がその本を開て讀むと、乃公が行つて見て來たと同樣に、何でもその土地の事が分るのぢや。」
私は今迄ほんの野蠻人同樣に育てられて來たから、文明の生活に就ての觀念といふものが頓と無かつた。この詞は次第に私の心の目を開く天啓のやうなものであつた。
けれども私は學校にやられた事が一度ある。尤もそれは一月許りの間だつた。その間私は一度も本を持たせられた事がなかつた。讀む事も書く事も、何一つ敎へられなかつた。私の子供の時分には田舍には學校のないところが澤山あつた。申譯の學校はあつても、先生が何も知らないためか、自分の用事にかまけるためか、子供等には何も敎へないで濟してるところもあつた。
私の行つた學校もそれだつた。先生は何か知つて居たのだらうか。いや知つて居たのだらう。先生を無學のためだなどと、侮辱しては濟まぬ。けれども先生は私にも、私の仲間にも、つひぞ何も敎へた事の無かつたのは事實だつた。
それは私達の先生は外にする仕事があつたからだ。先生の本職は木靴屋で、その方には朝から晩まで精出して働いて居た。始終山毛欅や胡桃樹の木片屑を、自分の周圍に飛ばして兩柄の刀を使つてるのを見かけたが、生徒等には雨が降るとか、お天氣だとか、寒いとか暑いとか挨拶する外に讀書なら算術なら敎へるのをつひぞ見た事が無かつた。學課の方は一切自分の娘任せなのだつたが、その娘の職業が仕立屋なので、父親が兩柄刀を使つてる間に、娘は一生懸命針に絲を通して居た。つまり私は

一ケ月の間に何も教はらなかつたのだ。
それも無理はなかつた。先生は活きて行かなければならぬのに、生徒の數と云へば私とも十二人、月謝が二十錢宛で、一ケ月の收入が都合二圓四十錢、これでは三十日の生活が立ちさうも無いから、そこで木片屑も矢鱈に飛ばし、お針も懸命に運ばせた譯だつた。
今はこんな學校は鐘太鼓で探しても無い。
「お師匠さん。讀むのは六ケしいかい？」と私は可なり長い間考込みながら歩いた末に尋ねて見た。
「それはの、頭腦の鈍なものには六ケしいわい。また氣の無いものには猶と六ケしいわい。お前、鈍でも無ささうぢやな。」
「己等、それは知らないが、氣が無い事はない。」
「ウム、さうかの、それなら教へてやつてもよいが——まア、いゝわい。行先は長い。」
かう云ひながら主人は歩いて居る。何だか私に教へてくれさうも無い。その時分私が讀むといふ事は只一寸本をひろげて、一二度何か云つて貰へば、一切合切すぐ合點が行くやうな氣で居た。
私が心待して居たにも拘はらず、其日はとうゝ何も教へてくれなかつた。翌日また旅をつゞけて田舍道を歩いてると、主人は道傍で塵埃まみれの板の端を拾ひ上げた。
「さア、これがお前の本ぢや。」
板片が本！　冗談をいふのかと思つて、主人を見上げた。けれども主人の顏は至つて眞面目なので、



私はまたその板片を見詰めた。
矢張どうも板片である。腕ほどの長さ、掌二つほどの幅のある、綺麗に削つた山毛欅板で、いくら見ても字も書いてなければ繪も描いてない。全く白木の板に相違ない。
どうして此白木の板を讀むのだらう。何を讀むのだらう。
「ウム、お前の智慧が働き出しとるの。」と主人は私の容子を見て笑ひながら云つた。
「お師匠さんは己等を玩弄にするんだ。」
「飛んでもない。物を知らぬものを玩弄にするといふほど善くない事はない。お前を玩弄にすれば乃公の恥辱ぢや。これ、民、向うに木立が見ゆるから、彼處で休むとしよう。この木の片で、どうしてお前に讀方を教へるか、見て居るがよい。」
私等は程なく木立の下へ來て休んだ。そこには柔かな芝が一面に生えて、小さい白菊が振蒔いたやうに咲いて居た。ジョリカールは鎖を解かれて自由になると、待つてたやうに木の上へ飛んで登り、その枝この枝と飛廻りながら、胡桃でも落すやうに枝を搖ぶり始めた。犬共は大人しく、尤も疲れても居るので、私等の周圍に丸くなつて寢た。
美登里老人はポケットから剪刀を取出すと、拾つて來た山毛欅板を薄く削いだ。そして巧く削げたのを兩面とも根よく綺麗に削り上げ、それを十三の四角な小さなものに切つた。
私はその間目を離さず見詰めて居た。そして一生懸命ありだけの智慧を働かして見たが、私はほん

とに物を識らなかつたから、この小さな木の片で、どうして本が出來るものか、分らなかつた。私は本といふものは、幾枚かの紙を綴合し、その紙には黑い文字を竝べたものだとは知つて居るが、全體どこに紙があるだらう、どこに黑い文字があるだらう。

「この木の片の兩面に、一字づゝ假名文字を剪刀で彫りつけるのぢや。さうすると二十六の文字がすつかり出來上らうがの。お前は一字一字その形と讀方をよく覺えて、一目で知れるやうに會得で了はにやならん。それから今度目は一つ一つ合して單語を作つて見るのぢや。乃公が云ふ通りの單語を、お前が作れるやうになれば、もうそれで本が讀めたも同じ事ぢや。」

程なく私のポケットはこの木片で一杯になつた。翌日からは合間々々にこの木片で勉强し始めた。けれども覺えたいといふ考へと、覺えるといふ事は全く別物だ。なか〳〵私の思ふやうな譯のものではない。どうもやり出さなければ善かつたと思ふ事さへあつた。それは何も意けるためではないが、カピの方が私より先に覺えるので、少からず私の自尊心を傷けられるからだ。

それはかうで、主人はカピがよく時計の數字を讀むことから思ひつき、私と一緒にカピにもをしへ込まうと、その通りにやり出したのである。そこで私はカピの同級生といふ事になつた。同級生のカピに負る事になつては一大事である。尤もカピは口が利けぬから文字の發音は素より出來ない。私の上にならべた文字の中から、主人の讀み上るものをちよつかいで刎ねるのである。初めは私の方がカピよりも早く進歩した。併しカピは進歩が遲くても私よりも確かな記憶力を持つて居る。一度覺え込



んだ字は決して忘れない。

私が讀違ふと主人、

「カピなら間違はずに讀むだらう。」

すると主人の言葉が分るのか、カピは勝誇つたやうに尾を振始める。

「獸類よりも馬鹿——それは芝居ならいゝがの。實際では恥辱ぢやな。」と主人は附加へた。

そこで私は一生懸命になつて勉强しなければならなかつた。最後にはカピが自分の名の四文字(Capi)を綴るのが關の山位の時に私はもうそろ〳〵本が讀めるやうになりかけた。

或時主人は私に向ひ、

「民、お前、もう文字が讀めるやうになつたから、これからは心掛次第ぢや。そこで今度は音樂の譜を讀んで見る氣はないか。」

「音樂の譜が讀めると、お師匠さんのやうに歌へるやうになるの？」と私は目を丸くして尋ねた。私は村のものが銅鑼聲を出して歌ふのほか聞いた事がないからかも知らぬが、私の主人の歌を聞くと、いつも恍惚と何もかも忘れて聞きとれるので、自分もあんなに歌へたらと思つて居たのだ。

「何ぢや、乃公のやうに歌ひたい？」

「おゝ！　お師匠さんのやうには、迚も歌へる筈が無いけれども——。」と私は力を込めて云つた。

「お前、乃公の歌を聞くのが好か。」

「己等、何よりも好なんだ。鶯なんかよく歌ふけれども、お師匠さんの歌の方がどれほど好か知らないや。そして鶯の歌なんか、全く譯が違ふんだもの、お師匠さんが歌ひ出すと、己等ひとり手に泣きたくなつたり、笑ひたくなつたりするんだ。」

「ウム、さうか。」と主人は云つて、ぢつと私を見つめた、私は少し躊躇しながら附加へた。

「そして……そしてお師匠さんが悲しさうな歌を歌ふと、伊太利語の歌なんか、文句はちつとも分らないけれども、己等、いつも母やの傍へ連れて行かれちまふんで、母やが歴々と己等の眼に見えて來るんだ。」

すると主人の眼には涙が一杯になつたが、何にも云はないで居るから、若しや私の云つた事が惡かつたのかと子供心に案じて尋ねた。

主人は感情に充ちた調子で、

「民や乃公は何も機嫌を損じたのではない。却つて今のお前の詞で、乃公の若かつた、盛の時代を思ひ出したのぢや。何も案ずるには及ばぬ。乃公はそちに歌を敎へてやるとしよう。お前は子供ながらよく物の憐といふ事を心得とるから、やがては人を泣かす事も出來るぢやらう。お前には今に分る時が――。」

かう云ひさしたが、主人は感情の昂る風情で、そのまゝ詞を切つて後を云はない。何を云はうとしたのか、私には察する事も出來なかつたが、私はずつと〳〵後、或悲しい、恐ろしい事情の下に、こ



の時の主人の心持をよく知ることが出來た。それはだん〳〵に私がお話をしようといふ題目なのである。

翌日から私に譜を讀む事を敎へてくれた。それも最初は板の片に五線を刻んで、ドレミフアの音符を彫りつけたもので、習ひ始めたのだが、どうも譜を讀むといふ事は文字を讀む事よりも遙かに六ケしい。私は容易に覺えられずに居ると、犬には辛抱強い遣の主人も、一度などはしびれを切らし、

「犬や猿ならその積で我慢もするが、民、お前にはもうやり切れない。」とかう叫びながら、芝居がかりに兩手を空へ上げ、また矢庭にそれを落して、強たかに自分の臂を打つた。

何事でも可笑しいと思ふ事は眞似をしなければ滿足しないジヨリカールは、すつかり主人のこの時の身振を覺え取つて了ひ、次の日からは、私が師匠の前で覺えられずに難儀してると、すぐ兩腕を高く擧げ、臂を叩いては私を愚弄し始めるのだ。

「そら見んか、ジヨリカール迄がお前を馬鹿にして居る。」

併しその實ジヨリカールは主人を馬鹿にして、その眞似をして居るやうにも私には見えた。そのつもりでジヨリカールに愚弄されても餘り腹も立てずに居た。その中に第一の難關を通り越すと、後はどうやら易々と音符も讀めるやうになつて來た。

私等は毎日道中を續けてるので、距離の都合で一日歩く事もあれば半日で濟む事もある。行先々では必ず興行をし、その日の生活を立て、行くので、絶えず犬や猿を訓練して行く必要もある。その間

にはまた三度の食事もせねばならず、殘る時間と云つても、格別無いところから讀書と音樂を習ふのだから容易の事ではない。途中の木下蔭や芝生の上などが、私の敎室で、暇さへあればポケットから例の木片を出して勉强するのだ。私の勉强の仕方は、同じ年頃の外の子供のとは全く違つて居た。

私は隨分意氣地がないと叱られて辛い思ひをしたこともあるが、それでも或日主人は柔しく私の頰を叩いて云つた。

「お前は質もよいが根もよい。乃公と一緒に居る中に、今に一人前讀書が出來るやうになるだらう。そして歌の筋もいゝから、立派な歌手になれるに相違ない。」

私が一人前の男となる基礎の出來たのは、全く主人のお蔭であるが、それと同時にこの苦い旅稼が私の健康に非常なる影響を來した。私が直の家に居る時は、權藏には「町の兒」だと賤しまれ、美登里老人には「蚊のやうな」腕と脛をもつと云はれたほどに實際痩せた不健康の兒であつたけれども、主人と共に風雨寒暑の厭ひなく、また數々の艱難辛苦に堪へて野天を漂浪ひ廻つた結果は、手足を丈夫にし、肺を强め、皮膚を頑固にし、寒さも恐れず、暑さもめげず、雨に打たれ日に曝されても平氣な身體となり、同時に困難を意とせず、苦痛を忍ぶといふ頑强な精神を作る事が出來た。私の身體と精神にこの訓練を受けなかつたならば、私がだん〳〵お話しようとするやうな非常の場合に、私は迚も堪へて行く事が出來なかつたに相違ない。

併しそれは後の話であるが、さて卯瀨からは私等は佛蘭西の南部地方を打つて廻つた。私はきまり



で向うに村が見え出すと、犬のお化粧に取りかゝる。それは譯もなく濟むが、ジョリカールに陸軍大將の裝束をさせるのが、一骨折で、この裝束をすれば一働きせねばならぬと知つてるから、いろ〳〵滑稽な工夫を巡らして私に着物をつけさせまいとする。そこで私はカピを呼んで助太刀を賴む。カピは實に氣の利いた怜悧な犬で、ジョリカールを押へつける急所を知つてるから、猿もとう〳〵降參して柔順に軍服を着る。さて美登里團一座の身支度が出來上ると、美登里老人は例の横笛を吹出す。すると不思議なもので、一座俳優の順序が立つて足並が揃ひ出す。この行列で繰込んでも一向人寄がないと、見限をつけて興行を見合せるが、ぞろ〳〵人だかりがあると、そこで一興行し、すぐにまたその村を立つ。氣の利いた可なりの町へ來ると、始めて三四日打ちくつろいで逗留する事が出來る。この逗留中午前は、主人が私にカピを連れて見物に出してくれる。

初めて或大きな町に逗留して、私を散歩に出して呉れる時に主人はかう云つた。

「外の子供なら學校に通つて居る所をお前は乃公に連れられて諸國を廻つて居る。併しこれも學校に劣らぬ學問ぢや。取分け大きな町へ來たら、善く眼を開いてとつくりといろ〳〵の物を見て置くがよい。お前が何ぞ當惑する事に出くはすとか、知らないものを見たとか、何ぞまた聞きたい疑問でも起つたら、歸つて來て遠慮せずに乃公に尋ねるが善い。乃公は何でも知つとるとは云はぬが、大概お前の好奇心を滿足させる位の事は出來るぢやらう。乃公とて腹からの大道藝人でもない。こんな商賣よりはもつと氣の利いた事を修業して來たつもりぢや。」

「お師匠さんは何を修業したの？」と私はつひ好奇心に驅られて聞いて見た。

「いや、その話ならいづれ折を見てしよう。只お前はこの憐れな犬使ひも、舊は身分のあつたものだと、かう思つて居てくれゝばよい。それとは反對で、お前は今みじめな生業をして居るが、心の持ちやう一つではだん〳〵にこの世の中に頭を持上げて行く事が出來る。人間は運一つといふがそれは間違ひで、運三分に自身の努力七分ぢや。民、お前によく云つて置くがの、乃公が合間々々お前に敎へる課目を一生懸命に勉强せいよ。乃公の平生云聞す事を、よく耳に留めて置くやうにせいよ。今は分るまいがの、お前が大きくなつたら、きつと乃公の詞を、思ひ出す日が來るぢやらう。お前をあの母やの手から、生木を割くやうにして引離したこのみじめな大道藝人を、心から思つてくれる日が來るぢやらう。乃公はいつもお前が乃公に連れられて來たのは、決してお前の不幸ではないと信じとるのぢや。」

この言葉はよく私の耳の底に殘つた。同時に私は主人が舊どんな身分のものであつたらう、また何でこんなに零落たのだらうと子供心にも知りたくて仕方が無かつた。

## 闇夜の怪物

私等がもう幾ケ月かの旅をつゞけ、ミューラーといふ村へ來て、とある旅籠の納家に一夜を過したその日の事である。主人は私に話をして聞かした。



「この村から佛蘭西の歴史に名高いえらい男が出た。ひよつとしたら、この旅籠で働いて居たのかも知れぬと思ふが、その男は馬丁から仕上げて、そのころ佛蘭西領だつた伊太利ナープルの王樣となり、六年間もそこを支配して居つた人ぢや。ミューラーといふのがその名で、この村の名も記念のためにつけたのぢやが、乃公はこの王樣をよく知つて居た。始終王樣とは一緒に對話もしたが――あゝ、それも昔の夢ぢやつたわい。」

かう云つて主人は溜息を吐いた。私は喫驚しながら、つひうつかり、

「ぢやアあの王樣が馬丁をして居る時知合になつたのの？」

「いゝや。」と主人は淋しく笑ひながら「王樣の時にぢや。ミューラー將軍が馬丁をして居たのは此村でぢやが、乃公の此村へ來たのは今度始めてぢや。王樣と乃公が知合になつたのはナープルの王宮で……あゝそれも三十年の昔になる。」

「それではお師匠さんはほんとに王樣を知つてたんだね？」

私のかう叫んだ調子が餘程可笑しかつたと見えて、主人は高々と笑ひ出した。

私等は以前この王樣の働いて居たかとも思はれる甌の前の榻に腰をかけ、壁に背を凭せながら話をして居たので、大きなシコモルの木が私等の頭の上にこんもりと茂つて、夕蟬が單調に鳴いて居た。そして向ひ側の屋根の上からはもう月が登りかけて居た。涼しい氣持のいゝ晩で、九時に近いにまだ日の薄明りが殘つて居た。

「民、もう寢たいか。それとも、ミューラー王様の歴史でも聞きたいか。」
「お、、お師匠さん、どうぞ王様の歴史を！」
主人は月の光を正面に浴びながら、私にミューラー將軍の長い歴史を話して聞かしてくれた。私は今迄歴史といふものは面白いものだと聞いて居たけれども、つひぞどんなものを歴史といふのか考へもつかなかつた。直は只自分の眼の届くだけの土地の事ほか知らないし、またその上にどんな世界があらうとも考へて居ないから、歴史の話など一度も直に聞いた事は無かつたのだ。主人から聞いた王様の歴史はどんなに面白かつたらう。
それにしても主人はこの王様を知つて居たのだ。何度も王様と談話をしてるのだ。全體主人は何んな人であつたのだらう。若い時には何をして居たのだらう。そしてどういふ譯で今見るやうなみじめな老爺になつたのだらう。ミューラー王様の話を聞いてから主人に對する私の好奇心はます〳〵高められて了つた。
私等はそこ〻と打て廻つてやがて暮留堂の港に來た。こ〻で私は始めて海を見、商船を見、立派な都會を見たので、いろ〳〵の新らしい觀念を得る事が出來た。大きな都會だけに、こ〻では七日も續けて興行する事も出來たが、さてこ〻を立つてから比禮寧の方に行くまでの道中が、いやなところで隨分難儀した。森もなければ、畑もなく、人家もなく、只廣漠たる荒地が續いて居るのみなので、



こ〻へ差しかゝると、主人は私に向ひ、
「さア、いよ〳〵ランド（この邊一帶の荒地の名稱）へ來た。この荒地が二十五里續いとるぢやから、お前の足に十分覺悟をさせいよ。」
覺悟をさせるのは、啻に私の足許りではなかつた。頭にも心にもさせなければならなかつた。なぜなら、私はこんな果しもない荒野を進んで行くと、譯もない悲哀の念、絶望に惹入られるやうな感覺の囚となるからである。
われ〳〵は覺悟はして進んだけれどもいくら歩いても、同じところに止まつて居るとしか思はれない。前も後も右も左も、プリユイエールや蓮曉草、山苔さてはその軟やかな、豐な葉が見渡す限り風にもまれて、靡き、倒れ、起上り、そして波のやうに動いて居る羊齒を見る許り、美登里老人は夕方にはどこぞの村に着けるだらうと云つたが、夕方になつても同じ事、どうも村らしいものがありさうな容子はちつとも見えぬ。朝早く立つたので私はもう隨分と疲れ拔いた。けれども日はもう入つて了つたし、今の中に村を見つけなければ、今夜は寢る事が出來ぬと思ふので、私等は出來るだけ足を早めた。其中に道の主人も疲れ切つて道端に休息しようと云ひ出した。
私は向うの方に小高い丘が黑く見えるので、七人が休んでる間にそこまで行つて、もしその邊に燈火でも見えはせぬか見て來る事にし、道伴にはカピを呼んだ。所がカピも疲れ切つてるので主人の傍に寢たまゝ知らない振をして居る。

「民、お前、怖いの　。」
主人にかう云はれると、私は何のといふ氣が出て、そのまゝカビも連れず、只一人丘を目指して出かけた。

もうすつかり暮れて了つたが、今宵は月も無く、空には星が輝いて居た。けれども輕い水蒸氣が一面に立つて居るので、星の光りもいくらか朦朧して居る。その代りそこら中が一體に明るみを持つてすべてが朦朧して居るやうにも思はれた。私は右左に心を配りながら進んだが、眼にぶつかつて來る物の形が何でもかんでも違つてるやうに見える。これは藪だなと見分けをつけるまでには、まづちやんと肚の中で道理をつけてかゝらなければならなかつた。それでないと藪が藪に見えない。蓮曉草の株や、曲りくねつた枝を持つた灌木の、そこ〻に立つてるのなど、全く空想の世界に棲む生物のやうに見えた。どうもこの荒地がすつかり魔界に變つて了つたかのやうに思はれた。

私の主人は私に怖いかと尋ねた。多分主人はこの卑濕の荒地では、時々變つた事があるのを知つてるのだらう。私は考へて見た――若しこれが外の兒だつたら、忽ちおびえて進めなくなるだらうと。幸ひに私はそれほどの臆病ものでは無かつた。平氣で進んで見る勇氣が有つた。

夜目に近いと思はれた丘が案外遠かつた。漸く麓へついて、さて上らうとすると、蓮曉草や羊齒がいやが上にも茂つて、時には私の頭を越して居る。その下を潜つて行かねばならぬ事もあつた。それでもどうやら高所へ出て、眼を皿のやうにして四方を見廻した。どこにも燈火などは見えない。私の



視線は果しもない夜陰の中に消えて了ふ。不明瞭な物の形、異樣の影、私の方に章魚のやうな手を伸ばしてる蓮曉草、舞踏をして居るやうな藪、こんなものが眼に入る許り。

若しも牝牛の鳴聲とか、犬の遠吠えとかゞ聞えはせぬかと、一心に耳を澄しても見た。何といふ靜かさであらう。私は思はずぶる〳〵と身を震はした。同時に一種の恐怖が私の胸に食ひ入つたのである。何を恐れたのだらう、私には分らぬ。分らぬが、丁度危險が頭の上にかゝつて來たやうな感じを覺えたのだ。

私は急いで主人の傍に歸らうと思つて、モ一遍私の周圍を氣味惡げに見廻した。途端に私は遙か向うの蓮曉草の上の方に、黑い大きい影がにゆつと現はれて、それが動き出すのを見た。同時にまた私はこの黑い影が小枝に觸つて起ずらしいさわ〳〵といふ葉ずれの音を聞いた。

私はそれを全く疑心暗鬼で、今まで氣がつかなかつた立木か何かを見誤つたに相違ないと、自から道理をつけようとした。

死んだやうに風のない晩だつた。羊齒のやうな靡き易い枝さへも少しも戰がないで居る。それを動かして音を立てるには多少の風が無ければならぬ。さなくば誰か人が來たのだらう。

人が來た？

そんな事のある筈はない。もし人ならば羊齒や灌木の上に、突拔けて見えるほどに脊の高い筈はない。私の知らぬ動物か巨きな夜の怪鳥か、恐ろしい足長蜘蛛の化物か、何とも判斷はつかないが、

兎に角怪物に相違ない。

かう考へながら我に返ると、一刻もぢつとして居られぬと、主人の居る方角へ、一散に丘を駈下り始めた。けれども奇怪にも降り坂なのに、上つた時より早く下られない。蓮曉草の株で引止められる。敷に打かつて倒される。着物がひつかゝる。荊棘の中に靴を踏込む。その都度私は足を止められるのだ。

辛くも丘を下りて、こはぐ〳〵後を見返ると、もう見えなくなつたかと思ひの外、怪物はます〳〵私に近よりつゝある。もう程なく私に追つくだらう。

幸ひともう荊棘や敷がなくなつたから、草の上を一目散に主人の方へ走つた。走りながらも時々後を見返ると、その脊高の雲つくやうな怪物はいよ〳〵私に近よつて來る。私は息を限りに走つた。もう後方を見返る氣力もない、背中にはすぐ怪物の手がさはりさうでむづ〳〵して居た。

狂人のやうに走り拔いて、やつと主人の休息して居るところへ駈けこむと、私はそのまゝ主人の足許へ倒れて了つた。

三匹の犬は事ありと見て、けたゝましく吠え始めた。

私はたゞ喘へぎながら、絶え入るやうな聲で、

「化物が――化物が――。」と云つたが、これより上は口が利けなかつた。

「何ぢや、化物ぢや？」と主人は其方を見たやうであつたが、犬共の喧ましく吠ゆる間から、私は主



人の呵々と大笑するのを聞いた。同時に主人は俯ぶして居た私の肩を突いて、

「ばけものよりもお前がばかものぢや。膽を据ゑて化物の正體をよく見い。」

主人の笑聲は私に道理をつけた。私は半身を起し、眼を睜いて主人の指さす方を見た。

私を嚇かした件の怪物は向うの方に立止つたまゝ、ぢつと動かずに居る。

けれども始めて見た時の恐怖の念はまだ殘つて居て、私の心臟は相變らず鼓動を續けて居る。唯私はもう荒野の中の一人法師ではない。傍には主人も居れば犬も居る。何とも云へぬ寂寞の念は既に消え失せて居ただけ心丈夫だ。

もう恐くも何ともないぞと、膽を据ゑて怪物を見たが、初めて見た時と格別異つた形に見えぬ。私の眼に怪物は依然として怪物である。

「獸であらうか？　人であらうか？

人と思へば人らしい身體も頭も腕も持て居る。獸と思へば、すつかり毛皮に包まつてるところ獸らしく、そして恐ろしく長い瘠せた後脚で立つて居るのだ。夜目だからハッキリとは見えぬが、黑いひよろ長い影が星明に、影繪のやうに、空に浮び出して居る。

私が何だらうかと見詰めてる中に、主人はこの怪物に詞をかけ始めた。

「こゝから村まではまだ遠いかどうぢやの？」

主人が話しかけるからは、やはり人なのだらうか。

私は怪物が返事をせずに、丁度鳥の鳴くやうな、乾いた笑ひ聲を出すのを聞いた。

さては鳥なのだらうか？

けれども主人は猶詞をかけて何か聞取らうとして居る。主人の容子がどうも何かに魅されて問答を始めたやうに見えた。左なくば全く常識を外れた事をやり出したとしか思はれなかつた。なぜならば若し獸が人の語を解するにしても、返事の出來る筈はないからである。

ところがこの怪物が口を利き出して、この近所には村はない、唯羊小舍があるから、そこまで案内してやつてもいゝと云出した。

「それでは案内を賴まうかい。」と主人は云つた。

どうも大變な事になつたと私は思つた。人の通り口を利くからは矢張り人間なのだらうか。けれどもあんな恐ろしい長い足の人間といふものがあるものではない。

口を利く容子では格別恐ろしくもなささうだから、傍へ行つてよく見ればいゝのだが、それほどの勇氣も無かつた。で私は包を背負つて、無言のまゝ主人の後から續いた。

主人は歩き出しながら、私に云つた。

「民、お前の怖がつた化物の正體は分つたらうの。」

私にはまだ一向分らない。お伽噺などによくある山男でもあらうかと思つて、小聲に、

「この原にはあんな脊高の巨人が住んでるの？」



「さうぢや、こゝのものが權に乘ると、あんな化物になるのぢや。」

主人はこのランド地方の住民が、砂地と沼地の多いこの原を旅するのに、あの通りの木で拵へた一種の權を足に括りつけて歩くのだと說明した。

その夜は原中の羊小舍に一泊して、それから比禮寧の方に立つた。幾日かの旅の後、下比禮寧のポーといふところに落ちついたが、こゝは人も知る避寒地で、私等の着いたのはもう冬の初のそろ〳〵この町が賑はひ始めた時であつた。

私等は居心地のよい一冬をこのポーに過した。英吉利人などが澤山こゝには避寒に來て居て、私等の風行には拔ぬけた都合がよかつた。狂言と云つては「ジョリカール先生の下男」の外に「大將の薨去」「正義の勝利」「瀉下劑」といふやうなきまつたものばかりで、見物の性質の惡いところでは二三度續けて風行すると「何だ、もう種切なのか」などと惡口を叩かれたが、こゝの子供等は飽かずに同じものを何度でも見に來る。この子供も大抵英吉利兒で、終ひには皆私等と馴染になつて了つた。そして毎日菓子などを隱しに入れて來ては、私や犬猿などに分けて呉れる、雨でも降らぬ日は大抵毎日風行して居た。

さうする中に春が來かゝると、われ〳〵の見物はだん〳〵減り出し、英吉利の子供等は私や犬や猿に最後の握手をしてはこゝを立つて行つた。もう商賣にはならなくなつたから私共もこゝを立つて、またそこゝと漂浪ひ始めた。

# 主人と別離

可なりの長旅の末に或夕暮川に沿うた大きな都會へ來た。赤煉瓦の古い家ばかり多いところで、道路も尖つた小石を敷きつめた旅行者泣かせの舊式の町である。主人は佛蘭西でも舊家や貴族などの多い鶴巣（Toulouse）の町で、こゝには可なり長く逗留して行くつもりだと語つた。

さて旅籠へついた翌日、こんな町へ來た時の常例通り、興行に適當の場所を見つけて置くため、私等は町の檢分に出かけた。すると適當な場所はいくらでもあつて、人寄のありさうな廣場や、散歩道が澤山ある中にも、植物園の近所に圓形の廣場があつたが、芝は蒼靑に生え、プラターヌやマロニエーの立木は見事な影を作つて居り、そこからは幾つもの廣い通りが車の矢のやうに出て居るところなので、これ屈竟と擇んで來た。

さて翌日からこゝで興行を始めると、果して大入大繁昌なので幸先よしと喜んだに引きかへ、困つた事にはこゝに出張つて居る巡査が、犬が嫌ひなのか、人寄の世話をやくのが煩さいのか、私等に無法の干渉を仕始めて、こゝを立退けと云ひ出した。

多分私等のやうな身分柄のものは巡査のいふ事を御無理御尤もと聞いて、外の場所へ立退いた方が賢い仕方なのだらうが、私の主人はさう考へなかつた。

主人はたか〳〵憐れな、年寄の犬使に過ぎぬけれども、藝人風情には似合ぬ自尊心を持つて居た。



のみならず權利の觀念が甚だ強く老人の頭に働いて居た——と自分から私に說明して聞かしたのだが——そして自分の大道興行は鑑札も持つて居るし、どんな規則にも違反して居らぬといふ事を信じてるので、巡査の云ふ事を、ハイ〳〵とは聞いて居なかつたのだ。

私の主人は腹を立てるのもあまり見識がないと思ふ時、または人を愚弄してかゝる時、きまりで向うがよつぽどえらい人でもあるかのやうに、殊更馬鹿丁寧な物の云振をする癖がある。

今も巡査に立退きを命ぜられると、帽子を取つて小腰をかゞめながら、見物に聞えよがし、

「警察權を代表せらるゝ名譽の高官閣下、こゝを立退きまする前にちと御質問の儀がございます。賢明なる閣下には如何なる御規則によつて、この賤しい大道藝人が公衆に開放せられましたる公の場所で、糊口の料に致します興行を、お差止めに相成るのでございませうか。後學のため、何卒その規則のお示しを願ひたうございます。」

巡査は癪に觸つたといふ風で、何も議論をする必要はない、命令に服從すればよいのだと云つた。

「いや決して名譽ある高官閣下の御命令に服從せぬとは申しませぬ。この下人奴は御規則さへお示し下されば、何時でも立退きまするとは、斯樣に申し上げて居るのでございます。」

巡査は口の中で何かぶつ〳〵と云つたが、それでも此日は默つて立去つて了つた。私の主人は帽子を手に、腕を曲げ、身體を屈めたまゝ、その後を見送つて、暫らくはこの侮辱的態度をつゞけた。多分主人の今日の仕打は、巡査を愚弄して自から快とするといふよりは、見物の人氣を買ふために、巡

査を利用したのだらう。

その翌日巡査はもう來ないのだらうと、また昨日のところで興行を始めて居ると、興行半に昨日の巡査がまた四方に張渡した綱を越えてつか〳〵とやつて來た。そして何を云ふかと思ふと、今度は立退の事は曖にも出さず、

「こら〳〵、貴樣の犬にはなぜ口網を嵌めて居らんか。」

「これは異な事を！」と主人は例の調子で「この犬共に口網を嵌めろと仰せられますので？」

「さうぢや。市街取締規則にちやんとある。貴樣、それを知らんか。」

私等は今「瀉下劑」を演じ始めたところで鶴巣では今日初めての興行とて、繩張の外は見物が犇と詰めかけて居る大景氣、その中途に邪魔が入つたのだから、見物の方がざわつき出した。

「邪魔をするな。」と叫ぶものがある。

「濟んでからにしたらどうだい。」と怒鳴るものがある。

同情は少しも巡査の方に無い。美登里老人は手を振つて見物を制し、さて帽子を脱取ると、その腕を開いて小腰をかゞめ、帽子の飾りの羽が地を摺るほど、三度馬鹿丁寧な芝居がかりのお辭儀をして、

「警察權を代表せらるゝ名譽の高官閣下、賢明なる閣下は、確とこの美登里團一座の喜劇俳優に口網を嵌めろと仰せになりましたのでござりますか。」

「如何にも左樣！　一刻も早く口網を嵌めろ！」



權柄づくに命令されると、主人は巡査に答へると云ふよりは、見物人に聞かせる考へらしく、芝居がゝりの調子で、

「何と仰せになりまする。これなるカピ、ゼルビノ、またはドルスに口網を嵌めよとは、そりや御無體と申すもの、御覽じませ。カピは世界に隱れもなき名醫とあつて、不幸なるジョリカール將軍の、病氣診察のためまゐりしもの、若し先生のお鼻の先に口網をかけられましたら、何として效驗顯著なる下劑の調合をお命じになれませうや。せめて聽診器でも耳にかけよとの御命令なら、まだしも聞えて居りますが、口網をカピ先生如き名醫の鼻の先にかけよとは、憚りながら前代未聞の御命令――。」

見物はどつと笑ひ出した。親のだみ聲に子供の透通つた笑ひ聲がまじつて聞えた。主人は一段と調子づいて、

「またこれなる可憐な看護婦ドルス孃とても、あの可愛いお獅子ッ鼻の端へ口網を嵌められましたなら持前の愛嬌たつぷり、是非このお藥お用ゐあれと、頑固ものの病人を納得さするといふ、大事の役目が如何いたして相勤まりませうや。こりや賢明なる高官閣下の御一考を煩はしますよりも、手短に御見物御歴々の方々の御意見を伺ひたいものでござります。」

見物の御歴々は直接に意見は云はぬが、いづれも拍手をして笑つた。殊に例の惡戯者のジョリカールが「警察權を代表する高官閣下」の後に立つて、顰ッ面の眞似をしながら兩腕を組合せたり、握拳を尻に當てたり、後へぐッと反身になつたり、一擧一動その通りを眞似て居るので、見物はきやつき

やつといふ大喜び。

主人の愚弄にたまり兼ね、見物の此嘲笑に激せられた巡査は、くわつとなつて踵を返した。すると忽ち、小猿が自分の眞似をしながら、闘牛者が牛と睨めつくらをしてる時のやうな恰好をして、後に引いた拳を尻に當て鹿爪らしく立つてるのを見ると、またぐつと「高官閣下」の癪に觸つた。どちらが先に頭を下るかと云ふ風で、人と獸とこゝ暫らくは睨み合ひをして突立つて居た。

また新たな笑聲がどつと起る。併しそれが最後の打止であつた。巡査は威嚇的に拳を私等の方に振つて、

「貴様にちやんと云渡して置く。明日もし口網を嵌めて居らんと、告發するからさう思へ。」

「ではまた明日お目にかゝりませう。」と主人は洗着拂つて云つた。

巡査が大股で立去つて行く後から、主人は例の腰を二つに折り、貴顯でも送り出したやうな恰好をして、巡査の後姿を見送つた。そしてその日は無事に興行を續けた。

私は多分主人が興行を終つてから、犬の口網を買ひに行くのだらうと思つた。けれども宿へ歸つてもちつともそんな容子が見えない。また巡査と喧嘩した話も云出さないで居るので、私の方が心配になり出し、主人に向つて、

「お師匠さん、今日の中に口網を買つてカビを馴らして置く方がよかないの？　狂言の最中に食破つたり何かすると大變だから……。」



「民、お前は乃公が正直に口網を嵌めるものと思つてるかの？」

「だつて……巡査があんなに怒つてるから……。」

「お前は百姓の子ぢやから巡査を怖がるが、何の、心配するがものはない。乃公は明日巡査に告發の出來ぬやうな巧い工夫をして見せる。そして犬共もあまり窮屈がらずに濟むといふ工夫をな。それを種にまた見物の衆のお慰みにもしようといふんで、つまり乃公が仕組まうといふ狂言の中に、あの巡査の役割をちやんと配てある譯ぢや。いつも同じ乃公等の出しものに、新奇な外題が加はらうといふもので、巡査に一稼して貰ふのぢやから、見物の衆にも乃公等にも飛んだお慰みぢや。それにはお前に、明日ジョリカール丈を連れて乃公より先に例の廣場へ行つて貰はにやアならん。綱を張渡して、ひとりで立琴でも彈いて見物を寄せて居つて呉れれば善い。其中に巡査がやつて來るぢやらうから、そこを見濟し、乃公が犬を引連れて乘込まうといふ寸法ぢや。狂言はそれから始まるのぢや。善いかの。」

かういふ危なつかしい狂言の準備をするため、たつた一人で出かけるのは、私に取つてちつとも面白くない事だ。けれども私は主人の性質をよく知つて居る。主人の命令に反く事の出來ぬ事も知つて居れば、一度云ひ出した日論見を止めさせる事の出來ぬ事もちやんと知つて居る。この場合私はたゞ服從するより外になかつた。

翌日私は唯一人ジョリカールを連れて、例の場所へ出かけ、綱を張渡して立琴を彈始めた。すると すぐそちからもこちからも見物が詰めかけて、繩張の外は瞬く間に賑はひ始めた。

私が比禮寧地方に一冬を過ごす間に、主人は私に立琴を彈く事を敎へてくれた。歌はもう可なり歌へるやうになつて居るから、立琴が彈けると、もう一人前の樂手になれた譯だ。數々仕上げた歌の中に、伊太利のナポリ節が私の十八番で、立琴に合はしてそれを歌ふと、いつもやんやと云はれて居た。實際のところ私の立琴は、美登里團一座の呼びものの一つであつたのだ。

けれども私は、今私の周圍にわれ一と爭つて來た人達は、決して私の歌を聞かうとして來たのでないことを知つて居る。昨日見物に來て居た人達が大抵來て居るので、それもみな連を誘ひ合はして來たらしい。この鶴巢では、いや外でも大概さうだが、誰もあまり巡査を好かない。そこで皆が云ひ合はしたやうに、昨日の伊太利人がどうして巡査の難題を切拔けるか、どう巡査を馬鹿にするか、それを見物しようとやつて來たのである。私の主人は「明日またお目にかゝりませう」とほか云はなかつたけれども、主人の容子とこの詞で以て、見物は巡査より一日上手な主人が、きつと巡査を種に一狂言仕組むに違ひないと、かう悟つて來たのであつた。

私が一人でジョリカールを連れて來て居るのを見ると、見物はもう氣を揉出し、中には伊太利人はなぜ來ないのかと尋ねるものも二三人あつた。私は主人はすぐに後から來る筈だからと云つて、例のナポリ節を歌つて居た。

物の五分ともたゝぬ中、果して例の巡査がやつて來た。ジョリカール眞先にそれを見つけると、片腕を折曲げ、握拳を拵へて尻に當てがひ、ぐつと反身の、威儀を繕つて、繩張の中を大氣取に歩き始



めた。

見物はどつと笑ひ出す。猿はます〳〵得意の態度を續ける。何度でも拍手の音が起る、私は見物がもつと笑はずに居てくれゝばいゝがとひや〳〵した。巡査はもう腹が立つて堪らぬらしく、恐い眼をして私とジョリカールを睨めつける。見物はまたそれをいゝ慰みものにして指さし合つて居る。私も見て居て吹出したくなるのを、いや笑ひどころではないと堪へた。若し主人の來ぬ中巡査に怒り出されたら一大事である。私には何と挨拶していゝか分らぬのだから、實際今に何ぞ云はれはせぬかと、びく〳〵ものである。ところが巡査の容子といふものが、もう何か云ひ出しさうで、今癇癪玉が破裂するといふ瀬戸際に差迫つたらしく見える。綱の前を闊さして、そこを往つたり來たり、大股に歩いて居るのだが、私の前を通る度毎、肩越に私を睨む眼附が、今に見ろといふ風に見えて、私にはどうも無事な結末がつきさうに思はれなかつた。

かゝる重大の場に差迫つたとも悟り得ぬ動物の悲しさ、ジョリカールは相變らず巡査の眞似をつゞけて喜んで居る。巡査が繩張りの外を往つたり來たりしてると、猿もその通り巡査について繩張りの内を往つたり來たりして居る。そして私の前に來かゝると、巡査のする通り、肩越に私を睨めて行く。その容子が如何にも滑稽なので、見物はその都度どつと笑ふ。

私は巡査が怒り出しはせぬかと、氣が氣でないので、ジョリカールを叱りつけ、さうさせまいとしたが、猿は大得意で居るから決して私のいふ事に從はない。私が捕まへようとすると素捷こく逃げて

どうしても手に合はない。

すると私はどうしたといふのか知らぬが、多分むしやくしや腹に分別を忘れて、私が猿にけしかけてるものとでも穿違つたのであらう、巡査は眞赭になつていきなり繩張を飛越えた。と思ふともう、二足で私の傍に來て了ひ、ハッと私が飛退うとする間も與へず、平手でびしやりと私の横面をぶん擲つた。私はけし飛んでぐら〳〵と眩暈がし、そのまゝ倒れたかと思つた時、誰か駈つける人があつて、その人の腕に抱止められた。

私は辛く立直つてその人を見ると、思ひがけない主人の美登里老人であつた。主人は私と巡査の中に入り、巡査の振上た拳を押へつけて居る。

「こんな子供を擲りつけるとは何事ぢや。貴君は卑怯千萬なことをなさる。巡査の職分柄にも不似合な。」

巡査は主人に制へつけられた手を振放さうと蹠く。主人は威丈高にぎゆつと握りつけて放さない。どうも此時の主人の風采といふものが如何にも堂々たるものであつた。雪を欺く髪を戴き、銀のやうな鬚を垂れた立派な首を、毅然と擡げたその形、怒と威厳とを示せる氣高いその表情、私は長く忘れる事も出來なかつた。

私は老人の氣位に呑れて、巡査が地の下へでも滅入込んで了ふかと思ふと、一向そんな容子もなく、力一杯蹠いてその手を振放すと、いきなり主人の胸倉を取つて、やッとばかり懸命に押飛した。あは



や倒されようとするところを、どつこいと起直りながら、右の腕を擧て巡査の利腕をいやといふほど擲つた。主人は年寄ながら氣力もあるけれども、迚も筋骨逞しい若い巡査と格闘して勝さうな事はない。私は心配して見てると、主人は別にそれ以上に抵抗はない。詰るやうに巡査を見て、

「乃公のやうな老人に向つて何をなさるのぢや？」

「貴様こそ警官に暴力を加ふる不届者奴、即刻逮捕するから警察署へ來い。」

「この子供を擲つた貴君こそ不届至極ぢや。」

「理窟は云はんでもよい。默つて此方について來い！」

主人はこゝで爭ふも無益と見て取つて、巡査には答へず、私を呼んで、

「お前は犬や猿を連れて宿に歸つて、乃公の吉左右を待つて居るがよい。」

主人はこれより上をいふ暇もなく、亂暴な巡査に引立てられた。

主人が折角見物を喜ばさうとした目論見は、小猿の賢立てからがらりと外れて、この上もない悲劇に終つて了つた。何といふ情ない事であらう。

犬共は主人の後を追はうとしたが、私は私の傍に留まれと命じた。命令に服從する事に馴れた彼等は素直に私の傍へ引返して來た。その時に私は犬が口網を嵌てるのに氣がついた。けれどもそれは普通の鐵製の口網ではなく、綺麗な房附の絹紐で、鼻の先を括つたといふまでのものであつた。白毛のカピは赤の絹紐、黑毛のゼルビノは白、灰色のドルスは青で、色取にまで念入れたほんの芝居の口網であ

つた。主人はこの通りの裝束をさせて、まさしく巡査を玩弄にしてやらうといふ計畫であつたのだ。主人が曳て行かれると見物は見る間に散り始めた。中にはなほ止まつたまゝで議論してるものがある。

「實に無法な巡査だ。」

「なに老人も惡い。」

「巡査が子供を擲るといふ法はない。あの兒は何にもして居はしなかつたに。」

「巡査だから相手が惡い。何しろ老人は氣の毒なものだ。當分臭い飯を食はなければなるまい。」

私はもう心配しながら萎れ返つて宿に引上げた。

美登里老人を恐しい子買でもあるかのやうに思つたのは、ほんの當座で、日一日と私は老人に親しみ始め、今では私の心の底に主人に對する深い愛情が培はれて居る。私等二人はつひぞ一日でも離れて暮した事はなく、殊に宿を求め得ぬ夜半など辛く藁束でも見つけると、主人はきつと私にも分けてくれた。父と名のつく人でも主人が私にして呉れたほどに、生のわが兒に氣を注ける人は少からう。主人は私に讀む事、書く事、歌ふ事、みんな根よく敎へてくれた。たゞそれ許りではない、この長い旅生活の間に、見る物聞くもの何でも氣をつけて居て、私に敎へ聞かす材料にして呉れた。よし私は學校の生徒ほどいろ〳〵の、課目は習はずとも、活きた學問はたしかに遙か以上にして居る。雪の降る寒い日には、主人は自分の身につけるものを減して、私にかけてくれた。眞夏の旅には、私の荷を



減して、自分が背負つて呉れた。食卓では——いやそんな贅澤な事は滅多に出來なかつたから、大抵行當りバツタリ木蔭や草の上で食事を使ふ時、自分は惡い食片を取つて、い、ところはきつと私に呉れた。尤も時々私は耳を引張られたり、平手で打たれたりして、辛いと思ふ事も無いではなかつたが、それも私を懲すためと思へば主人に不足をいふところは少しも無かつた。私はどうしていつが世にも主人の私に對する細かい心附、優しい言葉、いろ〳〵して呉れた親切の數々を忘れる事が出來やう。あゝ主人は心から私を愛して呉れたのだ。私も心から主人を愛したのだ。

暫らくなりとも主人と離れて居なければならぬとは、何たる悲しい事であらう。

いつまた主人の顏を見られるだらう？

見物人はいづれ牢に入らねばなるまいと云つた。ほんとに牢に入れられるだらうか？　牢と云へばどんなに恐ろしいところだらう。いつになつたら牢から出されるだらう？

その間私はどうなるだらう？　どうして暮して行けるだらう？

私の主人はいつも財布は身につけて居るので、巡査に引立られて行く時、私にお金を渡して行く暇も無かつた。私はポケットの中に僅か許の小使錢を持つてるだけだ。それだけの小使錢で三匹の犬とジョリカール、それに自分の口を養つて行けるだらうか？

私は二日間を懸念と懊惱の中に過した。旅籠の裏庭から一歩も外に出ずに、猿や犬の面倒を見ながら暮したが、彼等としてもまた心配の容子で、ちつとも元氣がない。三日目に人が私の主人の手紙を

持つて來てくれた。この手紙には、自分は今警察留置所に拘留中であるが、土曜日には警察官吏に抵抗した罪と、同じく暴行を加へた罪といふ事で輕罪裁判所に喚出される筈である。自分が一時の怒のため前後を忘れ、警官を毆打したのは一期の失策であつた。土曜日には裁判所へ來て傍聽するがよい。きつとお前の後學のためにもなるだらう。と記し、猶私の行爲についての訓誡などあつた末に、自分の代りにジョリカール、カピ、ドルス、ゼルビノを撫でてやつて呉れとあつた。僅かの暇にそこに書いたもののや、であつたが、私がこの手紙を讀んでる間、カピは私の股の間へ入り込んで、頻りに手紙の匂を嗅いで居たが、やがて尾を振り出したのを見ると、確かに主人の匂を嗅分けたのだらう。主人が拘留されて以來、カピの顏に元氣が出たのは此時が始めてだつた。

人に聞いて見たら輕罪裁判所は午前十時に開廷するといふので、土曜日には九時に裁判所に行き、門扉によりかゝつて門の開くを待つて居た。開門の時に入つたのは私が先登第一だつた。だん〳〵に傍聽席には人がつまつて來て、最後には一杯になつた。此間の見物人の顏も大分見かけた。

私が裁判所へ入つて見たのは始めてで、法廷などの模樣は素より知るべき筈もなかつたが、唯天性で一種の恐怖を感ぜずには居られなかつた。私は今日の裁判は私の主人に關した事で、私には何の關係もないのだと思つては居ながら、何だか私も危險のやうな氣がしてならぬ。そこで私は大きな煖爐の後の方に、壁によりかゝつて、なるたけ人に見えぬやう小さく縮まつて居た。

最初に喚出されたのは私の主人では無かつた。竊盜をしたもの、喧嘩をしたものなどであつたが、



めい〳〵が無罪を主張したに拘はらず、皆有罪になつた。私は主人もその通りになるのではないかと案じた。

その中に主人は引出されて二人の憲兵の眞中に腰をかけさせられた。初めに何か訊問のあつた事、主人の答へた事などは、よく私の耳に入らなかつた。私は只一生懸命に眼ばかり丸くして居た。

私の主人は立上つて居たが、眞白な澤山の髪を肩から後へ垂れて、自から恥づるやうに俯むいて居た。そして裁判長は訊問を續けて居た。

「それでは其方は職務を執行しようとした警察官吏に對し、數回の毆打を加へたのぢやな。」

「いや、裁判長閣下、なか〳〵持ちまして、唯一回でござります。手前が興行の場所にまゐつて見ますと、あれなる巡査が手前の連れて居ります子供を毆打して居りまする故つひ前後を忘れ……。」

「併し其方の實子ではあるまいが？」

「ハイ、裁判長閣下、併し手前はわが子も同樣に愛して居ります。その子供はまことに性質の柔順な優しい心掛のものでありまするのに、警官が無法にも毆打を加へて居りますので、それを差止めようため、手前は中に飛込みまして、子供の爲め、正當防衛の手段に出でましたに相違ござりませぬ。」

「併しその方は警官を打つたに相違あるまい。」

「ハイ、つまり子供を保護するため……餘りの無法と手前もちと激しましたので、聊か前後を忘れましたやうな次第で。」

「ぢやが其方前後を忘れるといふ年でもあるまいが。」
「裁判長閣下、兎角人間と申すものは、思ふ通りに行ひ得るものではございませぬ。手前は悔悟いたして居ります。」
私は主人の云開き振は如何にも立派なものであると思つた。
裁判長は今度は巡査の方の訊問を始めた。
巡査は主人の毆打罪を語るよりは、もつと力を入れて主人が動物を使嗾し、一々自分の素振を量似させ、公衆の前であらん限りの侮辱を加へた事を辯じ立てた。
巡査の辯明の間、主人はそれを聞くといふよりは、頻りに傍聽席を見廻して居るので、私は主人が私を求めて居るのだと悟り、隱れ場所を立退き、好奇心で來て居る見物を押分けて前列に出た。
私を見つけると主人の憂愁に沈んで居た顏が見る〳〵開いた。私は主人が私を見つけて、かうも喜んで呉れるかと思ふと、覺えず識らず、私の眼は涙で一杯になつて了つた。
裁判長は主人に向ひ、
「最早其方の申立る事はないか。」
「ハイ、手前自身には何も申立る事はございません。唯裁判長閣下の御同情を乞ひまするは、かの子供の身の上でございます。手前に離れましては身過をいたす道もございません。何卒かのもののため寛大の御處分願はしう存じます。」



私は裁判長の容子で、主人は無罪放免の云渡しを受けるだらうかと思つた。けれども一人の嚴めしい役人と裁判長の間に何か四五分の話があつた末、裁判長は嚴肅な調子で、警察官吏を侮辱し且暴行を加へた罪によつて、伊太利人美登里を、輕禁錮二ヶ月罰金四十圓に處すると云渡した。
二ヶ月間の入牢！
私は涙の間から、主人が引出されて來た以前の入口の戸が開くのを見た。主人が憲兵の後についてその入口を入ると、戸はひとりでぴたりと閉つて了つた。
あゝ二ヶ月間の別離！　私はその間にどうなるだらう。どこへ行けばよいのだらう。

## 宿より追はれて

私は胸は悲しさで一杯になり、眼は泣腫したまゝ、とぼ〳〵宿屋に歸つて來ると、裏庭の出口の戸の處で宿の主人に出遭つた。私がそこを抜けて犬を繋いである厩へ行かうとすると、主人は私を呼止めて、
「おい、小僧や、お前の師匠はどうなつた？」
「牢に入れられちやつた。」
「何ケ月間？」
「二月。」

「罰金は？」
「四十圓。」
「ウム、二ケ月の禁錮に罰金四十圓か。」と主人は三度繰返して呟やいた。
私はそのまゝ裏庭へ出ようとすると、主人はまた呼止めて、
「これ小僧、その間、お前どうして食つて行かうといふんだ。」
「己等知らない。」と私は悲しさうに答へた。
「なに、知らない？　ぢや、お前、自分と犬や猿を養つて行く貯蓄は無いのか？」
「あゝ。」
「それぢやア、お前何か、その間己がお前等を食はしてやるものとあてにして居るのか。」
「いゝえ、己等、誰もあてになんかして居ない。」
私は實際人をあてにしようなどといふ考へは少しも起さなかつた。主人は私の樣子をぢつと見ながら、
「ウム、それはいゝ料簡だ。お前の師匠には貸越になつて居る。その上お前を二ケ月も只喰はしてどうなるものか。お前には即刻此家を立つて貰はう。」
私が人をあてにしなかつたのも實際だが、併し今すぐ宿屋から追出されるものとも思つて居なかつた。私は驚いて、



「己等すぐこゝを立たなけりやアならないの？　だつて己等どこへ行けばいゝの？」
「そんな事は己の知つた事ぢやア無いや。己は何もお前の親爺を知つてる譯でもなければ、お前の師匠と懇意な譯でもない。お前を世話する義理なんかちつとも無いんだ。」
私は茫然途方にくれて突立つた。何と云つたものだらう？　併しこの男の云ふことは尤もに違ひない。縁も由縁も無い私を只世話する道理はない譯だ。けれども只食はして貰ふのでなかつたら……
私が默つて考へてると、
「さア小僧、一刻も早くこゝを立つた。えい、おい、ぐづ〳〵せずと犬と猿を連れて行け。併しお前の師匠の背嚢は己がちやんと預つて置くぞ。牢から出て來た時、何は置いてもそれを受取りにこゝへ來るだらうから、その時に勘定を拂はせる事にするんだ。」
この詞に私に或考へを吹込んだ。私はこの宿に止まつて師匠を待得る手段を發見したと考へた。
「それぢやその時まで己等をこゝに置いて下さい。お師匠さんが一緒に勘定をするから……。」
「何だつて？　蟲のいゝ事を云つてやがらア、そりやアお前の師匠は、今迄の勘定殘りとお前の今日迄の宿賃位は拂へるだらう。併し四十圓の罰金も拂つた上、お前等の二ケ月の食扶持をどうして拂へる？」
「己等、食るものなんか何でもいゝから……。」
「お前はそれでいゝにしても犬や猿を乾干にする譯にやア行くまい。いや己は一刻もお前の世話なん

か出來ない。」
「だつて――。」と私は唯途方に暮れた。
「お前一人でも結構稼ぎが出來るぢやアないか。村から村と犬を連れて渡り歩けばいゝんだ。」
「だつてさうしたらお師匠さんが牢から出た時、己等を見つける事が出來なくなるだらう。さうなつたら大變だから……。」
私は二三日の中に師匠がきつと傳手を求めて私に手紙を呉れるだらう、その手紙には私の身の處分が、きつと書いてあるに相違あるまいと考へた。どんな事をしても師匠の消息を待つ間、三四日はこゝに居たい。
「なんだと？　師匠に繞り合へないと大變だ。そんな心配いらないぢやア無いか。二ケ月お前がその邊を打つて廻つて、師匠が牢から出る頃にまた歸つて來ればいゝやな。」
「それでもお師匠さんから手紙が來るかも知れないから……。」
「手紙なら己がちやんと預つといてやる。」
「だつて己等すぐその手紙を見たいんだから……。」
「えい、煩さい野郎だな。己はもう我慢が出來なくなつた。もうお前にかゝり合つてる暇は無いんだ。早くこゝを立つて行かないと叩き出すぞ。五分間の猶豫をやるから、その中にさつさと支度して立つちまへ。」



私はすぐにこゝを立去るより外に術の無い事を悟つた。
私は厩の中に入り、そこに繋いであつた三匹の犬とジョリカールの繩を解き、私の背嚢に背負ひ、大きな立琴の紐を肩に通して、小猿はいつも主人がする通り背嚢の上に乗せ、三四の犬を從へて宿屋の庭を出た。入口に私の容子を見て居た主人は聲をかけて、
「手紙が來たら己がちやんと預つて置いてやる。」
私は町を出るために大急ぎに急いだ。それは犬に口網を、嵌めてないからで、もし巡査に咎められたら何と答へようと氣が氣で無かつた。それも口網を買ふ錢でも持つて居ればだが、私のポケットには、數へて見ると、銅貨が僅か二十二錢より外無い。若し口網の無いため巡査に捕まへられたら私等一座はどうなるだらう。そしてひよつと私も主人同樣牢の中に入れられたら犬や猿は誰も養育者がなくなつて、散々ばらゝゝになるだらう。家もなく親もない私は、今こそ一座の團長で、一家族の主人なのだ。私は深く自己の重い責任を感じた。
途を急ぐ途中犬共は屢々顔を擧げて愬ふる如く私を見上げるのだ。彼等の心を悟るには言葉も何も入らなかつた。彼等は餓じいのであつた。
私の背嚢の上に棲つて居るジョリカールはジョリカールで、時々私の耳を引張つて、餘儀なく私を後に振向せる。すると彼は手眞似で腹をさすつて、この通り餓じいと、容子をして見せる。私とても餓じい事は敢て彼等に讓らぬ。なぜなら私共は一樣にまだ朝飯も食べないからである。

けれどもたつた二十二錢の懐中でどうして三度の食事を取るといふやうな贅澤が出來よう。今日は取敢ず一食だけで濟ます工夫をしなければならぬ。

私は例の巡査に咎められるのが恐ろしさに、何でもいゝから早く鶴巣の町を出て了はなければならんと、ひた急ぎに急いだので、方角などは一切夢中だつた。それもどこに行くといふあてがあるではなし、どこへ行つても食へたり泊つたりするに金の入らぬところがない限り、西に向くも東に向くも私に取つては同じ事だつた。それでも幸ひに時候が夏に向いてるから、寢床の心配は無くても濟む。星の下や、大木の蔭、または他家の軒下に寢ても凌ぎはつく道理、唯困るのは食つて行くといふ事！

私等はほんとにどうして口を糊して行けるだらう？

二時間許りといふものちつとも休まずひた急ぎに歩いた。犬はます〳〵可哀さうな眼をして私に愬へる。猿は煩さいほど私の耳を引張つては腹を撫つて見せる。

もう鶴巣の町を出外れて、大丈夫と思ふころ、一軒の麵麭屋を見つけたので、私はその中へ飛込んだ。そして一斤半の麵麭を求めた。

麵麭屋の主婦は私等のひもじさうな容子を一目に見て、

「二斤買つてお行きな。それでなきやア足りないやね。」

二斤でもどうして足りさうな事はないけれども、私の財布でどうして二斤の麵麭が買へよう。一斤の値段は十錢だから二斤買へば財布の底には二錢ほか殘らぬ勘定だ。明日の事が分りもせぬのに今日



二十錢も使つて了ふといふやうな冒險は出來ぬ。一斤半なら十五錢で濟んで七錢の殘りがある。七錢でもありさへすれば、明日だけこれで餓死なずに濟んで、五錢なり十錢なり稼ぎ出す機會を待つ事が出來る。私は急いでかういふ胸算をしながら、一斤半でいゝから餘計に切らないでくれと頼んだ。主婦は六斤の長麵麭を目分量で切つて衡にかけた。あゝ今の腹加減ではその六斤の麵麭も私等一遍に平らげて了ふだらう。

ところが主婦は一錢だけ目方が多いから、十六錢だと云つた。仕方がないから私は默つて十六錢拂つて、麵麭を小脇に確と抱へてそこを出た。

犬共は嬉しさうに私のぐるりを飛廻りながらついて來た。猿はきゝきと小さな叫び聲を出して、私の髪の毛を引張つた。

すぐに私等はトある道傍の木蔭へ辿りついた。

私は立琴を肩から卸して、木の幹に立掛け、自分は草の上に横になつた。犬はカピタ眞中にして私の前に並んで坐つた。猿はちつとも疲れて居ないから、私の側に突立ちながら、私が麵麭を切つたら、手早くそれを偷まうと用意して居る。

麵麭を切る事も決しておろそかには出來なかつた。私は出來るだけ公平に五つに切つた。その上にまた無駄が出ぬようにと、五つに切つたものを、また薄く切つて廻り番に彼等に與へた。ジョリカールはそんなに食べないから、私等がまだ腹惡へも出來ぬ中に、もう滿足して居た。そこでジョリカー

ルの殘りの分から三つの薄い片を、後刻犬にやるため、背嚢の中に藏つた。それでもまだ四片餘りが出たので、私等はそれを食後の菓子とも見立てゝめい〳〵で食べた。

この御馳走は決して食後演說などの出さうな大したものでなかつた事は皆樣御承知の通りである。けれども私は自分の仲間に一通り云ひ聞かして置く機會は今だと思つた。そこで、私は居住居を直して彼等に向ひ、

「おいカピ、ドルス、ゼルビノ、ジョリカール、お前等は何は置いても己等の賴にする友達なんだ。ところで己等は今お前等に悲しい便を云聞かさなけりやアならない。お師匠さんは牢に入れられて了つたんだから、今日から二月といふ長い間、もう顏を見る事も出來ないんだ。」

「ウオー！」とカピは呻いた。

「それはお師匠さんに取つても悲しい。己等達に取つてはなほ悲しい。お師匠さんのお蔭で、みんな今迄活きて來たんだ。お師匠さんが居ないのに、この先どうしてみんなで食つていけるか。もうあてが無くなつちやつた。第一己等錢がないんだ。」

錢が無いといふ詞が明かに解つたのだらう。カピはすぐに後脚で立上り、丸く廻つて「御見物お歷歷」の前で金を集めて廻る仕方をして見せた。

「よし、カピ。お前は興行をすればよいといふのだな。それはよい考へだ。けれども巧く行かなかつた時にはどうする？　己等の懷にはたつた六錢の錢ほか無いんだぜ。だからお前等はこゝが大事の



瀨戸際だと思つて、一生懸命巧くやつてくれなけりやア困る。己等は今お前等の親方なんだから、己等の云ふ事は何でも聞いて貰はなけりやアならない。食物も少しッきりで我慢してその上に元氣を出して貰ふんだ。いゝか。己等がお前等を賴にするやうに、お前等も己等を賴りにしてな、どこまででも己等の云ふ事を聞かなけりやアいけないんだぜ。よしか、分つたか。」

私が力を入れて一生懸命にやつたこの演說を、私の仲間等がよく了解したらうとは私は云はぬ。けれども日頃師匠が友達同樣にして、何かにつけ言葉をかける習慣をつけて居たから、大抵の事は分るやうに訓練されて居た。だから私の演說も大づかみの意味は分つたに相違ない。彼等は第一主人が巡査に曳て行かれた儘歸つて來ないので、何か重大の事が起つたに相違ないとは悟つて居る、私の演說はその重大な事件の說明であるとも悟つたに違ひない。彼等が默つて私の演說を聽いて居たのでも知れる。

こゝで私が彼等と云つた中にはジョリカールは入つて居ない。なぜなら同じ題目に長く彼の注意を向けて置くといふ事は迚も出來ぬ事柄であるからである。今日も始めの中こそ一番熱心らしく聞いて居たが、十言か二十言云ふ中にもうぢつとして居られず、木の上に飛上つて、どこを風が吹くかといふ風に枝を動かして遊び始めた。若しカピでも私の演說中に脫出してそこらを跳廻つたら、私は我慢が仕切れなくなるだらうが、猿はそれが性質なのだと思ふし、また少しは遊びたくもなる譯だと思ふので腹も立てなかつた。

暫らく休憩した後私等は出立した。一時間ばかり歩いた末、漸く向うの方に村を見つけ出した。どうも貧乏村らしい容子に見えるが、さりとて擇好みの出來る場合でもない。小さな村だと儲も少ないがその代り巡査に八釜しく云はれる心配もあるまいと聊か勇氣をつけて、私は早速俳優等の身支度に取かゝつた。そしてちやんと行列を作つて村に乘込んだ。不幸と師匠の横笛の音も無ければ、妙に人を惹きつける師匠の立派な風采も骨柄もないのだ。小さな子供が心配さうな顏をして進んで行くのでは一向人の好奇心を惹かないらしい。大將のない兵隊が外を通るやうなもので、往來の人は一寸私等の方を見るけれども、すぐ知らない振をして行過ぎて了ふ。私等の後からついて來るものは只の一人も無かつた。あゝこれで興行が巧く出來るだらうか。

## 落魄

佛蘭西ではどんな小さな村でも、周圍に木を植ゑた、小公園代用の廣場があるが、私等もこの村の小さな廣場に辿りついて、プラターヌの樹蔭の噴水の傍に陣取り、まづ立琴を肩から卸して、舞踏を彈始めた。曲は陽氣で私の指は輕く絃の上を走つたが、私の心は沈んで、肩には重荷を背負つたやうな心地であつた。

私はゼルビノとドルスに舞踏を命ずると、彼等はすぐに音樂に合して踊り始めた。けれども誰も私等の傍にやつて來ない。そこらを見廻すと、四角なこの小さな廣場の中は全く見捨られたやうに人影



もない。けれども廣場の一方の人家の軒下には、女等が往來に出した椅子に腰かけて、編みものをしたり、また話を仕たりしてるのが見える。

私は立琴を彈續け、ドルスとゼルビノは踊りつゞけて居た。今に誰か出て來るだらう。一人來さへすれば二三人十人とだん〳〵に寄つて來るだらう。けれども私は無駄に彈きつゞけ、ドルスとゼルビノは無駄に踊りつゞけた。一人も私等の方に注意を向けるものは無かつた。

全く望は無ささうに見える、けれども私は氣を取直して、一層指に力を入れ、八釜しく琴を搔鳴し始めた。すると今漸く歩き出した許りと見える幼兒がトボ〳〵と或家の閾を越えて、往來を横ぎり、私等の方にやつて來た。それを見ると、これはうまい、きつと母親が後からついて來るだらう、母親が來れば、近所隣の女も出て來ていくらかの錢にはなるだらうと、かう胸算をした。

幼兒を驚ろかしてはいけないと思ふので私は琴を輕く鳴らし始めた。

子供はよち〳〵とやつて來た。もうすぐに私等の傍に來る許りとなつた。此時閾の處に腰かけて裁縫をして居た母親は、始めて我兒の居らぬに心づいたらしく、そこら中を見廻したが、幼兒が私等の方へやつて來るのを見ると、後からついて來る代りに、その兒を呼返さうとした。二三度その兒の名を呼んだ。すると柔順にその兒は私等の方に向けた足を母親の方に向け直して引返して行つて了つた。

多分この村の人達は舞踏なんか好かないんだらう。そこでドルスとゼルビノには舞踏を止めさせ、私は一人で一生懸命、取つて置きの聲を出して、例の十八番のナポリ節を歌ひ始めた。今度は誰か聞

きに來さうなものだ。
一節歌つて二節目に移らうとすると、短い上衣を着て絨毛の帽を被つた男が大股に私の方へやつて來た。そら來たといふので、私は一層聲を張上て歌ひ出した。
「こら、貴樣、そこに何してるッ？　惡童奴。」
私はびつくりして歌を止め、その男を見上げた。
「こら、返事をせんかい。」
「伯父さん、己等この通り歌つてるんだよ。」
「貴樣、この村へ來て歌ふ許可狀を得て來たかッ？」
「いゝえ、伯父さん。」
「許可狀を持つて居らん？　それならさッさとこの村を立退け。さもなければ告發するぞ、惡童奴。」
「だつて伯父さん、己等は何も……。」
「伯父さんとは何だッ。村方監守人殿と云へ、此村では一切乞食の遊藝人は立入らさんのだッ。」
村方監守人といふのは村つきの巡査と云つたやうなものである。私はこの男が村の監守人であらうとは知らなかつた。かういふものに楯つくと憂目を見る例は主人がちやんと示してくれたから、私は一言もなく恐れ入つて、立琴を肩に引つかけるなり、無言のまゝ犬を從へ、小さくなつてそこを立去つた。



乞食の遊藝人と云はれたのが悔しい。私は乞食ではない。大道で藝をするのが私の稼業なんだ。舞臺の上で藝をする藝術家とちつとも異つた事はない筈なのだ。
五分たつと私はもうこの外來客に不愛相な、けれども監守のよく行屆いた村を、急ぎに急いで出拔けて了つた。
犬共は惡い運にまはり合せた事をちやんと會得したのだらう。首を俛れ、悲しさうな容子をして私について來た。
もうずつと村外れへ出て、こゝなら件の村方監守人殿もよう追ひかけては來まいといふところで、私は犬共に說明を與へるため手で合圖をすると、三匹の犬は私を取卷いて聞くなつた。
「許可狀を持つて居なかつたので、己等達はあの村から追出されて了つた。そこで今夜は麵麭を買ふ錢がないから、夕飯を食はずに、野宿をしなけりやならないんだ。」
夕飯を食はずにといふ私の言葉に、犬共は不平の呻を發した。そこで私はポケットから六錢の銅貨を出して見せ、
「己等達はこれだけの錢ほか無いんだ。これを今夜使つちまへば、明日食るあてがなくなつちまふ。お前等も少し明日の事を考へて見るがいゝ。」
かう說き聞かしながら、私は銅貨をポケットの中に收つた。
カピとドルスは得心をしたらしく萎れて首を俛れて了つたけれども、我儘もので、食意地の强いぜ

ルビノはまだ唸り續けて居る。私が叱りつけても一向止めぬので、カピに向ひ、

「おい、カピ、お前よくゼルビノを得心させてくれ。」

するとすぐにカピは前脚でゼルビノを打つたが、二匹の犬は何か議論を始め出した樣子だ。雙方才を剝いていがみ合つて居る。けれどもゼルビノは少しも反抗の態度を改めない、六錢を今夜つかつて了へと我を張つてゐらしい。併しカピの方が強くて勇氣がある。カピがほんとに怒り出すと、ゼルビノは漸く默つて小さくなつた。

さて此上は只塒を求めるだけの一段となつた。無論今夜は星の下で寢なければならぬが、暖い時節柄、それは格別重大な問題でないとしても、特別に注意をしてかゝらなければならぬのは狼群の襲來である。此地方に狼が居るか居らぬか知らぬが、若し居るとすれば、それこそ巡査や村方監守人などより私等にはどれほど危險かも知れぬ。どこか安全なよい隱家を見つけたいものと、そこら中に遠見を利せながら田舍道を進んだ。

けれどもいくら進んでも淋しい途で、牧場や野原が連なつて居る許り、その邊に番小屋でもと、見渡すけれども何もない。一しきり空を薔薇色にした夕やけも名殘なく消えて了つたが、まだ隱家が見つからない。此上はその邊に見ゆる灌木の林の間で寢る外はないと覺悟した。灌木の間々には大きな花崗岩がごろ〳〵として居た。如何にも物悲しい、人里離れた荒野の中であつたが、もうその外には適當な場所があらうと思はれぬ、大きな巖が屏風のやうに立つてるこそ幸ひ、その蔭を求めたなら、



夜風や冷氣を幾分なりと避ける事が出來やうと考へた。犬共は夜の寒氣にも平氣で堪へられるが、私とジョリカールは犬のやうに平氣な譯に行かぬ。殊に私は一座の團長といふ重い責任があるから、どんな事をしても病氣にならぬ工夫をせねばならぬ。またジョリカールを病氣にして、私が看護をする事になつても一大事である。

そこで私は屈竟な場所はないかと、巖と灌木とを分けて一生懸命探し廻ると、丁度大きな見上げるやうな花崗岩が伸かゝるやうに突立つて、その下が洞のやうになり、そこには一面に松の枯葉が風に吹つけられてたまつて居るところを見つけ出した。自然に敷床まで出來て居るとは難有い。慾には麵麭の無い事だけが不足だが、麵麭の事は考へずに寢る工夫をするより外に無い。諺に食べる兒は寢るとあるが食はずに寢る事は全く一大苦痛である。

さていよ〳〵洞の中で寢る段になり、私はカピに向ひ、狼に備へるため洞の外で番をするようにと命じた。カピには氣の毒ながらそれより外に方法が無かつた。カピは命に從つて番兵の役についた。この上は私は安心して寢られる譯である。

そこで私は枯松葉の上に横になり、ジョリカールを上衣の間に入れて寢た。ゼルビノとドルスは私の足の方に丸くなつた。けれども私は疲勞よりも一座の行末が案じられるので、容易に眠られない。私等の幸先は甚だ惡かつた。明日の運命は果してどうであらう。私は今強い飢餓と渴とを覺えて居る。ポケットに手をやつて何度も銅貨を數へて見るけれども、三枚の二錢銅貨は決して四枚に殖えて居な

い。一、二、三枚――それで行詰つて了ふ。

もし明日一錢も收入が無かつたら、明後日からは稼をする氣力もなくなり、舉句の果は野垂死をせねばなるまい。野倒死をせぬ迄も行先々どの村にもこの村にも村方監守人が居て私等を追拂ひ、どの町の巡査も犬に口綱を嵌めろと命ずるのではあるまいか。

寢られぬまゝに斜に空を隙して見ると、星は蒔いたやうに靜かな空に輝いて居た。風も死んで木の葉一つ戰がぬ。蟲や鳥の啼聲も絶え、遙かの田舍道に車の轢音さへ聞えぬ。何といふ寂寞であらう。全くこの世に賴るものなく只獨り取殘された心細さが、ひし〳〵と胸に食ひ入るのであつた。

私は涙で眼がすぐ濕んだことを覺えた。すると矢庭に堪らなくなつて、聲立てゝ泣出した。戀しい直！　懷かしいお師匠さん！

私は腹劃になり、兩手の間に顏を埋めて、止度もなく泣いて居た。すると忽ち暖かい呼吸が髮にかかると覺えたので、顏を擧ると、大きな長い溫かな舌が、ペロリと私の顏を嘗めた。それはカピであつた。丁度私の最初の旅立の日に、百姓家の納屋で、私を勵ましに來てくれたと同じに、今夜も私の泣聲を聞きつけて慰めに來たのであつた。

私は兩腕でカピの頸を抱占めてその顏に接吻した。カピは息が詰つて二三度咽るやうに聲を立てたが、それが私には私の爲に一緒に泣いてくれるやうに聞えた。

翌朝眼を覺して見ると、大分寢過ごして、日はもう高く登り、暖かい、氣持のよい光線が私等の上へ



に射込んで居た。昨夜の悲しい心持もこの華やかな日の光に蘇生つたほどに覺えた。そちこちの小枝には禽が囀り、遠方の御堂からは朝の勤めの鐘が幽かに聞えて居た。

私等はそこ〳〵に身仕舞を取直して、こゝを出立した。今し方勤めの鐘の聞えた方角を目指して行く中、すぐ村が現れ出した。まだ見えもせぬそこの取つきの麵麭屋の店が、歷々ともう眼に描かれて、出來立のほや〳〵の麵麭の匂さへするやうな氣がする、一日一食で寢た翌日の飢さは、まア何といふのだらう。

私は決心した、六錢を今朝奮發して了はう、後はどうかなるだらうと。

私等は私等の鼻のおかげで他愛もなく麵麭屋を見つけ出す事が出來た。併し六錢の麵麭では一斤と鼻糞ばかりだから小な一切づゝの分前に有りついた丈で、食かけたと思ふともう無くなつて了つた。

いよ〳〵稼の準備に取りかゝる時が來た。昨日のやうな失敗もあるから、それにはまづ村を廻つて見て、場所も見つけて置き、村の人達の風體も視察し、敵か味方か、よく見分けて置いてかゝらなければならぬ。今は朝の中だから、今始めたところで人寄もないに極つてる。何でも先に場所を見立てて置いて午後に始めるとしようと、こんな事を思案しながら、その方にばかり氣を取られて歩いてると、突然後の方で消魂しい叫び聲が聞えた。何事かと振返つて見ると、ゼルビノが年を取つた太つた婆さんに追かけられて、私の方へ逃げて來るところだ。私はゼルビノが逃げて來る譯と婆さんが叫ぶ譯を悟るに手間暇は入らなかつた。私が氣を取られて歩いてる間に、ゼルビノは私等の列を離れ、

そつと人家に忍び入つて、一切の肉を偷み出したのだ。現にゼルビノの口には肉を咥へて居る。

婆さんは聲を限りに、

「盗賊！　肉盗賊！　其犬逃してはなんねえだ。仲間の奴みんな捕まへてくんろ。早く！　早く！」

最後の詞を聞くと、これは堪らんと、私は急に罪を感じて――少くも犬の罪に對する責任があると感じて、一生懸命逃出した。若し婆さんに肉の代を拂へと云はれたら一大事だ。拂へなかつたら牢に入れられるだらう。私が牢に入れられたら、一座は瓦解するより外無いのだから、三十六計の奥の手を出して、私は只一目散に逃げた。カピやドルスも、後れてよいものかと、私について走つて來る。ジョリカールはまた振落されては大變と一生懸命私の頸に嚙りついてるので、私のその苦しい事！

婆さんに後から追はれるだけなら、逃げのびるに手間は入らぬが、見ると婆さんの叫び聲に、バラバラと兩側から出て來た百姓達が四五人、私等の行手に塞がつた容子だ。最早絶對絶命どうしたものと思ふ時、忽ち細い横途を見つけ出したので一散にそこへ駈けこんだ。

私は生命の限り細道を走つたが、幸に追手のつゞく容子も見えない。その中に村を出切つた田圃路へ入つて了つた。それでも構はずひた走に走つたが、もう息がつゞかなくなつて立止つた。何でも二十町位は走つたらう。後を見返ると、もう村は遙か彼方に隔つて、人影も何も見えない。やれ〳〵これで助かつたと安心した。

カピとドルスはいつでも私の踵についてゐるが、ゼルビノは私等に近づかずに向うの方に止つて居



る。他分盗んだ肉を食てるのだらう。私は聲を張上げてゼルビノを呼んだ。けれどもゼルビノは若し私の傍へ來れば、嚴しい罰を受ける事を知つてゐるので、此方へやつて來る代りに、横の方へ逃げ出して姿を隱して了つた。

ゼルビノは何も手癖の惡い犬といふのではないが、飢餓に堪へかねて盗をしたのだ。けれども私はそれを辯解として彼を許す事は出來なかつた。盗をしたものは罰を受けねばならぬ。それが美登里團の嚴重な規律である、若しこの規律を等閑にしたなら今度はドルスがその眞似をするだらう。カピとても終ひには誘惑に陷るだらう。

私はどうしても、見せしめの爲め、皆の前でゼルビノに罰を加へて見せなければならぬ。けれどそれにはまづゼルビノを私の前に連れて來る必要がある。と云つてそれは容易の事ではない。こんな時の私の頼になるのはいつもカピだ。

「おい、カピ。己等の頼だから、ゼルビノを探しに行つておくれ。」

カピは私の依頼を果すために出かけて行つた。けれどもカピの容子には、いつも私に命ぜられてするときのやうな、熱心が見えなかつた。私に投げて行つた眼光には、私のために、ゼルビノを捕縛する巡査の役廻りをしに行くよりは、ゼルビノの辯護人になつて、私にいひ解たいといふやうな風が見えた。

私はカピを打棄つて先にこゝを出立するといふ譯に行かぬ。カピが囚人を連れて歸つて來る迄は場

所を動く事が出來ない。けれどもカピが歸つて來る迄には一寸暇がありさうだ。なぜならゼルビノが素直にカピについて戻つて來さうには思はれなかつたからである。尤もかうしてゼルビノを待つといふ事は、左して辛い事とも思はれなかつた。もう村外れから十四五町も遠のいてるので、追手の心配もなし、どこに行つて何をしなければならんといふ的があるでもないから、ゆる〳〵此間に休息して再擧を謀らうとかう考へたのだ。丁度私共はいつか田圃路を拔けて、休息には持つて來いといふやうな、風景のいゝところに來て居た。遮二無二後先も考へず狂人のやうになつて走つて來た落着先は、南部の美はしい運河の畔であつたのだ。鶴巢の町を出てから隨分埃塵だらけの田舍ばかり歩いて來たが、私共の今立止つた邊りは、水は清し、木々の翠は爽やかに、草の艶美はしく、殊に私の足下を走つて居るちよろ〳〵水は花の咲亂れた巖の面を瀧と流れて運河に注いで居る。一寸繪に見るやうな景色で、こゝで草を褥に疲勞を休めながら犬の歸りを待つて居るのは、決して惡い氣持ではないと思はれた。

ところが凡そ一時間ほど待つてもまだ犬は歸つて來ない。カピの姿もゼルビノの姿も見えぬ。私がそろ〳〵心配し始めてるところへ、やつとの事でカピが首を俛れながら獨で力なく歸つて來た。

「ゼルビノはどうした？」

カピは恐る〳〵私の前へ來て小さく蹲まつた。私はきつとカピの容子を見たが、ふと耳に怪我をして出血して居るのに氣がついた。カピとゼルビノの間に何事が起つたか、それを知るには說明はいら



なかつた。ゼルビノはカピに反抗してその耳を嚙んだのだ。ゼルビノがどうしても歸らんので、喧嘩のまゝ物分れをしてカピは歸つて來たに違ひない。私はもうカピが使命を果さずに、みじめな姿をして歸つて來たのを叱る勇氣も無かつた。

カピが手を空しうして歸つて來た以上は、外に策の施しやうも無い。只此上はゼルビノが心折れて歸つて來るのを待つ許りだ、私はゼルビノの性質をよく知つて居るが、始めは强情を張つても、最後には後悔して罰を受けに來るといふ殊勝なところがあるから、今にきつと歸つて來るに相違ない。それ迄まづ氣長に待つ事にしようと覺悟した。

そこで私は猿を肩から卸し、立木の幹にしかと綱で括りつけた。それはジョリカールがゼルビノの眞似をして見ようといふやうな大それた空想を起すまいものでもないと案じられたからである。そして私は木の下に横になり、カピとドルスを足もとに寢かせて休んで居たが、時は經つても一向ゼルビノは歸つて來ない。その中に私は睡魔に襲はれていつかうと〳〵寐入つて了つた。

私が眼を覺した時には、もう太陽が私の眞上にあつた。大分に時が經つて居る。けれどももう大分遲いといふ事を說明するには、何も太陽の位置による必要は無かつた。私の胃袋は小さな麵麭の一片が入つたまゝ、もう何時間空虛になつて居ると思ふと叫んで居る。カピとドルスは見るも氣の毒なやうな悄氣た容子をして私に怨たへて居る。ジョリカールは澁面作つて、私を責めて居る。

ゼルビノの戻つて來る容子は一向見えない。

私は呼んで見た。口笛を吹いて見た。けれどもゼルビノはいつかな姿を顯はさない。甘い朝飯に有りついたので、心地よく敷の中か何かに寢込んで、それを消化さしてるのだらう。

私の境遇はなか〳〵容易ならん事になつて來た。若し私がこの儘こゝを立つて了へば、ゼルビノは迷子になつて、再び私等に結びつく事は出來ないに極つて居る。けれどもいつまでもこゝに待つて居たら、今日は迚も食ひしろを稼ぎ出す事が出來ない。一方に私等は刻一刻と猛烈に食物の必要を感じるので、犬はいよ〳〵絶望の眼を私に向け、猿はます〳〵腹を撫でて、怒の叫びを發して居るのだ。

## 白鳥來

いくら待つてもゼルビノが來ないので、私はモ一度カピを探しにやつた。ところが半時間の後にカピはまたひとりで歸つて來た。そして自分の容子で、ゼルビノの行方がいくら探しても分らぬといふ事を私に悟らした。

あゝどうしたらよからう？

假令ゼルビノには許し難い罪があつて、そのため私等は恐ろしい境遇に陷れられて了つたのではあるけれども、それにも拘はらず、私は彼を見捨てて了ふ考へを起す事が出來なかつた。若し私が師匠の大事な三匹の犬を揃へて渡す事が出來なんだら、師匠は何といふだらう。そればかりではない。私にはこの氣隨もののゼルビノが可愛くもあるのだつた。



私は思案の末、私等の食慾を犧牲にして夕方までゼルビノを待つて見ようと決心した。けれども私等の胃の腑がひつきりなしに飢を叫んでるのに、何にもせずにぢつとして居るのは苦しくて堪らない。それには何か氣を紛らす工夫をして、胃の腑を騙しにかゝらねばならぬと考へた。それも自分ばかりではいかぬから、私等一同氣を紛らして暫時なりとも飢を忘れるといふのでなければならぬ。

さて何をしたものだらう？

私はふと美登里老人から、兵隊が長い行軍で疲れた時、音樂をやると、疲勞を忘れるといふ話を聞いた事を思ひ出した。若し私が陽氣な曲を彈いたら、皆の氣を紛らす事が出來るかも知れぬ。どの道さうして犬と猿と踊らしたら、踊つてる間だけは彼等も飢じさを忘れて、時間が早く立つだらう。

そこで私は木の幹に立てかけてあつた立琴を引寄せ、運河の方に背を向け、座員一同を前に竝べて舞踏の曲を彈始めた。私等は途もないところを走つて來て居たので、その邊に人影も何もないのは、結句今の場合には幸福せであつた。

俳優達は座頭の命令に仕方なく、いや〳〵踊り出し始めた。どうも朝から一片の麵麭ほか胃袋の中に收まつて居ないのでは、踊る張合の出ないのは無理もないが、それでも妙なもので、私の調子が思はず識らずはずみ出して來ると、舞踏もひとりで調子がつき出した。麵麭の事なんか、全く忘れて私は元氣に琴を彈いてると、犬も猿も飢さを忘れたらしく、一生懸命踊りつゞけて居た。

忽ち唐突に「ブラボー！」(やア〳〵！)と叫ぶものがある。透明つたやうな子供の聲で、私の後の方

から聞えたのだ。私は急いで振返つて見た。
「白鳥」と舷側に金文字を表はした白塗の、綺麗な船が停つて、私等の居る此方の岸の方へ方向を轉て居るところであつた。この船を曳いて居た二匹の馬は向うの岸に留まつて居る。
今迄に私の見た事もない異つた船で、普通運河を通る船よりは餘程短い。水から少しほか出て居ない甲板の上には、玻璃戸入の屋形があつて、屋形の前には蔓草で日蔭を作つた廊下が設へてある。そして屋根に卷きついた蔓が、涼しく瀧のやうに下つて居て見るからすが〳〵しい。その廊下には二人の人影があつた。まだ若い三十六七の、氣高い、けれども憂顔の婦人が立つて居て、丁度私の年位に見ゆる男の兒が、籐の寢椅子の上に寢そべつて居た。やア〳〵！　と私等を喝采したのは慥にこの兒であつたらう。
お伽噺で聞く白鳥は、姫や勇士を乘せた船を曳いて來るが、今眼の前に現れた「白鳥」も、決して私の敵ではないと思ふので、驚ろきから回復すると、喝采に酬ゆるため、私は帽子を取つて會釋した。
するとその婦人が外國人らしい、違つた抑揚のある調子で、
「お前、見物人も無いのに、慰みに爲て居たのかえ？」
「ハイ、私の座員に稽古をさして居たのです。……そして自分も氣を紛さうと思つて……。」と私は平生師匠に教はつて居た、身分の違ふものに對する取つて置の言葉使で答へた。
男の兒は婦人を呼んで何か囁やいた。子供の傍を離れると婦人は私の方を向いて、



「お前、もつとしてお見せでないかえ？」
それこそ私の望むところ、今の私等にこれより上の願があらうか。私は躍く胸を鎮めて嬉しさを押隱しながら、
「舞踏をさせませうか。それとも芝居を御覽に入れませうか。」
「おゝ！　芝居を！」と子供は叫んだ。
けれども婦人は舞踏の方が善からうと云つて子供を制した。
「だつて舞踏なんか餘り短いんだもの。」
「御見物お歴々樣のお望みなれば、舞踏の一手相濟みました後、巴里下りの種々なる藝當取立て、御覽に入るゝでございませう。」
私は調子に乘つて、聞覺えの師匠の口上を師匠氣取りに、そのまゝべら〳〵とやらかした。
私は芝居をと望まれなかつたのは、結句幸ひであつたと思つた。なぜならゼルビノが居ないから、俳優が足りないのと、俳優の衣裳や小道具を入れた師匠の背嚢は、旅籠で質に取られてあるからである。
私は立琴を取つて一曲の轉舞を彈始めた。するとカピは前脚でドルス孃の腰を抱へ、節に合はせて轉舞をやり出し、ジョリカールは相手がないから一人で片脚あげて元氣に踊り出した。私等は少しも疲れを覺えない。俳優達は「お歴々の御見物」の前でやるのだといふことをよく了解し、それさへ濟

ませばきつと御馳走に有りつけるとちやんと承知してるから、骨身を惜まず、一生懸命に働くのであつた。

この轉舞が頻りにはずみ出してる時、私は突然蔭からゼルビノが飛出し、踊子等が自分の前に踊つて來た時、知らぬ顔で、つと仲間に入つて、ジョリカールと一緒に踊り出すのを見た。私は人知れず感謝の念に眼が濕んだ。

轉舞の後にまだいろ〳〵の藝をさした。その間私は藝人等を見張りながらも、ちよい〳〵男の兒の容子を見るのに、私等の藝に全く氣を取られて居る風ではあるが、不思議なことにちつとも身動きをしない。寢椅子にその身を横たへたまゝ、只時々手を拍て喝采してるばかりである。身體が痲痺して利かないのではあるまいか。私には何だか板にでも括りつけられて、動けないで居るやうな恰好に見えた。

丁度船は風に押されてこちらの方へやつて來たので、今は自分がその船に乘込んでるやうに、よくその兒の顔が見えた。髪の色は淡褐で、顔色は額の青筋が透きとほつて見えるほどに蒼白い。優しい表情の、病氣の故らしい沈んだ顔立の兒であつた。

私等の藝が濟むと、婦人は優しく、

「まア御苦勞だつた事、それでお賃にはいくらあげればいゝの？」

「それはお心もち次第です。つまらないと思へば少し下されればいゝんです。」



「それではお母様どつさりやつて下さい。」

子供は斯う云つて、なほ私の知らぬ言語で何事か附加へた。

「淺雄はお前の併優達を傍で見たいといふのです。」

私は承知してカピに合圖をすると、カピは一飛で船の中のお客になつた。

「外のは？」と子供は尋ねる。

ゼルビノとドルスが續いて船に飛込む。

「猿も！」と子供は殘らず呼込まぬと承知しない。

ジョリカールを船へ飛込ませようと思へば、それ程無造作な事はないが、只私はジョリカールに信用を置く事が出來ない。一度手放されて船に行つたが最後、どんな惡戯をして婦人を厭がらせるかも知れぬ。そこで飛込みたがつて居るジョリカールを確と押へつけてると、

「そのお猿は意地惡なの？」と婦人が聞く。

「いゝえ、奥様、そんな事は有りませんが、決して他人のいふ事をきゝませんから……どんな惡戯をせぬとも限りません。」

「それならお前、猿と一緒に船へお出。」

婦人は舵器のところに居たこの船の運轉手に合圖をすると、其男は立つて來て、一枚の板を岸に渡してくれた。そこで橋が出來たから、船に飛乘る離れ業はせずに濟んだ。私は立琴の紐を肩に通し、

ジョリカールを手に乗せて橋を渡つた。
「お、猿が來た！　猿が來た！」と淺雄さんは喜んで叫んで居る。
私は猿を連れて傍へ行くと其兒は物珍らしさうに猿を撫廻し始めた。その間に私はよくこの兒を見る事が出來たが、全く不思議な事には私の想像した通り身體を板に括りつけられて居るのであつた。
「ねえ、お前は主人持なのだらう。主人の爲にかうして稼いで居るのだらうね。」と婦人は尋ねる。
「今はたつた一人きりなんで――。」と悲しさうに私は云つた。
婦人は腑に落ちぬやうに私を見て、
「たつた一人つて、いつまでも一人なんぢやアないだらう。」
「二月の間一人つきりで稼がなけりやアならないんです。」
「まア二月だつて？　可哀相に！　お前の年齢で二月も一人で居られるものぢやアない。」
「だつて一人で居る外無いんです。」
「それぢやアかうなんだね。二月の間主人と別れて、一人で稼いで居て、その稼ぎ高を主人に持つて行かうと、かういふのだらう。」
「いゝえ、何にも持つて行かなくつていゝんで、たゞそれまで、私と一座のものが、食べて活きて行かれゝばいゝんです。」
「それでお前、今日まで一人で食べて來たのかえ。」



私は直には答へかねて躊躇つた。今日が日迄私はこの婦人のやうに人に尊敬の念を起させる女に逢つたことがない。けれども婦人の物云振は大變親切で、その聲は情に充ちて居た。そしてその優しい眼光が私を勇氣づけるので、私は何もかも打明けて話して見たい氣になつた。
話して惡いといふ譯はちつともないと思つて、私は鶴巣の風行で、主人の美登里老人が私のために奇禍に罹り、入牢の身になつた次第と、自分が鶴巣の宿を追拂はれてから、二日間一錢の收入もなく難儀した次第を話して聞かした。
私が話してる間、淺雄さんは猿を相手に遊んでる容子であつたが、それでもよく私の話を聞取つたと見えて、話が濟むと私に向つて、
「それではみんなどんなにか腹が減つてるだらう。」
この詞は皆によく分つたから、犬は三匹とも吠えて見せ、ジョリカールは狂氣のやうに腹を撫つて見せた。
「おゝ！　それではお母様。」と淺雄さんはお母さんを呼んだ。
婦人は淺雄さんの意味を悟つて、半分開いた戸口から顔を出した召使の女に、何か違つた言語で命令た。この女が引込んで行くと間もなく、ちやんと食事の準備の出來て居る小な食卓を持つて來て、私等の前に置いた。
「さアお前、腰かけておたべ、有合せのものだけれども、犬も猿もみんな。」と婦人の言葉である。

あゝこんな願つたり叶つたりの事があらうか。
私は立琴を外して傍へ立てかけ、急いで食卓の前に腰かけた。犬は私の周圍に陣取りジョリカールはちやんと私の膝の上に坐つた。
「君の犬は麵麭を食べるかえ？」と淺雄さんは聞く。
麵麭を食べぬか！　とその麵麭にめぐり合ひたい許りに、何れほどの苦勞をした事だらう。證據はこの通りと、私は一片づゝを三匹の犬に投げてやると、食べるといふよりは皆ペロリと鵜呑にして了つた。
「君、猿も？」と淺雄さんは眼を丸くして聞いた。
けれども私は猿に構つてやる必要は無かつた。先生は私が犬にかまけてる間にちやんと肉入饅頭の皮をちよろまかして机の下に匐込み、一生懸命頰張つてるところで、餘り詰込んだものと見え、咽て眼を白黑の大騒ぎをして居た。
私も私で、肉入饅頭を取るなり、ジョリカールほどに頰張つてもが〳〵やり出したが、それでも咽喉に詰るほどの醜態を演じなかつた。けれどもあゝその旨かつたこと！　幾らでも私は口に詰込んで居た。
「まあ可哀相にねえ。」と婦人は私達の容子を見て吃きながら、杯に水を注でくれた。
淺雄さんは何にも云はないが、確かに私等の食慾の猛烈なのに、呆氣に取られたのであらう、眼を



丸くして私等の方を見て居た。全く私等は誰も彼もかつかつして居たので、盜んだ肉で腹を拵へた筈のゼルビノまでが同じやうに詰込んで居た。犬と人間と猿と、仇敵にでも繞り合つたやうに、むしやむしやつて居た體裁は決して見つともよくなかつたに違ひない。
私等の食方に感心して居た淺雄さんは、やがて、
「君、もし今日僕等に逢はなかつたら、どこで夕飯を食べるの？」
「夕飯は食べるあてなんか無かつたんで……。」
「ぢやア明日は食べるあてがあるの？」
「明日はどこかで稼いでいくらでも儲けようと思つてるんです。今日のやうに運のいゝ事があればいいと思つてるんで……。」
淺雄さんは何と思つてか私との談話を止めて、お母さんと長い話を始めた。ちつとも私には分らないけれども、何か淺雄さんがお母さんに賴んでるので、お母さんはそんな事は出來るものではないとでも云つてるらしい。突然に淺雄さんは私の方を振り向くと、
「君、あの僕等と一緒に居る事は出來ないの？」
私は不意を食つて返事も出ず、眼を睜つて淺雄さんを見詰めた。
「淺雄はお前が私等と一緒に居て呉れゝばいゝといふんです。」
「あの此船にですか？」

「あゝ、この船にさ、淺雄は不憫な病人で、醫師の差圖で、お前も見る通り板に身體を括られて居るんだが、家に許り寢せて置くのは可哀相でならぬから、私がかうして船へ乘せて、そこら中を見物させて歩いてるんです。若しお前が私等と一緒に船に居ておくれなら、犬と猿には始終藝をして貰ふし、お前はお前で、私達に立琴を聞かしておくれだらうし、さうするとお前の役目も出來て、格別退屈する事もなくて濟むだらう。また私共の方でも、きつとお前の爲になる事を仕てあげられるだらうと思ふから……お前の年で見物を集めて打つて廻らうといふのは、そりやア決して容易の事ぢやアないよ。何度も昨日今日のやうな目に逢ふに相違ないわ。」

あゝこんな立派な船の上に！　私は夢では無いかと思つた。願つたつてこんな船住居が出來る譯のものではない。それをあちらから求められるとは、まア何といふ運の廻り合せだらう。

私は眼に嬉し涙を湛へながら、婦人の手を取つて接吻した。私の心から溢れた感謝を見澄した婦人は、優しく私の額を撫でて、

「まア可哀相に、お前は飛んだ苦勞をおしだねえ。まだやつと淺雄ほどの年だのに……。」

暫らくすると淺雄さんから私の立琴を望まれた。私は恩報じに出來るだけの事はしなければならんと思ふので、喜んで立琴を取上げながら、離れて船の前の方に陣取り一曲奏で始めた。すると殆んど同時に婦人は、銀製の小さな呼子笛を唇に當て、鋭くそれを吹いた。

私はなぜ呼子笛を吹くかと不審に思ひながら琴の手を止めた。多分私の彈方が拙く、耳障なため止



めさせようとするのではあるまいかと思つた。私の心配の容子を見ると淺雄さんは、

「君、お母様はね、馬に合圖するため呼子を吹いたのだよ。」

なるほどいつの間にか二匹の馬は靜かな運河の上に浮ぶ、この白鳥號を曳いて岸を歩き出して居る。水は舷側を打つてざわ〳〵と音立て、兩岸の並木は私等の後へ〳〵と逃げて行く。今しも沈まうとする太陽は斜にその和かな光線を木や水や船の上に投げて居て、私等の氣持を何とも云へぬ加減に引立てゝ居る。

「君、彈給へ。」と淺雄さんに促されて私はまた立琴を彈始めた。淺雄さんは頭で合圖をしてお母さんを傍に呼び、お母さんの手を自分の兩手の間に守りながら頻りに音樂に聞き入つた。二人が熱心に聞いてくれるので、私は此上もない滿足を感じながら、師匠から教はつたいろ〳〵の曲を彈いたり歌つたりした。

## 船にて

詳しい事は分らぬが、淺雄さんのお母さんは千島夫人といふ英吉利の寡婦で、淺雄さんは一人兄さんがあつたが、何でもそれは亡なりか何かして、今は千島夫人の子と云つては淺雄さんきりしかないのだ。淺雄さんのお父さんは淺雄さんがまだ腹にある中、澤山の財產と爵位を殘して死んだのだといふ。ところがその財產と爵位を相續する筈の淺雄さんが難病にかゝつてるので、お母さんはどんな事

をしても、病氣を癒させたいと、此年月少からぬ苦勞をして居るので、若し淺雄さんが不能力者になつて了ふと、財産も爵位も自然自分の叔父さんといふ人の手に渡つて了ふのださうな。淺雄さんの病氣は餘程六ケしいので、醫者に何度見離されたか知らぬが、その都度お母さんの心をこめた看護で生命だけは取止めて來たのだといふ。病氣も一通りではなくいろ〳〵の病氣にかゝつたらしく、今は何でも腰が立たないのだ。そこで硫黄泉に入浴するが善いとの醫師の勸告に任せ、千島夫人は淺雄さんを連れて英吉利から佛蘭西の比禮寧に渡り、暫らく湯治をして見たが一向效が見えず、その中に醫師はまた病人の身體を眞直にするためバンドを當てがひ、そして土を蹈む事の出來ぬやうにして置くといふ療法を勸めた。夫人はまたさうもして見る氣になつて、暮留堂の港で特別の船――白鳥號を作らせたのである。

夫人は淺雄さんを一間の中に括つて入れて置いたら、氣が滅入つて癒る病氣が癒るまいと思ふし、それかとて淺雄さんは自分で歩く事が出來ないのだから、淺雄さんを入れて置く家を、淺雄さんの代りに歩かせようといふので、さてこそ一風變りの家形船を作らせた譯であつた。

この船には寢部屋もあれば厨房もあり、客間や廻廊まであつて何不自由なく淺雄さんは其時々の氣分で客間に引込んだり、廻廊に出たりして居る譯だ。周圍の景色は船の進行に連れて面白く變つて行くので、淺雄さんは只眼を開くだけの手數を自分ですれば、それでいゝのであつた。

白鳥號が暮留堂を出たのは一ケ月以前で、日數重ねてガロヌ河を遡り、このごろ漸く南部のこの運



河に入つたところであつた。人も知る通り佛蘭西の殆んど凡ての河は皆運河で互に通じて居る。それで白鳥號もこの土地の運河からそちこちの湖水に出、また地中海に沿うた二三の運河をも通過した後、ローン河を溯りそれからサオン河、次にロアール河に出て、セーヌ河に入り、巴里の都をも見舞ひ、セーヌ河をルーアンの港まで下つて、そこから大きな船で英國に歸るといふ計畫なので、それにはまづ半年なり一年なりかゝらうといふのである。

私に宛がはれた室といふのは四尺と七尺ほどの小さな室だけれども、どうもその綺麗で、何もかも疊み込めるやうになつて居て、寢臺でも、机でも椅子でも卽席にちやんと組立てられるその便利さ不思議さ、私の子供心には只喫驚する許りだつたが、併し驚いたのは私の眼許りでは無かつた。その晩初めて寢ろといふ段になつて、衣服を脫ぎ、床の中へ入つて見ると、何とも云はれぬその快よさ、こんな柔かな床に寢たのは生れて始めてで、その彈上られるやうなバネの工合よさ、掛布團の肌觸りの善さ、私はお伽噺の王子にでもなつた氣で、暫くは嬉しさに眠れなかつたが、いつかその中に心地よく寢ついて了つた。

翌朝は早く眼を覺すと、私の俳優達がどんな機嫌で居るかと案じられ、早速甲板の上へ行つて見た。私が出て來たのを見ると、長く住馴れた場所でもあるやうに、心地よげに寢て居た三匹の犬は一遍に起上つて、嬉しさうに尾を振りながら、朝の挨拶をするため私の側へやつて來た。それに引きかへ、ジョリカールは半分眼を開て私の方を見たが、立上らうともせず、すぐ知らない振をして喇叭のや

うな鼾をかき始めた。この無愛相の意味を知るのは一向六ケしくなかつた。ジョリカールは非常な感情家だから、一寸した事にすぐその機嫌を損ねるので、そして一度怒つたが最後、いつまでも執念く膨れて居るのだ。今朝の場合は私が昨夜寢床へ先生を連れて行かずに甲板の上へ寢させたのを根に持つて、空寢入をして居る譯なのだ。

この船で私に宛がはれたやうな上等の寢臺へ、猿を連れ込んで一緒に寢られぬ道理は云聞かしても無駄ながら、私を惡く取るのも無理も無いと思ふので、私は謝まる積りで猿を抱取つて撫廻してやつた。始めは容易に膨れ面を改めなかつたが、全體が氣が變り易く出來てるから、ほゞなく外の方面に考へを移したらしく、私はその顏附から、若し自分を船の外へ連れてつて遊ばしてくれゝば許してやつてよいといふやうな意味を讀取つた。

白鳥號は昨夜私等が寢室へ入つてからは進行を止めて居たので、今朝もまだ岸に繫がれたまゝであつた。そして運轉手はもう起出して船を掃除して居た。そこで私は賴んで橋を渡して貰ひ、一座を引率して野原の中に降りて見た。

犬や猿と飛んだり跳たりしてる中に、大分時が立つたらしい。私等が船に歸つて來た時には、もう二匹の馬がちやんと船に繫がれて、一鞭あてさへすれば出立する許りになつて居た。私等が急いで乘込むと、曳船道の大きな白楊樹に繫いであつた太綱を解き放ち、運轉手は舵器にかゝり、曳船夫は一匹の方の馬にひらりと跨り聲をかけると、曳綱の滑車が軋り出し、白鳥號は鏡のやうな水の面を滑り



始めた。

何といふ樂しい旅だらう。馬は馬鈴の音立てて靜かに曳船道を歩み、人は少しも運動を感じないで滑らかに水の上を進んで行く。舷側で切る水音と馬鈴の音と調和して響くのは、わが白鳥號の進行譜とも聞かれる。曳船道に沿うて一列に植ゑられた丈高い白楊は、丁度綠の幕を岸に張渡したやうで、風も無いのに動いて居るその靑葉越し、柔かに瀘れた朝日の光が斜に船の上に差込んで、絕えず蔭や日向を作つて居る。白楊の影の一面に落ちて居るところは、光線の加減で、惡魔でも棲んでるかのやうに眞黑な恐しい水に見えたり何かするが、近づいて見ると底の眞砂も讀得る許り澄渡つて居るのだ。

私は舷に立つてかういふ景色の變化に見とれて居ると、忽ち後の方で私の名を呼ぶものがある。それは淺雄さんで、例の板に括られたまゝ今甲板の上へ運ばれたところで、お母さんは相變らず傍に附添つて居た。

「君、野宿するよりかよく寢られたかえ。」

私は傍へ行つて、奧樣にも挨拶をし、誠に寢心地よく寢られたと答へた。

「犬はどこに居るの？」

私は犬とジョリカールを呼んだ。犬は喜んで來たが、猿は盤面を作り始めた。それは今から藝をさせられると考へたからである。

千島夫人は淺雄さんの椅子を太陽の當らぬ處へ寄せ、自分はその前に椅子を持つて來て私に向ひ、

「犬と猿を彼方へ連れてつておくれ。私等はちと勉強しなけりやならないから。」
何を勉強するのだらうと不審に思ひながら、私は犬や猿を連れて、甲板の前の方へ遠退いた。すると夫人は本を開いてそれを見ながら、淺雄さんがどれほど諳誦が出來るかを試し始めた。淺雄さんは板に括られて居るから身動きもせずに諳誦を始めたが、どうも一向巧く行ずに恐ろしく支へて居る。三言と續けて云ふ事も出來ぬ上に間違ばかりして居る。
お母さんはその都度優しく間違を直してるが、また嚴重に何遍でも諳誦させて居る。
「淺雄さん、和君は今日はよつぽど何うかしてますね、ちつとも覺えて居ないぢや有りませんか。」
「だつてお母様、いくら習つても覺えられないんですもの、僕はもう駄目なんです。」
「駄目とは何です。なぜ駄目です。」
「僕にはどうしても覺えられないんですもの、僕は病氣だから駄目なんです。」
「和君の頭腦は決して病氣ではないでせう。病氣を假托に不勉強を許して置く事は出來ません。私が毎日どれほど和君の行末を心配してるか、よくお知りだらうに、なぜ私の心を汲取つて、勉強して見るといふ氣になれないのです。」
「でもお母様、勉強する氣でも、どうしても駄目なんですもの。」
かう云つて淺雄さんは泣出して了つた。
泣いたからと云つて千島夫人は子供の我儘を許して置くと云ふ風では無かつた。



「何と云つてもよく諳記が出來ない中は決して民や犬と遊ばせません。」
淺雄さんは啜泣を止めないで居る。失望の面色で夫人は暫らく淺雄さんを眺めて居たが、
「それでは私が讀んであげるから、その後についてお浚ひなさい。さアいゝかえ。」
夫人は靜かに物優しい調子でその本を讀み始めた。それは「狼と小羊」といふお伽噺であつた。
奥樣は一句一句讀んでは、それを淺雄さんに繰返さした。一章を三度ほど繰返した後、その本を淺雄さんに渡し、獨りでよく諳誦して置くようにと言渡し、下に降りて行つた。
淺雄さんはお伽噺を讀んでそれを諳誦し始めた。けれども長く續かなかつた。すぐ外に氣を取られて傍見を始めるので忽ち私の眼と出逢はした。私が手眞似で本を讀めといふと、難有うといふやうに微笑してまた本にかゝつたが、すぐその傍から運河の向岸の方に眸子を移して居る。私は靜かに淺雄さんの傍へ行てまた注意したので、いやくまた讀み始めたが、物の二分と立たぬ中一羽の魚狗が小魚を咥へ、後へ青い光を殘して船を横ぎつて行くと、それにまた氣を取られて頭を擡げながら飛過ぎた方を眺めて居る、其眸子を此方に振向けた時、また私の眸子に打かると、やゝきまりが惡さうに、
「僕にはいくら勉強しようと思つても駄目なんだ。」
「だつてその本は六ケしくないでせう。」と私はもう心易立に云つた。
「どうして君、六ケしいにも何にも。」
「僕には六ケしさうには思はれませんがねえ、君のお母さんが讀むのを聞いて、僕は大方諳誦しちま

ひましたよ。」
淺雄さんは驚いた眼をして、けれども信じないやうに私を見た。
「嘘と思ふなら諳誦して見ませうか。」
「だつて君に諳誦されたら大變だ。」
「それなら僕諳誦して見ませう。本を見てらつしやい。」
淺雄さんに本を開げさして、私は諳誦にかゝつた。三つ四つの間違があつただけで首尾よく諳誦が出來ると、淺雄さんは全く驚いて了つて、
「どうして、君、そんなに覺えたの？」
「僕は傍見なんかせずに、君のお母さんが讀むのを氣をつけて聞いて居たからです。」
淺雄さんは恥入つたやうに顏を赭らめて、
「僕も氣をつけて聞いてるんだけれども、どうしても覺えられないんだもの、どうしたら君のやうに覺えられるかしら。え、君。」
私もどうしたら覺えられるのか知らない。けれども私は考へながら、斯う言つて淺雄さんに說明した。
「君は只本の文句ばかり覺えようと思ふからいけないんです。目でちやんと話にある通りを見て了はなければ駄目なんで！　ねえ、君、この話は羊の事なんでせう。だから僕は眞先に羊の事を思つて、



その羊が何をして居るだらうと考へて見るんです。本には君『或時多くの羊が安全な圍場の中に居ました。』とあるでせう。安全な圍場の中なればちつとも心配がないから、羊はごろ〳〵その中に寢て居るでせう。さう思つてぢつとしてると僕の眼にはちやんと羊の寢て居るところが見えて、本の文句がよく心に這入るんです。」
淺雄さんは感心したやうに聞いて居たが、暫らくすると、
「ウム、それなら僕にも見える。『或時多くの羊が安全な圍場の中に居ました。』白い羊や黑い羊が見える。山羊も雜つてる。仔羊も居る。圍場の柵までちやんと見える。」
「それなら君、もう今の文句を忘れないでせう。」
「ウム。」
「それから君、大抵羊の番は何がして居ます？」
「犬さ。」
「羊が皆安全な圍場の中に居て、ちつとも心配のない時には犬はどうしますの？」
「犬は何にも用が無いさ。」
「さうです、用がなけりやア犬は皆寢ていゝでせう。だから本には『犬は皆寢て居ました。』とあるんです。」
「ウムさうだ、造作も無いや！」

「ねえ、造作もないと君も思ふでせう。今度は外の事を考へて見ませう。犬を連れて羊の番をしてるのは誰？」
「それは牧人。」
「羊が安全な場所で寢て居ると、牧人も用がないでせう。そんな時に牧人は大抵何をして居るの？」
「笛を吹いてる。」
「ほら君、ね。」
「ウム。」
「どこに居て笛を吹いてるの？」
「大きな楡の木の下で」
「一人つきりで？」
「いゝえ、隣の牧場の牧人と。」
「ウム、それでは君、羊も牧場も犬も牧人もみんな君に見えますね。それならこのお伽噺の讀始めのところは大抵諳記が出來やしないの？」
「出來るかも知れない。」
「やつて御覽なさい。」
淺雄さんは心が騷ぐ風情で、臆病らしく私を見たが、思ひ切つて諳誦を試みて見た。



「或時多くの羊が安全な圍場の中に居ました。犬は皆眠つて居ました。牧人は大きな楡の木の下で、近所の牧人と笛を吹いて居ました。」
私も手を拍てば、淺雄さんも自分で手を拍つて喜んだ。
「あゝ僕はちやんと諳記が出來るんだ！」といふ淺雄さんの眼も顏も輝き渡つた。
「君、その後もこの通りにやつて見る氣がありますか。」
「あゝやつて見よう。君とならきつとよく覺えられる。僕、お母樣がどんなに喜ぶだらうと思ふよ。」
さてこのお伽噺の殘りも同じ方法でやつて見ると、淺雄さんは案外早く覺えられて、十五分許りの間にすつかり諳誦が出來るやうになつた。
丁度そこへ奧樣が上つて來て、多分私達が一緒に遊んでる事と思つたのだらう、困つたものといふ風に眉を顰めたが、淺雄さんはお母さんに何も云はれぬ中、
「お母樣、僕、すつかり覺えましたよ。民が僕に敎へてくれたんです。」
千島夫人は全く驚いて私を見た。そして私に何か問をかけようとする風であつたが淺雄さんがその前にもう「狼と小羊の話」を諳誦し出した。そして淺雄さんはすつかり間違はずに諳誦が出來たのであつた。
この間私は奧樣の容子を見て居ると始めは笑傾けて聞いて居たが、だん〳〵に奧樣の美しい眼は曇つて來るやうであつた。けれどもその時奧樣は淺雄さんの方に伸しかゝり、兩腕で淺雄さんを抱へて

長い接吻をしたので、私は奥様が泣いたかどうかそれは知らなかつた。
「本にある字なんか、お母様、覺えなくつてい、んです。」と淺雄さんは得意になつて、
「何でも本にある事を見なけりや駄目なんです。僕は民に教はつたので、文句を諳誦しながら眼を上げると、笛を吹いて牧人がちやんと見えるんで、僕には笛の音さへ聞えるんです、お母様。僕一つその節を歌つて見ませうか。」
淺雄さんは悲しい調子の英吉利の歌を歌つた。それを聞くと奥様は泣出したので、私は淺雄さんの頰にお母さんの涙のかゝるのを見た。それから奥様は私の傍へ來て、私の手を握り締めたが、私はもうひどく心を動かされて了つた。
「民や、お前はほんとに感心な兒だ事ねえ、私からもお禮を云ひますよ。」
この事があつてから私のこの船に居る位地はすつかり變つて了つた。昨日は犬や猿を淺雄さんに使つて見せる大道藝人として、この船に乘込んだのだけれども、今日は淺雄さんの學友として、犬や猿から引分けられて了つたのだ。それからは毎日淺雄さんの讀書の相手で、不思議に淺雄さんは私と本を讀む事を樂しみにし始めた。長い間お母さんがかゝつて居ても、覺え込ませられなかつた事が、僅か一日や二日でちやんと淺雄さんの頭へ入るやうになつた。そして淺雄さんと私との間の友情は日に日に濃くなつて、私も兄弟のやうに思へば、淺雄さんもその通りで二人の中にはちつとも遠慮といふ事がなく、身分の懸隔などといふ事はお互に丸で忘れて居た。それは多分子供同志の、何の考へもない



間の事であつたからかも知れぬが、一つにはまた奥様が私等二人に何の隔てがましい事もなく、淺雄さんにする通りに私にもして呉れ、兄弟の子でもあるかのやうに取扱つてくれたその親切と優しさに、つひ遠慮を忘れて了つた爲でもあつたらう。年月隔てて今になり、この船の中での過來し方を考へて見ると、私の少年時代の眞に一番樂しかつた時であつた。
殊にこの船での遊山旅がどれほど私の氣に入つたらう。汽車が出來てから以來といふもの、南部の運河は人に忘れられて居るが、佛蘭西の不思議の一つに呼ばれた其運河の沿岸には名所舊蹟や變つた見物などが多いので、それを水のまに〳〵尋ねて廻る面白さは何に比べるものも無かつた。そして私等は景色のいゝところや面白いところではいつまでも止まり、詰らないところはさつさと過去つて了ふので退屈する間も何も無かつた。
極つた時間に食事はちやん〳〵と蔓草の翠で圍まれた洒落た廻廊に運ばれ、そこで景色を見ながら睦じく肉刺を運ぶその樂しさ、奥様はよく行先々の地理や歴史を知つて居て、それを私等に話して下さるばかりか、食後にはよく繪本や寫眞帖を私等に擴げて見せ、時には面白い怪談や、傳記など聞かして下さる。また私も夕暮、または月の夜など、よく立琴を取つて岸に上り、立木の後などに陣取つて歌を歌ひ、奥様や淺雄さんに聞かせたりした。淺雄さんは靜かな夜に、見えないところで奏でる音樂を聞くのが好だつた。そして私が止めると、よくもつと〳〵と聲をかけ〳〵した。
この歡樂に充ちた生活は、直の見る影もない茅屋を見捨て、美登里老人の踵について毎日疲れた足

を引摺つて居た私に取つて何たる變化であらう。直の家では鹽煮の馬鈴薯の外には何の御馳走も無かつた。師匠に連れられてからも麺麭の一片に一夜を百姓の納屋に過す事が少くなかつた。今は毎日の食後に上等の果實菓子もあれば、クリームもあり、蒸菓子もある。その上泥まみれになつて宿を見つけて廻る心配もない今の境遇は、私に取つての極樂世界であつた。

全く千島夫人の料理は甘しかつた。飢る心配もなければ暑さ寒さの懸念もない遊山船の生活は樂しかつた。けれどもそんな肉の上の滿足よりも、何よりも、もつと甘いもつと樂しい、もつと親しいものを私は味はつた。それはこの船に居る間私の胸に充されて居た感情の滿足である。

私は一度ならず二度までも自分の戀慕ひ、杖柱と頼む人から、引離され、此世に只一人殘された。かくて哀別離苦の荒野を逍遙うて居た私は、端なくも私を愛する人に救はれ、私も心の底から、その人——美しい、親切な、優しい夫人を戀慕ひ、私を無二の友とするその子に同胞のやうな愛を濺ぐやうになつた。そして私の心に兆した愛情は日に〳〵培かはれた。

たゞ私の味はふ歡樂の底にはいつでも隱れた悲哀があつた。淺雄さんが蒼い、悲しさうな顏をして寢室に寢て居るのを見る毎に、健康と活力に充ちた私は、なほ淺雄さんの幸福を羨んだ。私が羨んだのは、淺雄さんの安逸の生活では無い。美しいこの遊山船でもない。淺雄さんに對するお母さんの愛情であつた。

淺雄さんのやうにお母さんに愛される事は——日に十度も二十度も接吻され、自分の好むまゝにお



母さんを接吻する事は、どんなに幸福であらう。その奥様が私に差延べた手を接吻するさへ、私に取つては容易に出來る事ではなかつた。私は生のお母さんに接吻される事もなく、接吻する事も出來ぬ悲しい運命を以て生れて來た孤獨の兒だ。多分モ一度懐かしい直にだけは、逢ふ事が出來るかも知れぬ。それは私に取つて大きな望み、大きな喜びであろけれども、もう直をお母さんと呼ぶ事は出來ないのだ。私は一生淋しく只一人暮すのだらう。

奥様や淺雄さんが私を親切に遇らつてくれゝばくれるほど、私はこんな悲しい考へを根に持つやうになつた。親もなく、兄弟もなく、家もない私のやうな孤兒の分際で餘分の事を望むのは身の程を知らぬ云分であるに違ひない。私は現在の幸福に滿足せねばならぬ。その位の事は私も知つて居る。實際また今の有様に此上もない滿足を味はつて居るのだ。若しこの境遇が長く續くものならば、全くどこに一つ不足を云ひ得るところはないのである。

けれども最後の時は次第に近づいた。夢のやうなこの幸福の境遇に、別を告げねばならぬ時は次第に近づいて來た。

## 哀別離苦

美くしい白鳥號の上の月日は矢のやうに飛んで、師匠の美登里老人が出獄する日取は間近に迫つて來た。私は師匠を迎ひに行かねばならぬのであつた。

實は鶴巣の町から遠のけば遠のくほど私はその事に思ひ惱んで居たので、今まで船で來た通りの道を私一人で戻つて行かねばならぬと思ふと、元氣も何も一遍に失なつて了ふ。それは船の旅のやうに樂しかりさうな事はない、もう柔な寢床もないのだ、クリームもないのだ、蒸菓子もないのだ、食後の團欒もないのだ。

けれども千島夫人や淺雄さんに別れる辛さに比べれば、それは何でも無かつた。私は懷しい二人の愛情に長の別れをせねばならぬ。既に直を失したやうに、二人を永久に失はなければならぬのだ。あゝ私はいつでも引裂かれるため、人に愛され、また人を愛する無慘の運命を持つて生れて來たのではあるまいか。

或日私は私の心配を打明るため、幾日かゝつたら鶴巣の町へ歩いて歸れるか奥樣に聞て見た。そして私は主人の出獄の日には監獄署の前へ行て出迎へをしなければならぬのだと話した。

ずるとそれを聞いた淺雄さんは大きな聲で、

「厭だ、厭だ、民が行つては厭だ！」

私は主人持なのだから、自分の身體の自由にならぬ事と、私の師匠は私の親達に金を拂つて私を借りてるので、私は師匠の云なり次第一緒に諸國を歩き廻らねばならぬ義務のある事を話した。

こゝで私が親達と云つたのは、實の父母のやうに聞えるやうに態と云つたので、私は今迄自分が捨兒だといふ事を祕し隱しにして居たのである。それは前にも話した事のある通り、私の村では捨兒と



いふものを非常に賤しみ、野良猫や野良犬よりもつと慘く取扱ふのを知つてるので、私の子供心には世の中で一番人に嫌はれるのは捨兒だといふ觀念が養はれて了つたのだ。師匠はそれを承知の上だから仕方がないが、私はどんな事をしても千島夫人や淺雄さんにその事を知られたくない。自分が捨兒だと打明るよりはいつそ死んだがましとさへ思つて居た。その位だから、私の親がほんとの親でない事は、今迄けぶりにも見せて居なかつたのだ。

勉强の時の外はお母さんを自分の云ひなり次第にして居る淺雄さんは叫んだ。

「お母樣、民を遣つてはいやです。」

「私も民が居ておくれならいゝと思ふのです。和君はそんなに仲善しなんだし、私も氣に入つて居るしするから。けれども私達の都合ばかりで決る譯には行きません。第一民が一緒に居たくないと思へばそれまでなのだし——。」

淺雄さんは遮ぎつて、

「いえ、民は僕と居たいんです。ねえ、君、鶴巣に行くのは厭なんだらう。」

奥樣は私の返事を待たず、

「第二にはまた民の主人が承知して呉ないと、民許りが得心でもさうする譯にはいかないのです。」

「ねえ、民、だつて君は僕等と一緒に居るのが厭な事ないだらう。」

美登里老人は私のために善い主人であつた。私を勞はつてもくれ、私を敎育してもくれた。けれど

も美登里老人と共にして居た私の生活と今の生活、千島夫人が私にして呉れる數々の心附とは決して比較にはならなかつた。私は美登里老人を、私の恩人であると思つて居るけれども、千島夫人や淺雄さんの慕はしいことはまた格別であつた。私は心の中に昨日今日の間柄に過ぎぬ人々に、大恩ある主人を見かへては濟まぬと思ひながら、それでも奥様や淺雄さんの傍に居たい心は制へることが出來なかつた。

奥様は私がどう返事したものと迷つて居る中に、

「民、善く考へてから返事をおしな。お前を止て置きたいといふのは、この先淺雄の相手になつて、一緒に勉强して貰ひたいからで、今迄此船に居たやうに氣樂に暮せると思つたら間違です。お前が師匠と大道生活をすれば、お前に取つてこれほど自由な事はないのだから、彼此よく考へて見て――」

「いえ、奥様、考へて見る迄も有りません。さうなると、私はどんなに難有いか知れないんです。」

「ほらお母様、民は承知なんです。」と今迄心配さうに私の容子を見て居た淺雄さんは始めて眉を開いて、嬉しさうに叫んだ。

「それでは民の方は善いとして、今度は民の主人の承諾がいります。それにしても私達がまた鶴巣まで船で引返して行くといふ譯には迚も行かないし、また身體の利かぬ淺雄が居るのだから、汽車で行くといふ事も出來ず、旁私からお前の主人に手紙を出して、よく譯を話し、旅費を入れてやつて、濱戸まで來て貰ふといふ事にしませう。そして都合よくお前の事を承知してくれゝば、まアそれで事



が運んだやうなものの、お前は兩親があるとお云なのだから、その方にもまた相談しなければなりません。」

そこまでは優しい魔神が魔術の杖で觸つてくれたかと思ふほど、話は私の爲め都合よく運んだが、そこで忽ち空想の樂しい夢が破れて、悲しい事實の谷底へ蹴落されて了つた。

私の兩親へ相談をする！

相談をされたが最後、私の捨兒だつた事は一遍に暴露て了ふだらう。さうすると淺雄さんも奥様も私を傍に置くのが一遍に厭になるだらう。二人の私に對する愛情はそのまゝ萎縮んで了ふだらう。いや私に愛情を濺いだといふその記憶さへも、二人に取つて不快なものになるだらう――淺雄さんは捨兒と遊び、一緒に本を讀み、友達になつて了つたのだ――奥様はそれをどんなに淺ましい事に思ふだらう。

私は絶望のため、茫然氣が拔けたやうになつて居た。

奥様は驚いて私の容子を見ながら、眼で答を促す風であつたが、私が默つてるので、多分主人の來る事を案じて、心配し出したのだらうとでも思ひ返したらしく、もう私には何も問はなかつた。

幸福と以上の對話は晩餐の後であつたので、寢る時間に間も無かつたから、私の惱んでる容子を不思議さうに、また心配らしく見て居る淺雄さんの眼から逃れて、私は自分の室へ入り込んで了つた。

その晩は私が白鳥號に來てからの始めての厭な晩であつた。恐ろしく厭な、長い、そして熱氣に惱

まされ拔いた苦しい一夜であつた。

どうしたものだらう？　何と云つたものだらう？

私は一晩悶えて何の解決も得る事が出來なかつた。そしてとう〳〵何も云はぬ事に極めて、行くところまで行つて、暴露たらその時の事と覺悟を極めた。

多分美登里老人は私を手放す事を承知しないだらう。さうすると事實が知れずに濟む。事實が知れるよりは主人が不承知を云つて呉れた方がいゝとまで私は考へた。主人が不承知なら、勿論私は奥樣とも淺雄さんとも別れなければならぬ。もう二度と二人を見る機會は無くなるかも知れぬ。けれども二人は、いつも私を思つてくれるだらう。私の上に不愉快な記憶の殘らぬことを、せめてもの思出とする事が出來やう。

美登里老人に手紙を出してから三日目に、千島夫人は返事を受取つた。それには師匠が瀬戸行を承知したから、來る土曜日の午後二時に着く汽車で來るとあつた。

さてその日になると奥樣は師匠に逢ふため、別に瀬戸の或る旅館の一室を借受た。私達は丁度その日に瀬戸へ來たのである。そして私は奥樣の許可を得て、師匠を停車場に迎へるため、犬や猿を連れて出掛けて行つた。

犬は三匹ながら何か事があるのだと見て取つた容子で、さも心配らしい風をしてついて來たが、ジョリカールだけは何の變つたところも無かつた。私の心配は犬どころではない、若し私に出來るもの



なら、どうぞ捨兒の事は祕密にしてくれと師匠に賴んで見ようかと、道々何度その事を考へたかも知れぬ。

けれども私にはどうしてもそれを賴んで見ようといふ勇氣が出なかつた。

私は三匹の犬の綱を持つて、ジョリカールを上衣の下に抱へて、停車場のプラットホームの隅の方に突立ち、私の周圍にどんな事が起つてるかも、ちつとも知らずに只考へ込んで居た。私は犬が騷ぎ出さなかつたら列車の着くのも知らずに居るところだつたらう。

さて列車が止まると、犬共は敏くも主人の臭氣を嗅つけたらしく勢ひきつて前に飛出したから、うつかりして居た私の身體は、覺えず知らず前の方に持つて行かれ、同時に彼等を繋いで居た綱は私の手を放れて了つた。

犬は嬉しさうに吠えながら走つた。殆んど同時に私は、今列車から、いつもの通りの服裝で降りた師匠に、彼等が飛びかゝるのを見た。一番身輕で敏捷なカピは、素早く師匠の腕に取つき、ゼルビノとドルスは兩脚に纏はりついた。

今度は私の順番が來た。師匠は私を見るなり、カピを取放し、いきなり私を抱いてそして始めて私を接吻して呉れた。何度も何度も。

「お、民、達者で居たか、可哀相な目になう。」

師匠はいつでも私に辛かつた事は無かつたが、それでも今日のやうに露骨に私を勞はつてくれた事

は無かつた。師匠の此仕打は私の眼に涙を湧かせ、私の胸を一杯に詰らした。

私は師匠の姿を打守つた。師匠は牢の中で大分年を取つた。腰は曲つて、額には皺が殖え、唇の艶は失て居た。

「民、乃公の姿は大分變つたらうの。牢住居ほど住心地の厭なものは無い。飛んだ病氣になつたやうなものぢや。併しもうその病氣も大丈夫ぢや。」かう云つてすぐ話を變へ「ところで、乃公に手紙を送した女子と、お前はどこで知己になつたのぢやな。」

私は師匠について停車場を出ながら、白鳥號に出逢つた初から、千島夫人母子に望まれて今日まで船の上で一緒に暮して來た次第を詳しく物語り始めた。殘らず話して了ふと、どうしても厭な〳〵最後の問題に到着するから、成るたけ話が濟んで了はぬようにと船の上の生活などを詳しく話し出したのだ。師匠を見捨てて千島夫人母子と一緒に暮したいなどといふ事を、どうして厚かましく師匠に云出せよう。

都合よく、話がまだ終らぬ中に、千島夫人の休息して居る旅館の前へ來た。その間師匠も千島夫人の手紙の事については一向私に云はなかつた。

「それではその千島夫人とやらは、乃公を待つてるのぢやな。」と、旅館の閾を跨いだ時に師匠は問うた。

「あゝ、お師匠さんを待つてるの。僕、奥様のお部屋に案内しよう。」



「いやそれには及ばん事ぢや、部屋の番號は？　お前は犬やジョリカールの番をしてこゝに待つとるが善い。」

師匠が斯うと云出した時には、きつとさうせねば承知せぬのだし、私もまた決して師匠に言葉を返した例は無かつたが、今日ばかりはどうしても師匠と奥様の會見の模様を知りたい。また自分が師匠を案内して行くのが順序で、當然と思ふので、押して案内さして下さいと云はうとすると、師匠は手振で私の口を塞いで了つた。そして旅館の入口のところの欄を指さした。私は仕方なしにそこへ腰を下した。犬共も師匠について行かうとしたが、これまた叱りつけられると、彼等は大人しく私の傍へ來て蹲まつた。美登里老人はいつも命令者の威嚴を缺いた事が無いのだ。

どういふ譯で師匠は私を連れて行かないのだらうか？　私は心配を仕拔いて待つて居ると、程なく師匠は出て來た。

「民、奥様に暇乞をして來るのぢや。」

私は自分の耳を信ぜぬやうに師匠の顏を守ると、

「奥様に暇乞をして來いといふのぢや、乃公はこゝにお前を待つとる、十分の中にこゝを出立せにやならん。」

私の心は全く顚倒して了つた。落膽して口が利けないで居ると、

「何阿呆のやうに立つてるのぢや。早く奥様に暇乞をして來んかえ。それとも乃公のいふ事がまだ解

らんかの。」と荒つぽい調子で云つた。

師匠がこんな調子で私に物をいふのは始めてであつた。私は機械人形のやうに榻を立上つて、解つたやうな解らないやうな悲しい氣持で、奥様の室へ行きかけた。そしてモ一度師匠に向つて、

「それではお師匠さんは已等を……。」

「乃公は奥様に、民は乃公の役に立つ大事の兒で、乃公も民に取つて無くてはならぬ爺ぢや、お互に離れる事が出來ぬから、乃公の權利をお讓り申す事は御免被るときつぱり斷つて來たところぢや。さア暇乞に行て來た。」

私は私の心ほどに重い足を奥様の室の方に引摺つた。私は例の捨兒の一件が頭にこだはつて居るので、十分の中に立つといふ言葉から察すると、何もかも師匠が話して了つて、容易に奥様を納得さしたのではあるまいかと想像した。

やつとの思ひで、奥様の室に入つて見ると淺雄さんが泣いて居て、奥様が淺雄さんの方に屈みながら慰めすかして居るところだつた。淺雄さんは私を見つけると、

「民、ほんとに行つちまふの？　行つちやつては厭だ！　厭だ！」

奥様は私の代りに、私の身體は主人の外には自由に出來ぬのだから仕方がないと説明し、そして私の眼にすぐ涙を湧せた懷しい優しい聲で、

「ねえ、民、私はお前の主人に、是非お前を引取て世話したいと、いろ〳〵頼んで見たのだけれども、



どうしても承知して呉れないのだよ」

「彼奴意地惡爺なんだ！」と淺雄さんが言葉を插む。

「いゝえ、決して意地惡爺さんでは有りません。」と奥様は答へて、私に向ひ、前の話を次いだ。

「それは爺さんのいふ事も無理のないところで、全くお前を失しては困るに違ひない。その上爺さんの容子では眞からお前を可愛く思つてゐるらしい。一國者ではあるらしいが、至つて正直な眞摯な口の利やうだし、何か商賣柄には似合はぬ氣位もあつて、大道藝人風情とは受取れぬ挨拶振であつた。私に云ふには、自分は民を愛して居れば民も自分に懷いて居る、自分と一緒に辛い世渡をさせるのは彼の身の爲で、若し貴女の世話を受けることになれば、身體は樂にならうけれど、云はば奴隷も同樣、貴女がどんな氣で居ても、彼の根性は自然にさうなるに極つてる。貴女は彼に學問をさせても下さるだらう、躾を施しても下さるだらう、なるほどさうすれば、彼の知識は出來て、大分と智慧者になれるだらう、けれども彼の將來に肝心な人格、獨立獨歩の氣象といふものは、貴女方の傍に居て憚りながら出來るものでは無い、民は決して貴女の息子にはなれないのだ、どこまでもこの大道藝人の倅なのだ、その方がこゝに居なさる可愛らしい優しさうな病氣の息子さんの玩弄物になつて、成人するよりどれほどましか知れないのだつてね。」

「民のお父さんでも無いものを！」と淺雄さんは腹立しげに叫んだ。

「それはお父さんではないけれども、主人です。兩親から借りて來て居るのだから、當分は主人の云

ひなりになるよりほか無いのです。」
「だつて僕、民が行つちまつては厭だ。」
「いくら和君が厭でも仕方がありません。けれどもいつまでもあの爺さんのものといふのでは無いから、民の兩親に相談して見れば、またどうにかなるまいものでもあるまい。一つ手紙を出して見ても善いのだが……。」
「いゝえ奥様、それはいけません！」と私は一生懸命に叫んだ。
「なぜ、いけないの。」と奥様は不思議さうに私を見た。
「だつて駄目なんですから……奥様、どうぞそんな事をしないで。」
「でもその外に仕様がないものを……お前も妙な兒ぢやアないか。」
「でもお願なんです。奥様、どうぞ——」と私は悲しい聲を出した。
「それは鯖野だつたね、お前の兩親の居るところは？」
私は聞えない振をして、淺雄さんに近づき、いきなり兩腕に抱きしめて、滿身の友愛を籠た訣別の接吻をした。そして淺雄さんがその力の無い腕で、私を放すまいと抱へて居るのを振放し、奥様の前へ來て跪き、奥様の出してくれた手をまた涙ながら接吻した。
不憫なものと、奥様は一言仰しやつて私に伸かゝり、額に接吻して下すつた。
私は起上ると、たまらなくなつて急に戸口の方に駈出し、



「淺雄さん、僕はいつ迄も君のことを思つてます。奥様、決して御恩は忘れません！」
とおろ〳〵聲でいふなり、背後で淺雄さんが、
「民ッ！　民—ッ！」と腸を絞るやうな聲で叫ぶのを半分聞いて、戸口をぴたりと閉るなり出て了つた。
眼を泣腫しながら主人の傍へ來ると、
「さア出かけるのぢや!!」
私等は默つて旅館を出た。

## 雪空

私はまた雨の日、炎天の別もなく、塵埃も浴びれば泥塗れにもなつて、師匠の後から肩を腫しながら立琴を背負つて、疲れた足を引摺り廻らねばならぬ身の上となつた。大道の眞中で「御見物お歴歴」のお慰みに、阿呆な眞似をお目にかけ、泣いたり笑つたりして見せねばならぬ事になつた。
此早變の境遇は私に取つて決して面白い事では無かつた。なぜなら安樂な生活や、幸福な目にはすぐ慣こになつて了ふからである。舊の事は思はないで樂な事ばかりが私の思ひ出になる。あゝ厭だ、あゝ辛い、あゝ苦しいと思ふ都度に、二ケ月間の柔かな幸福な生活が偲ばれる。
引切なしに續く幾日、長い道程の間、私は何度か師匠から態と後れて、自由に淺雄さんの事、奥様

の事、それから「白鳥」の事を考へ、その懐かしい記憶を辿つて私は過去に活きようとして居た。

あゝ何といふ愉快な時であつたらう。夕暮片田舎の汚ない旅籠に着いて一夜を過す毎に、私はその凸凹の硬い寢床を、「白鳥」の私の船室の、柔かな肌觸りの善い寢床に比べて考へて見ぬ譯に行かなかつた。

私はもう淺雄さんと遊ぶ事は出來ないのだ。奥様の優しい聲を聞く事は出來ないのだ。あゝ私はいつかまた二人に邂逅ふ事が出來るだらうか？

私は今迄つひぞ知らなかつたほどの物悲しさを覺ゆるやうになつたが、たゞ一つ仕合せな事には、師匠が前よりもずつと優しく、柔和な人になつて私を親切に勞はつてくれるのだ。いや柔和な人と云つては少し聞え難いかも知れぬが――なぜなら師匠は決して柔和な性質の人では無かつたから――併し事實は全く柔和な人になつた。少くも私に對してはさうであつた。これは師匠の性質の上に現れた大きな變化である。同時に私に取つては此上もない幸福で、淺雄さんの事を考へて、いつも胸一杯になり、涙の堰が切れかゝるのを、師匠の慰藉で危く食ひ止めた。そして私は此世に獨法師ではないと心強く感ずるのだ。私の主人は慥に私の主人以上の人であつた。

私は日の中に何度師匠に接吻したいと考へる事があつたかも知れぬ。私は胸一杯に溜つて居る私の感情の出口を、さうして求めたいのであつた。けれどもそれは私に出來なかつた。師匠は柔和な人になつたと云つても、勝手にそんな心易立の出來るやうな、氣易い人では決して無かつた。



初めに私が師匠に對し心易立の出來なかつたのは、師匠が怖かつたからであつたが、今は自と起る尊敬の念が、私の心易立を制へて居るのだ。私の村から一緒に出て來た時は師匠は只の人のやうに心得て居たが、多分それは私の分別心が無かつたからだらう。千島夫人の手許に二ヶ月滯在して居る間、大分眼が開たらしい。私がよく師匠に氣をつけて見ると、不思議な事に、師匠の態度、風采、物の仕振といふやうなものが私の多く見る普通の人とは違つて、大變に千島夫人の折に觸れての態度、風采、物の仕振に似通つて居る。何だか千島夫人を男にしたのが、美登里老人で、美登里老人を女にしたのが千島夫人であるやうな氣がしてならなかつた。千島夫人が「貴婦人」なれば、美登里老人はまた「紳士」の資格を持つて居た。只だ相違は千島夫人はいつも貴婦人なのに引かへ、私の師匠は相手次第、いざといふ時に紳士の態度が現れるのであつた。で私はいつも師匠の威嚴を感ずるので、師匠が優しい言葉をかけて、十分隙を見せてくれる時でさへも、懷へ飛込んで接吻しに行くといふ勇氣が出なかつた。

私等は例の通り興行して廻つて居るのだが、瀨戸を出てからといふもの、隨分と月日を重ねた間に、主人は一言も千島夫人の事や白鳥號のことについて話し出さなかつた。私も決して自分からは云出さずに居たのだが、妙な事には或日主人の方からその事を云出した。そしてそれからといふもの、毎日きつと自分が口を切つて、千島夫人の噂を始める。

「お前、あの女子をよつぽど慕つて居るのぢやな。いつ、それも無理は無いわい。全く親切な善い女子

ぢやつた。其方には分て善い女子ぢやつた。決して恩を忘れぬやうにするが善いぞ。」
そして師匠はよく次足して云つた。
「あゝ、さうするところだつたが！」
私には初めは何の事か解らなかつた。けれども何度も同じ事を聞く中に、師匠の容子と前後の言葉附から、段々判斷が出來て來た。私を手許に置きたいといふ千島夫人の申出を承諾すれば善かつたと、師匠は考へ始めたのだ。
「あゝ、さうするところだつたが！」といふ詞の中には全く深い後悔の調子があつた。師匠は私を淺雄さんの側に置くところだつたと、今になつて考へ始めたのだ。併しもう取返しはつかない。私等は果して「白鳥」に邂逅ふ事が出來るだらうか。
今更取返しがつかぬとはいふものの、私は主人が後悔し始めた事を嬉しく思はずには居られなかつた。全體私はなぜ主人が千島夫人の申出を情なく拒絶したのか、それが先づ分り兼て居たので、尤も奥様から師匠の不承知の理由といふのを聞取つたに違はないが、子供心にどうしても腑に落兼て居たのであつた。で後悔するのが師匠の本心に違ひないと思ふと、今ならたしかに夫人の申出を承知するに違ひないと思はれ、私の胸には大きな希望が湧き始めて來た。
「なぜ私等は『白鳥』に邂逅へぬだらう？」
「白鳥」が佛蘭西の川に泛んで居る限り、邂逅へぬ理由は決して無い譯だ。船の中で聞て居た話の容



子や何やから押して見ると、「白鳥」はきつと運河を出て、ローン河を溯つて居るに違ない。私等も今はそのローン河の河傳ひの町々を打つて廻つて居るのだ。どちらが先になるか知れぬが、先ならばこちらが追つかうし、後なれば彼方が追つかう。何だか逢ふ事の出來さうな心持が時々刻々に募るやうであつた。
私は川添の大路を歩きながらも、その兩岸の風景や美しい丘には目もくれず、水の面許りを注意して居た。アルルやタラスコンやアビニオン、それからワランス、ツールノン、ウキエヌと打つて廻つても、土地の風俗人情、さては羅馬領時代の遺跡などちつとも私の好奇心を惹かず、宿へつくと私は一人で川岸や橋の上へ出かけ、若や「白鳥」の影が見えはせぬかと憧憬れた。向うの方の霞の中から船足の入つた船が見えて來ると、私はきつと胸を躍らして、「白鳥」かも知れぬと待構へるのだ。
けれどもそれは決して「白鳥」では無かつた。
時にはそこらに纜つて居る船の船夫にかう〳〵した船を見かけぬかと聞いて見るが、彼等は一人でも「白鳥」を見かけたものは無かつた。
師匠には何とも云はずに出かけて居たが、師匠も終には私が「白鳥」に憧憬て居るのだと察したらしい。けれども私の心に兆したその芽を摘枯らさうとはしなかつた。そして私の推測が間違はなければ、師匠は私を千島夫人に讓り渡さうと今は覺悟を極めて居るらしい。さうなればもう縮たもので、千島夫人から直のところへ手紙を出す必要がないから、私の祕密が知れる筈なく、夫人と師匠の間に

事が極つて了ふだらう。と私の運命は他愛もなく極るやうに幼心に考へて居た。

程なく私等は里昂に來たが、こゝには四五週間逗留して居た。その間私は暇がありさへすれば、ローン河とサオン河の岸に出かけるので、私はその邊の地理は、なまなかの里昂の人よりずつと詳しくなつた。

けれども私の尋ねる船はちつとも見當らない。何處にも「白鳥」の姿は無かつた。

私等は里昂を立つて、サオン河のずつと上のヂジョンの町に行くこととなつた。私は古本屋の前へ行つては鵜の眼鷹の眼で、佛蘭西の地圖を探してだん〳〵調べて見ると里昂との間にシャロンと云ふ町があつて、佛蘭西の「中央運河」がそこからロアール河に通じて居る。白鳥號は多分この運河を通じてロアール河に入るに違ひないと思はれるが、シャロンで待つて居られる身體ならば兎に角、左もなくヂジョンまで伸して了へば、もう迚も「白鳥」に邂逅ふ望みは無いと分つて私は全く滅入つて了つた。

私等は幾日かの後にシャロンに來た。最後の望みをかけて居た「白鳥」はこゝでも見出されなかつた。もう眞の絶望で、私が今まで人知れず育て上げて居た空想は、哀れにも微塵に破れて了つた。

重荷に小づけで、私の失望の大きいところへ、今年は時候が早く、冬は眼の前に迫つて來た。もう朝夕の寒さは一方ならず身にこたへる上に、この國のならはしの雨勝の季節に入り、毎日雨と泥の中を歩くので、その辛さも一通りでは無く、骨までも濕れ、頭髪まで泥のはねをあげ、疲れに疲れぬい



て、やつとの事汚くるしい旅籠の一室、または納屋へ落着いたその夜の氣分は決して華やかなものでは無かつた。

私等はやがてヂジョンに着きは着いたけれども、雨に妨げられる日が多く、殊にまた冬空の興行とて、ちつとも思はしい事がないので、急いでまた此土地を立つた。そしてこの郡の山の多いところを横ぎつて行くので、濕つぽい寒さと、身を切る風にさいなまれ、骨も凍るかと思ふ許りだ。寒さに弱いジョリカールは可哀相な程に元氣がなく、その悲しさうな容子は私どころではなかつた。

師匠の目的は巴里に居りさへすれば冬中興行が出來るから、一刻も早く巴里に行かうといふので、汽車ならば半日ほどで行けるところを、財布の都合か、それとも譯があつてか、八十里の道程を私等は歩いて巴里に行かなければならないのであつた。

私等は巴里行を急ぎながらも、道すがらの町や村で、時間と天氣の都合さへ許せば短い興行を試み、僅か許りの上り高を掻集めては、また出立した。

鯱代まで二十里程の途中はそれでもまづ都合よく行つたが、この町を立つてからは雨が止んだ代りに、風が北に變つて了つた。冷たい北風を眞向に受けて進むのは、決していゝ氣持では無かつたが、それでも初めの中は、何週間か大抵雨に惱まされ拔いて來た私等には、いつそ濕れて苦しむよりましであると思つた。すると二日目から天氣が變りかけて來て、空には大きな黑い、穩かならぬ雲が被さり出して來た。まさしく雪空になつたのである。

夕方に大きな村へ來て宿を取つた。そこ〳〵に粗末な晩餐を濟ますと、師匠は私に向つて、

「さアすぐ寢るのぢや。明日は未明にこゝを立たにやアならん。さもないと雪に降籠められて、動きの取れぬ事にならうも知れぬ。」

師匠は泥輪まで是非とも雪前に行つて了ひたいといふのだ。泥輪は人口も五萬以上ある立派な町で、そこならば雪に降りこめられても、合間々々に四五回の興行は出來、宿賃や旅費は稼ぎ出せるだらうとの胸算であつた。

私は云はれるまゝすぐ床へ入つたが、師匠は料理場の竈の前へ行つて、ジョリカールを暖めてやつて居た。道中は着せられるだけのものを着せてやつたのだが、それでも小猿はがた〳〵と震へて居たのだ。

翌朝私等の起出した時は、まだ夜明前だつたが、空は眞黑で、低く、星一つ見えて居なかつた。私は何か大きな鍋のやうなものを、頭の上から押被されるやうな重い苦しい感じがした。戸を開けて見ると、鋭い風がピューと吹込んで、爐裏の灰を煽り、その中に埋てあつた、昨夜の燃えさしの薪に火をつけた。

私等がごと〳〵支度してるところへ、旅籠の主人が起きて來て、

「爺つあん、こりや追つけ雪だぜ。私なら迚も立てねえや。」

「でも乃公は急ぐ身體ぢや。雪前に泥輪まで漕ぎつけにやアならん。」



「だが爺つあん、八里の道程を一時間では行けめえが。」

私等は主人の止めるのも聞かずに出立した。師匠はジョリカールを風に當てぬやう、上衣の下へ抱込んだ。私は師匠に前の町で買つて貰つた羊の毛皮を着込んでるので、寒さも格別凌ぎよい。犬はまた嬉しさうに駈廻りながらついて來る。私と師匠は、何分風が眞向に來るので口さへ利けず、だんまりで急ぎに急いだ。

やがて夜は明離れたが、空は一向明るくならない。太陽は昇つても、黑い空に薄白い帶を引いただけで、夜ではたしかに無いが、晝とは云兼る空合であつた。そこら中黃昏てるやうに判然せぬのがいよいよ物悲しい。二三日以來立木は大抵裸體にされて居るが、道端の生垣や荊棘の藪にはまだ乾いた枯葉が殘つてるのを、最後の一葉まで篩ひ落さうとするやうに、風はいやが上にも吹きつけ、騷がしい、はしやいだ音を立てて私等を脅しつけて居た。野の道も岳も森も全く見捨られたやうで、その邊に人ッ子一人見かけず、只小禽の鳴音が風に雜つて聞える外には物の音も聞えて來ない。

白鳥の一群が亂れた聲を立てゝ叫びながら、一しきり空を掠めて飛んで行つた。

風が少し西の方に振かはつて來た。黃ばんだ重さうな、低い雲が、次第に西北の方から降りて來て、立木の頂きに止まるのかと思ふやうであつたが、程なく蝶のやうな大きな雪がぽつり〳〵落始めた。それが土にはつかずに上へ下へと宙を吹廻されて居た。此時私等はまだ餘り多くの道を來て居なかつた。私にはどうもこの容子では雪前に泥輪に行けさうに思へなかつた。その上私は雪が強く降り

出せば風が止んで寒さが増すだらうと心配した。
私はまだ此地方ではよく出逢ふ「雪荒」といふものを知らなかつたのだ。併しそれを知るには間も無かつた。そして私の胸には決して忘れられぬ記憶が作られた。
西北の方から押かけて來て居た低い雲が、今私等の上に來たかと思ふと、薄明りのやうなものが射して、ハッと思ふ間もなく私等は忽ちその雲の中に包まれて了つた。
それは雲ではなくて雪なのだ。もう蝶のやうな雪ではない。雨のやうに細かいのであつた。私等は息もつかれぬやうに厚い粉雪の中に閉籠られて了つたのだ。
師匠は絶望の叫びを發して、
「これでは迚も泥輪には行けぬ。どんな家でも見つけて飛込まにやならん。」
私はほつと救はれたやうに思つた。
けれども行手も何も見えぬこの雪に、どうして家を見つけ出す事が出來るだらう？
私等は今人家も何もない、峠と森の間を辿つて居たので、今迄は兎に角道もあつたが、この恐ろしい粉雪は瞬く間に、あらゆるものを眞白に埋めて、道も何も綺麗に隠して了つた。

## 狼の夜襲

丁度塵埃のやうに隙間といふ隙間から飛込む粉雪は私の袖口からも襟からも靴からも身體に入り込



むもので、それが次第に融て來る心悪さ。師匠はまた猿を抱へてゐるので時々息を抜いてやらねばならず、その都度懐に吹込む雪に難儀して居るやうだつた。それでも私等は遮二無二風と鬪つて、道もないところを進んだ。そして時々立止つて横を向いては息を吐いた。
犬ももう先へは進まず、勢ひなく私等の踵について來る。私等は今深い林の中へ入つて了つたらしい。いくら進む氣で鬪つても、先は見えず、身體は濕れる、凍る、疲れるので、少しも捗らない。私等の避難し得るところは容易に見當りさうもないのに、雪は刻一刻と降積んで來る。その中幸ひに風が少し穏かになつて、粉雪が大粒のに變つて來た。同時に少しは前の方が見え出したやうだ。
時々眼を擧て主人を見ると、主人は絶えず何ものか求めるやうに左の方ばかりを見て歩いて居た。私には只この春斧を入れたらしい空地が明るく續いて居て、合間々々に殘してある留木の若木が、弓のやうに雪を受て曲つてるのを見受るだけだ。師匠は何を見つめてるのだらう？
私は行手の方にばかり氣を取られて居た。森を出外れて家を見つけたい一心に凝固まつて歩いて居たのだ。けれどもどこまで行つても林は盡きない。いつまで立つても先の見通しが利かない。雪はどんどん降つて居る。この調子では林を出切る前に、私等は雪の中に埋められて了ふのだらう。
突然私は師匠が手を擧て左の方角を指し示すのを見た。私は早速その方角を見ると、件の空地の彼方に、黒ずんだ林を背後にして、眞白な小舍のやうなものが眼に入つた。
私等はこの小舍らしいものを目がけて急いだ。果してそれは丸太や枯枝で拵へ上げ、粗朶を屋根に

した一軒の小舍であつた。見る影もない茅屋であつたが、私等に取つては全く金殿玉樓である。犬は眞先にこの小舍に飛込み、下の土の乾いてバサ〳〵してる上を、嬉しさうに吠えながら塵埃を立てて轉げ廻つた。私等の喜びも犬には劣らぬがまさかに身體を乾かすため、塵埃の上を轉げる譯にも行かぬ。

師匠は私に向ひ、

「乃公は何んでもこゝに斧を入れてあるからは、どこかに樵夫小舍が有るに違ひないと、探しながら來たのぢや。もう雪などはいくらでも降れぢや。」

「あゝもういくら降つてもいゝね！」と私も調子づいて叫んだ。

さて小舍の戸口――と云つても戸も窓もないが、その入口へ來て、お座敷の中を濕つぽくせぬやうと、私等は丁寧に上衣と帽子の雪を拂つて中へ入つて見た。如何にも簡單なもので、大きな石や木の株が榻代りに置いてあり、隅の方にはその邊から拾ひ集めて來たらしい、煉瓦で圍つた圍爐裏があるといふに過ぎぬが、それだけでもう私等に取つては大したものだつた。圍爐裏があるから焚火が出來る！　何よりもそれが有難い。

併し焚火をするには薪が入る。雪が降積んで居るから、枯枝を拾ひに出る事も出來まい。それには差當り當惑するところだつたが、幸ひに小舍の四周と屋根が枯枝から出來てるので、小舍の安全を危くせぬ程度に、身の皮を拔取つてそれを燃やせばいゝ譯だつた。

早速小枝を拔取り圍爐裏に折入れて、マッチの火を移すと、パチ〳〵と心持よい音を立てて赤い焰



が、チヨロ〳〵燃出した。始めはなか〳〵巧く燃えつかないで、烟ばかり煙突の無い小舍の中に一杯になつたが、併し烟などには一向頓着なく、私は涙を出しながら、兩手で顱を吹いて居ると、犬は皆圍爐裏の周圍に集まつて、凍つた腹を暖めようとして居た。ジヨリカールは主人の上衣を中から捲つてまづ注意深く鼻の先を外に出して見たが、危險が無いと見て取ると、素早く飛下りて、一番いゝ場所を乘取り、小さな震へる手を火にかざして炙り始めた。此時はもう上等の火が出來て居たのである。

師匠はいつもの通り注意深く、朝ちやんと大きな麵麭と牛酪を用意して來たので、それを分けてくれた。けれどもその半分ほか分けてくれないで、めい〳〵少しの分量に有りついただけであつた。私の小滿らしい容子を見て取ると、

「こゝから泥輪まで行く間に、宿が見つかればよいが、どうも六ケしさうぢやし、それに乃公は此の森の勝手が一寸も分らぬ。一體この邊は森林の多い處で、雪が無くても迷ひ易い處ぢや。空模樣も見定めず、次の村への道程も知らずに決して出かけられるものではない。この雪の模樣ではひよつとすると一日二日こゝに籠城せにやアならぬかも知れぬ。そこぢや。食物を儉約する譯が分つたかの。」

不足の食事ではあつたが、私等はそれでも少からず氣力附いた。第一隱れ場所が出來て、その上焚火に事缺かぬのが、何よりも心强い。この上は雪の止むのを待つ許りだ。まさか一晝夜も二晝夜も降り〳〵けるといふやうな事もあろまい。

少し位の空腹は凌いでも、寒い北風に面を向け、的もない旅をするよりは遙にましだ。なにその中にきつと止むだらう。とかう自ら慰さめた。

けれども外を見ると一向止みさうな容子がない。雪は密集つて急速力で落ちて居る。風が止んだので殆んど眞直に、そして少しの小歇みもなく落ちて居る。もう空色も見えない。空よりは却て大地の方が雪明りで明るい。

暫らくすると犬は三匹とも火の傍に寢て了つた。私も眞似をしようと考へた。今朝は途方も無く早起をしたので、身體が溫もつて來ると眠くなり始めた。引切りなしに降る雪を見物して居るよりは寢て居て「白鳥」の夢でも見る方が氣が利いて居よう。

やがて一寢入して起出して見ると、もう雪は止んで居た。戸口へ出て見ると、雪は私の膝よりも高く積つて居る。これでは容易に出立する事も出來まい。もう何時だらう？

けれども私は師匠に時間を聞く事が出來なかつた。瀨戸を一緒に出てからは、興行と云つても一向捗々しくなく、迚も鶴巢で取られた罰金を取返すほどの收入はなかつたので、前の町で私に羊の毛皮を買つて與れた時には、例のカピに時間を讀まして居た銀側の大きな懷中時計を賣つて了つたのであつた。

空の容子でも一向時間は分らなかつた。大地が雪できらくする外、その邊は一帶に濁つたやうに曇つて居て、空には飛々に、明るい、黃色を帶びた汚い處が見ゆるだけ、どこに太陽があるのか分らぬ。今度は注意して何かの音を聞取らうと思つても、深い緘默の中に鎖されて、小禽の鳴音一つ聞えぬ。只時々樅の枝を滑り落る雪がさらくと音を立てる丈だ。

「民、お前、出かける氣か。」と師匠は中から聲をかけた。

「己等知らない。お師匠さんのする通りにする。」

「それならこの小舍に泊り込むとしよう。こゝなら寢床と火があらうといふものだ。」

只麵麭のないのが辛いがと、私は獨りで考へた。

「どうやらまだ降足らぬ景色ぢや。こゝを立つた上、また降出されて、夜道に迷うた日には事ぢや。」

いよくこゝで一夜を明すと極めたので、師匠はまた最後の麵麭を分けてくれた。けれどもそれはほんの僅許りで、迚も私等の飢を凌ぐには足らなかつた。殊に犬共には最も不足なので、食事が濟むと、カピは立つて師匠の用心袋に觸つて見た。食量品はいつでもその中に入れて居たのである。ところがもうその中に何もないのを見ると、カピはやつと得心したらしく、引返して來て仲間にも知らす風であつたが、例の食意地の汚いゼルビノはいつかな承知しないで、唸りつゞけて居た。

雪はいつかまた盛んに降出して居た。その邊の灌木は大抵埋められるまでに降積つた。今日は世間も早く暮始めて、もうそろくその邊が分らなくなりかけて來た。

夜になつても雪は止まず、眞黑な空から雪明の射す大地へ、綿のやうな大きなのが引切なしに落ちて居る。今にこの小舍も埋められて了ひさうだ。

師匠は私に向つて、

「民。代りに番をして寢る事にしよう。お前まづ寢るがよい。乃公は後でお前を起してから寢る。この雪では盗人や猛獸の心配もあるまいが、たゞ火を絶やさぬやうにするが肝腎ぢや。もしもの時の用心にもなれば、第一眠つてる中、火が消えると身體が知らぬ間に凍え上つて了ふ。雪が止めば寒氣が酷しくなるからの。」

私はもうすつかり濕氣の取れた羊の毛皮に包り、平たい石塊を枕に火を背中にして心持よく寢た。

師匠に起された時は、もう大分夜が更けて居たらしい。雪は止んで居たが、火はいつでも勢よく燃えて居た。

「さア今度は乃公が代るから、お前が火の番ぢや。時々枝を燻て居さへすればよい。これ見い。乃公が薪の準備をして置いた。」

見れば師匠は私の爲に、すつかり薪を集めて置いて呉れた。私はもう絶えず火の傍を離れて、枯枝を屋根や圍壁の中から引抜きに行く手數が入らぬ。私の爲には誠に難有い注意であつた。けれどもこれが師匠の恐ろしい失策で、そのため取返しのつかぬ大事件を産出す原因にならうとは、師匠は少しも豫期しなかつたのだ。

さて私がすつかり眠を覺して、職務を取始めたのを見ると、師匠はジョリカールを抱いて火の傍に横になつた。暫らくすると、師匠の寢息が高く規則正しく聞え出したので、私は爪先立ててそつと戸



口に出かけ、戸外の容子を伺つた。

雪は何ものをもすべて埋め盡して、見渡す限り一面凹凸の白布を敷きつめた樣である。空にはきらきらした星が蒔いたやうに散つて居た。蒼白い雪明りでそこら中が夢の樣に見渡される。寒氣は一しほ冴え返つて、小舍の戸口に吹入る風は刃のやうに凍つて居た。寂として靜まり返つた夜の沈默の間に、私は雪の面が凍てつくため發する、軋裂の入るやうな細かい音の、そこ〳〵に起るのを聞取つた。

私は全くこの小舍が見つかつたのは幸福であつたと思つた。もしこの小舍が見つからずに、林の中で日が暮れたら私等はどうなつたであらう。

私は音を立てずに戸口に出たのであつたが、それでも犬は皆眼を覺して了つた。ゼルビノは私について戸口まで來たが、この莊嚴な雪景色も彼の眼には何の交渉もないから、すぐに飽て小舍の外へ出て行かうとした。

私は手眞似でゼルビノの外出を制したので、いや〳〵引込んで行つた。全體何のためこの犬は暖かい火の傍を離れて雪の中をうろつかうとしたのだらう。私の命令には從つたものの、一度持つた考へを容易に捨てぬ頑固な犬だから、鼻をまだ戸口の方に向けて控へて居た。

私はなほ暫らく外を眺めて居たが、何だか泣きたさうになつて來たので、火の傍に引返し、少し太い木を三四本爆べて、私の枕にして居た石の上に腰をかけた。師匠は靜に眠つて居る。見事な火焔が渦を捲いて、屋根まで昇り、パチ〳〵と爆る音が深夜の寂寞を破る外には何の物の音も聞えぬ。私は

長い事火を見つめて、この爆る音を聞いて居たが、身體が次第に暖もるにつけ、だん〳〵倦怠く、眠くなつて來て、いつかわれ知らず知覺を失つて了つた。私は不覺の眠に入つて了つたのだ。

もし私が絶えず薪を拔取りに行く事を餘儀なくされて居たならば、私は決してこんなに正體もなく眠つて了ふ事は無かつたらう。併しそれは後の祭であつた。

突然に私は犬の吠え出す聲に眼を覺されて、我破と飛上つた。

小舍の中は眞暗であつた。疑もなく私は長い事眠つて居たのだ。火は殘らず消えて居た——少くも小舍を照らす火焔は上つて無かつた。

犬は絶えず吠えて居る。それはカピの聲であつた。けれども不思議な事に、ゼルビノもドルスもちつとも吠えない。

師匠は眠を破られて身を起すと、

「民、何ぢや？　何事ぢや。」

「己等知らない。」

「お前眠つて居はしまいの？　火が消えとるではないか。」

カピは戸口の方に飛掛つた。けれども戸口の外へ出ない。戸口に向つてけたましく吠えて居る。

あゝ何事が起つたのだらう？　私は全く顚倒して了ひ、師匠に何と返事する事も出來なかつた。

カピの吠ゆる聲に答へて、つひ近いところから二つ三つの苦しさうに呻く小さな聲が聞えた。私は



ドルスの聲だと思つた。それは小舍の後の方で聞えたのだ。ドルスの聲らしいと知つたので、私は默つて小舍から飛んで出ようとすると、忽ち師匠に肩を捕へて引戻された。

「まづ火を燃せい！」

私は云はれるまゝ、急ぎ灰を搔立るとまだ火は殘つて居た。枯枝を入れながら吹ひつくばつて火を吹きつけてると、その間に師匠は一本の燃えさしを取上げてそれを松明代りにしながら、

「さア出かけい。乃公の後につくのぢや。カピ。貴樣は先へ！」

私等が出ようとすると、小舍も震ふやうな、闇を劈ざく恐ろしい獸の聲が寂寞を破つて間近に聞えた。それを聞くと、カピは膽を失ひ、私等の足許に身を投げかけて畏縮んで了つた。

「狼ぢや！　ゼルビノとドルスはどこに居る？」

私は答へ兼ねた。疑もなくゼルビノは私の居眠の間を利用して、自分の思ふ通り外に出たのだ。ドルスはその眞似をしてついて行つたのだ。

二匹の犬は狼に掠はれたのではあるまいか。ゼルビノとドルスはどこに居ると師匠の聞いた調子で、私は師匠がこの恐怖を抱いた事を推した。

「民、お前も燃えさしを持て！　犬を救援に行くのぢや。」

私は村に居る間、狼の恐ろしい物語を數々聞いて狼ほど恐ろしいものは無いと思つて居た。けれども私はちつとも躊躇しなかつた。燃えさしを圍爐裏から取上げると、師匠の後に續いた。

小舍の前の空地へ出て見たが、そこには犬の姿も狼の姿も無かつた。雪の上には二匹の犬の足跡が印せられてある。そこを辿つて私等は小舍の周圍を殆んど一廻りしたが、忽ち犬の足跡は亂れて、雪が蹴散らされ、そこら中を轉げたらしい痕跡を見出した。

「カピ、探して見い！」と師匠がカピに搜索を命じ、同時に二匹の犬を呼ぶため鋭く口笛を吹いた。

けれども寂々として答ふるものはない。物凄い森林の緘默を破る何の物音も聞えて來ぬ。今の先凱歌を擧げたやうに吠えた狼はどこへ行つたのだらう。カピは主人に命ぜられたが、いつもの從順に似合ず、私等の足許に纏はりついて、決して離れようとしない。

私等の手にした燃えさしや、雪明りでは思ふやうに遠見が利かぬ。ちつとも先の容子は分らない。師匠はまた口笛を吹いた。聲を立てて二匹の犬の名を呼んでも見た。

私等は一生懸命聞耳立てて見たが、一しきり谺して師匠の聲が消えると、後は死んだやうな靜かさに返つた。私の胸は締つけられるやうに苦しい。

「不憫な犬どもぢや！　狼に掠はれ居つた！」と師匠は溜息吐いて「民、何でお前、犬を出したのぢや？」

私は答へる事が出來ず眼を伏せた。

「探しに行つて來ます。」

私が獨りで出かけようとすると、師匠はまた私の肩を押へて、



「これ、どこへ探しに行かうといふのぢや？」

「どこへつて——そこら中。」

「この深い雪に、暗い森の中を、どうして探しに行ける？」

雪は私の股を沒するほどに積つて居る。燃えさしの枯枝は、いつまでも壽命のあるものではない。またそれで森の中が照らされさうな事もなかつた。

「乃公がこれほど呼んでも答へぬのぢやから、二匹の犬はもう——よほど遠方へ掠はれたのぢや。うかうかして居れば狼は乃公等にかゝつて來ようも知らぬ。乃公等は武器を持つて居らぬのぢやから用心せにやならん。」

かうして二匹の憐れな犬——無くては叶はぬ美登里團の花形役者、私に取つては離れ難い二人の友達——を見捨てて了ふのは、何といふ無慘な事だらう。殊に私は自分の過失といふ重い責任を感ずるので、私自身が狼に掠はれた程に辛い。若し私が眠らなかつたならば、決して二匹の犬を外へ出すどころでは無かつたのだ。

師匠は小舍の方に足を返した。私は默つてその後に從つた。その間にも一足毎に振返つては、無益に何ものをか認め何ものをか聞きとらんと勉めた。

小舍へ入つて見ると爐裏の上へ投入れて置いた杜枝に、すつかり火がついて、あかゝと小舍の中を照して居た。けれどもこゝに新しい恐怖が私等を待つて居たのだ。

それはジョリカールの姿が見えなかつた一事である。ジョリカールを包んで居た掛布は火の傍にあつたが、偏たくなつて居てジョリカールはその中に潜つて居なかつた。

私はジョリカールの名を呼んで見た。師匠も呼んで見た。

けれども猿は一向姿を現はさない。

師匠は起出した時には、自分の傍に居たのを氣づいたと語つた。さすれば私等が小舍を出てから行方不明になつたのだ。

私等はよく燃えて居る枯枝を取上げて、小舍の外を尋ね求めた。どこにジョリカールの足痕らしいものもなければジョリカールの姿もない。

また、小舍の中へ引返して、今度は枯枝の隅にでも息を殺して居るかも知れぬと、小舍中隈なく家捜しして見た。同じ場所を十度も改めたばかりか、私は師匠の肩車に乘つて、屋根の枯枝をも仔細に吟味した。けれどもそれはすべて無效であつた。

私等は時々捜索を中止しては、ジョリカールを呼んで見るのだが、どこからも姿を現して來ない。師匠はひどく怒り出したが、私の方は絶望して居た。私は師匠に向つて若し狼が私等の留守中に入つて來て、猿も掠奪つて行つたのではあるまいかといふと、

「いや、狼は家の中までは入つて來ぬ。乃公の思ふにはゼルビノとドルスは外へ出たので、狼が待構へて掠つて行つたのぢや。ジョリカールも小舍の中に居さへすれば大丈夫なのぢやが、さうは思



はぬから、乃公等の留守中恐くなつて、どこかへ隱れたに違ひない。併しこの寒さに小舍の外へ出たなら、とてもジョリカールに凌げさうな事はない。狼に食はれぬ先に凍えて死んで了ふぢやらう。乃公はそれを心配してるのぢや。」

それではまた捜し直さうといふので、家捜しのやり直しを始め、外へ出ても見たが、依然としてジョリカールの姿は發見されぬ。何だか私には狼に喰れて了つたやうな氣がしてならぬ。

「この上は夜明を待つて捜す外ない。」と師匠は失望の調子で云つた。

「いつ夜が明けるの？」

「二時間か三時間の中に明けるぢやらう。」

師匠は兩腕で首を押へて、火の前に腰を卸したが、そのまゝ無言で居る。私には師匠に言葉をかけて見る勇氣はなかつた。たゞ師匠の傍に坐つたまゝ身動きもせず、時々手を伸べて薪を取つては火に爛べて居た。師匠は時々立上つては戸口に出かけ、空模樣を見、また頻りに聞耳を立てて居るが、暫らくするとまた舊の位置に引返して來て、默つて俯むいて了ふ。

私は師匠がこんなに默つて、むつつりして居らずに、思ふさま私を叱つてくれればいゝと思つた。私の粗相から二匹の犬のみならず、ジョリカールまで死なして了つては、どうして師匠に云譯があらう。また私等はこれから先どうして活きていけるだらう。私は泣きたいにも泣く事が出來なかつた。

早く明ればと待つ三時間が如何に長く辛かつたらう。この絶望の夜は、待つても待つても、決して

明離れないやうな氣がした。

それでもいつか星影が薄れて來て、空がほの〳〵と白け始めた。やがて夜は明渡つたが、寒氣は骨を刺すほど酷しく、戸口から入つて來る空氣は全く凍つて居た。

若しジョリカールを見つける事が出來ても、この寒さに果して今ごろ迄活きて居るだらうか？

師匠は壁から手頃の丸太を引抜いて武器とした。私も一本を引抜いて携へた。カピは昨夜畏縮んで居たに引かへ、今朝は元氣を出して主人の顏を守りながら、合圖を待つて駈出さうと待構へて居る。

私等はまづ小舍の周圍からジョリカールの所在を搜し始めた。それもジョリカールの足痕は無いかと見つけて廻るのであつたが、その間に首を擧て頻りに空の臭を嗅いで居たカピは、喜ばしさうに吠始めた。それはジョリカールが地の上に居ずに、天井に居る事を知らすのであつた。

成ほど見上げると、小舍の上に昨日の雪で、屋根とすれ〳〵までに撓んで居る樫の大木の枝がある。この枝からずつと幹の上の方まで見上げて行くと、可なり高い木の叉に棲つて居る小さな黑いものが見ゆる。

それがジョリカールなのだ。夜前狼の聲に脅され、私等の留守中屋根から脫けて、木の空へ避難したまゝ、臆病神に取つかれて、私等が呼んでも返事もせずにぢつとして居たのだ。

大の寒がりのジョリカールは、多分そこに凍つて居るのだらう。師匠は靜かに呼んで見た。けれど死んだやうに身動きもしないで居る。凡そ四五分間も呼んで居たが、ちつとも生命のありさうな容子



が見えない。全くジョリカールはそのまゝ死んで居るのかも知れぬと思はれた。

私は師匠に木登りをして見ようと云つた。師匠は危ないからと止めたけれども、私は村で大分木登りの名人であつた事を話して師匠を承知させ、雪のため昇り難くなつて居る樫の木に登つて行つた。それでもどうかかうか登りつけて例の木の叉まで行くと、ジョリカールはちつとも動かずに居たが、光つた眼で私を見て居るので、私はまだ活きてるなと、ほつとした。

が私が手を伸べて捕まへようとすると、ジョリカールは忽ち次の枝へ飛んで了つた。私も後を追つて辛く次の枝へと移つた。けれども人間と猿では迚も競爭にならぬ。ジョリカールはまた次の枝へと逃げて了つたが、私にはさう〳〵離れ業は出來ぬ。けれども幸ひと枝に雪があるので、ジョリカールも巧くは飛廻れず、その上衰弱してるので、二三度枝から枝へと滑り落ると、そのまゝ低い枝へ來て、主人の肩の上へ飛下り上衣の下へ潜り込んだ。

## ジョリカール先生

ジョリカールが見つかつたので、今度は兎も角犬の生死を確かめたいと、また雪の上の足痕を辿つて行つて見た。明るい朝の光に歷々指摘し得る二匹の犬の足痕は、明らかに前夜の悲劇を語つて居るのだ。

その足痕は小舍の裏手に沿うて、十間ばかり規則正しくついて居たが、忽ちそこで消えて了つて、

今度は森の彼方から大股に飛んで來たらしい、狼群の足痕と變つて居た。そして犬と狼の足痕の交叉點には、散々に雪が蹴散され、また犬が轉がされたらしい跡があつて、血はそこゝ雪を彩どつて居た。悲劇は私等の小舍から僅か十間ばかりのところで起つたのだ。

もうこの上犬の行方を突止める必要は無い。憐れなゼルビノとドルスは咽喉笛を嚙破られて、森の彼方に掠奪つて行かれたのだ。今ごろは荊棘の蔭で狼の腹を肥やして居るだらう。

それにしても私等は一刻も早く小猿を溫めてやらねばならぬ。そこで早速小舍の中へ引かへしたが、まだ善い火があるので、師匠はジョリカールを抱へて、丁度赤兒にするやうに、足と手を炙つてやり、私はジョリカールの覆布を暖めた。そしてその覆布の中に猿を包んで寢せた。併し此時ジョリカールに最も必要なのは、こんな薄い一枚の覆布でなくて、溫めた寢床と、溫かな飲料とであつた。

けれどもそんなものの持合せは素より有る筈もなく、火のあるだけがせめてもの幸であつたのだ。

私等は闇煖裏のぐるりに腰を卸したが、相も變らず、無言のまゝ、燃る火を見詰めて居た。

「不憫なゼルビノ！　不憫なドルス！　不憫な友達！」私等の口から漏れる吃きはたゞこれだけだつた。少くもそれは私等の心の叫びであつた。

彼等二匹の犬は幸福の時にも不幸の時にも、いつも運命を共にした仲間であり、友人であつた。殊に私に取つては師匠と離れて居た間の、忘れ難い慰藉の友であつた。然るに彼等は私の落度故に、大事の生命を失つたのである。若し私が師匠に命ぜられた職務を盡して居たならば、二匹を外へ出しも



しなかつたし、また小舍の周圍位へ出ても、小舍の中の焚火を見たら、狼が寄りつきもしなかつたらう。

私はほんとに師匠が怒つて私の折檻をしてくれゝばいゝと思つた。けれども師匠は私には何も云はない。私の方を見向きもしない。たゞ首垂れて火を守つて居るばかりだ。師匠は犬を失してこの先どうして興行をして行かうと絶望して居るのだらう。

今日は昨日に變る上天氣で、小舍の外は雪に反射する日光で眼も開けられぬ許りだ。

師匠は時々手をジョリカールの覆布の下へやつては、模樣を見て居るが、少しも溫まらない。私が布の上へ屈むと、ジョリカールのがたゞ〳〵震へてるのが聞える。とてもこの小舍の中で、ジョリカールの凍つた血を元に還す事の出來ぬ事は明かになつた。

師匠は立上りながら、

「此上は村を見つけにやアならん。こゝに居ればジョリカールは死んで了ふ。さア出懸るのぢや。」

覆布はなほよく暖めて、小猿を確と包み、師匠の上衣の下へ入れ胸の邊へ犇と抱込んだ。

いざ小舍を立たうとして、師匠は別れた告るやうに見廻しながら、

「飛んだ高い旅籠ぢや。身を切るやうな宿賃を拂はせられたわい！」

かういふ主人の聲は震へて居た。

主人は眞先に小舍を出、私はその後につゞいた。私等が歩き出しても、カピは暫らく小舍の戸口に

立つたまゝ、前夜自分の仲間の掠つて行かれた跡に鼻を向けたまゝ、ぢつとして居たが、呼ばれて漸く跟いて來た。

昨日は雪のため少しも見通しが利かなかつたが、今日はすぐにこの空地から木を曳出す車道を見出す事が出來たから、それを辿つて十分あまり進む中、大きな街道へ出た。丁度そこを通る荷馬車があつて馭者から一時間で村へ出られる事を敎へられた。

勇氣を出して歩き始めたものの、雪は私の腰を埋めるほどに積つてるので、その上を進む事は決して容易の事では無かつた。

時々私は師匠に向つて、ジョリカールの容子を尋ねると、相變らず震へて居るのが響くと云つて居た。その中に彼方に大きな村の人家が見え出したから一勇氣つけて急ぎ出した。

私等は今迄どこの町へ行つても、上等の宿屋へ泊り込んだ例は無かつた。いつも入口から出外れにある安宿を見つけては、そこへ落ちついたのだ。不思議な事に今日は二三軒の粗末な宿屋が、村を入ると間もなく目についたのに、それを見過してずん〳〵進んで行き、やがて村の眞中程に、金看板をかけた上等の宿屋を見かけると、師匠は遠慮もせず、そこへ入つて行くので、私も喫驚しながら後へついて閾を跨いだ。

師匠は旅宿の主人を見かけると、いつも安宿に入る時と違ふ、例の「紳士」の態度で、帽子も被つたまゝ、鷹揚に、火のある暖かな善い室に案内して貰ひたいと云入れた。



鬚など生した立派な宿屋の主人は、迂散臭いといふ風に私等を見て居たが、師匠の氣位ある容子が物をいふので、すぐに客室附の女中を呼んで、私等を一室へ案内させた。

早速女中が煖爐へ火を焚きつけ始めると、師匠は性急に私に向ひ、

「さア、早く床に入つて寢い！」

私は呆れて師匠の顏を見つめた。なぜ私が寢るのだらう。寢るよりか、私は何か早く食べさして貰ひたいのだ。

「これ、早く寢んかい。」

私は命令に從ふより外無かつた。

急いで上衣を脱いで、寢床の中へ潛り込むと、師匠は上置の鳥の毛入のふは〳〵した布團を私の鼻のところまで掛けてくれた。

「一生懸命溫もる工夫をせい。いくらでも溫もる程がいゝのぢや。」

全體私は何か大病人なのだらうか？　私の考へではジョリカールの方が溫もらなければならない筈なのだ、私はせつせと歩いて來たから寒くも何ともない。

それでも私は身動きもせず、ぢつとして一生懸命暖まる工夫をして居た。その間に師匠はジョリカールを出して、煖爐の前へ持つて行き、猿の炙燒でも拵へるやうに、ぐる〳〵憐れなジョリカールの身體を回轉しては炙つてるので、女中は呆氣に取られて見て居たが、やがて出て行つた。